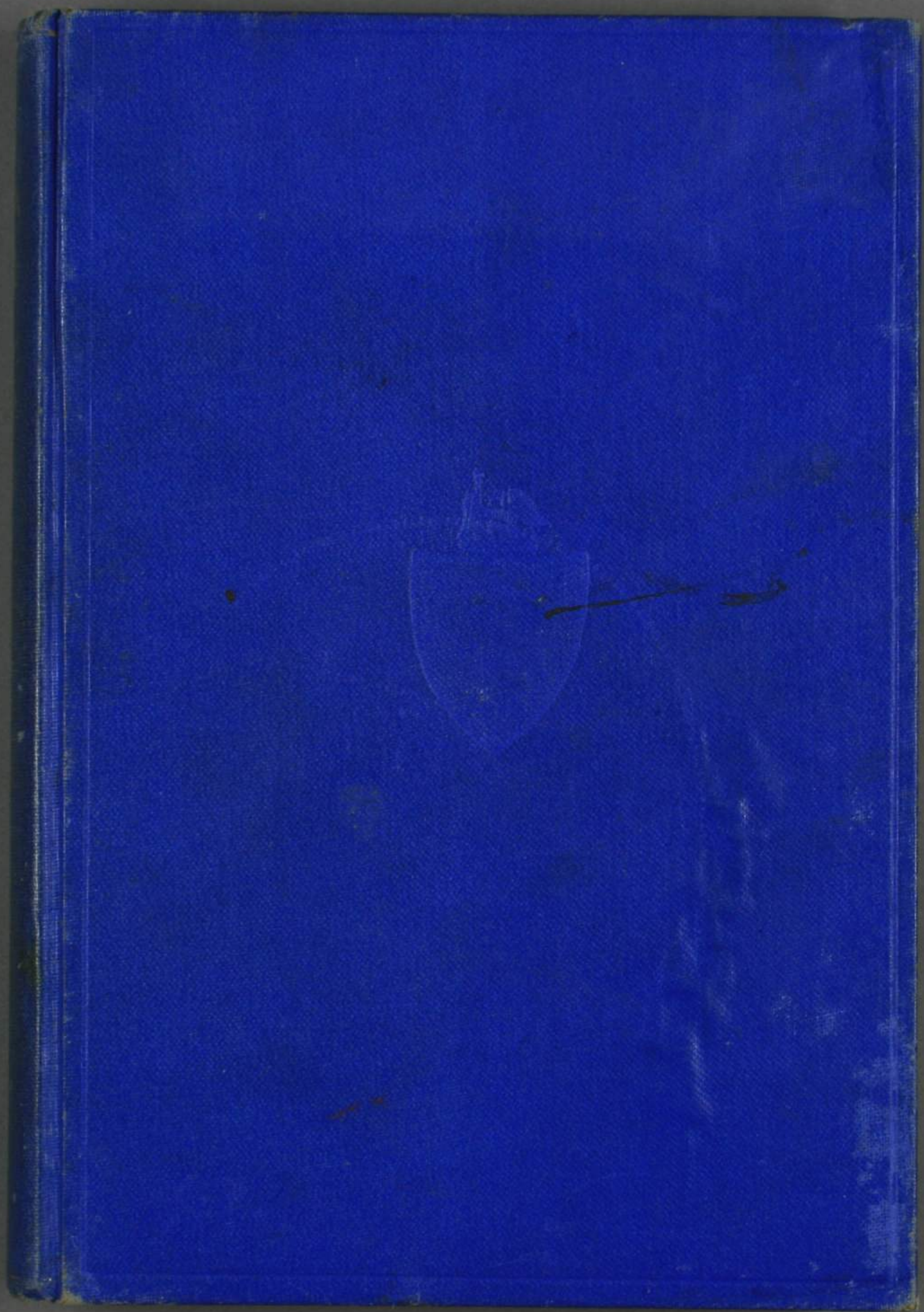


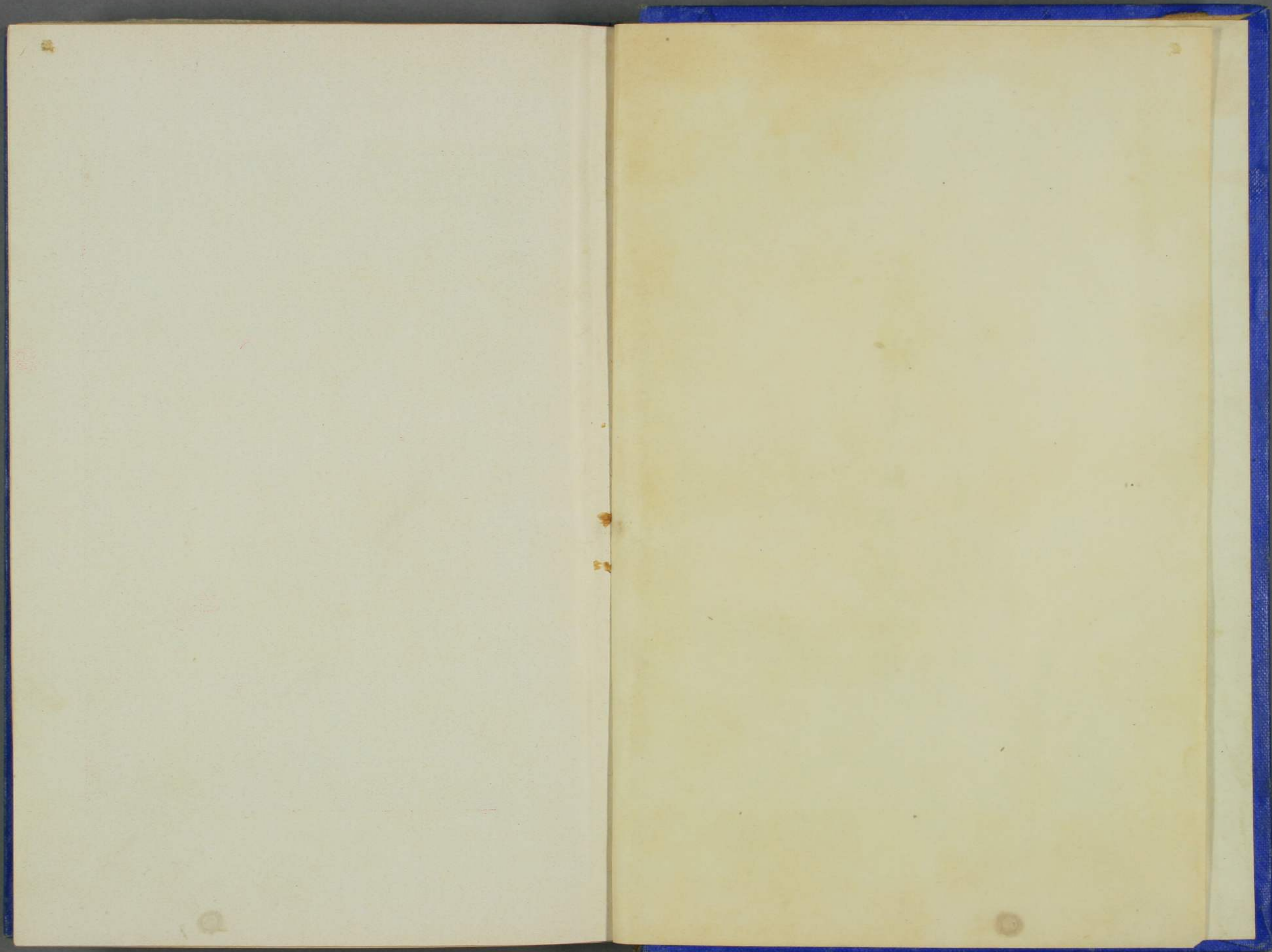
ハドレット

坪内逍遙譯



冲奈川縣 築山町 長柳

高橋 正太郎



ハダシト

坪内逍遙譯



*Henry Irving.*

ハ  
△  
レ  
ッ  
ト

坪内逍遙譯



Henry Irving.

ハムレット

ハムレット

丸山政男氏

1988.4  
寄贈

### 縮言

「ハムレット」の原名は、詳に譯すれば「デンマークの王子ハムレットの悲壯トシカなる傳記ヒストリ」、又は版によりては「デンマークの王子ハムレットの悲劇トシエデ」とあり。而して明かにシェイクスピアの名を署したるものは一六〇二年に初演せられ、其出版せられしは一六〇三年の四つ折本を初めとし、存生中に都合五版を重ねたり。沙翁學者の説によれば、其起稿は、早く

縮言

一



ば一五九八年頃、遅くも一六〇二年以前なるべく、年齢よりいへば、作者が三十四歳以後、三十八歳以前の作なるが如し。但し今日傳はれる普通の「ハムレット」(此譯の本とされる「ハムレット」の如きも其一)は一六〇四年に増補修正せられたるを土臺とし、作者の死後其友人等が出版せる二つ折本中の「ハムレット」を参照して成れる者にて、前にいへる一六〇三年本とは、内容も形式も、共に著しき相違あり。後の「ハムレット」(即ち一六〇四年版)は第一のに比して人性の觀察及び描寫、脚色及び詞藻、何れの方面より見るも際立ちて優れると勿論なると同時に、行數も一千七八百行

も多く、登場人名にも幾らかの相違あり、又齣の順序も同じからざる爲、筋の上にも小少ならぬ差異あり。例へば *Polonius* は第一作には *Corambis* とあり、*Reynaldo* は *Montano* とあり。*Osric* の名は無く、其代りに *Braggart Gentleman* (大言を吐く殿上人)とあり、又 *Fernando* も只「第一の番卒」とのみ記して名は無し。劇中劇の王と妃とは *Duke Duchess* とありて、名も *Albertus* にて *Corzago* にあらず。(現行本に此劇中の王と妃とが、ハムレットが白<sup>せり</sup>中に、公、公夫人となり居れるは、恐らく第一版の名残などなるべし。)又墓の場の *Yorick* の髑髏は、今の「ハムレット」には、二十三年土中に埋れたりとあれど、十

二、年云々とあり、これは例のやかましきハムレットの年齢問題に關係すれば、特に注意すべき價值あり。其他有名なる獨白「*To be or not to be*」及びオフィリヤに對する「尼寺云々」の問答が、第一版にては、ポローニヤスがハムレットの艶書を読む條及び「魚商云々」の問答の條と同じ場となりをれる、乃至劍に毒を塗ることを發案せるはレーヤアチーズにあらずして王なること、及び妃ガアツルードが先王の毒殺に關しては全く與り知らず、ハムレットの苦諫を聽きて後に、共に謀つて復讐せんと約する條及びホレーンオと妃とが内々にてハムレットが不意の歸國に關して協議

する條の添はりをれるなど、何れも注意すべき相違の點なり。

シェークスピアの作以前に(別種の「ハムレット」所謂 *Ur-Hamlet* (原作「ハムレット」)ありしこと乃至其作者の誰たるかに關する推測及び第一の「ハムレット」と件の原作との關係の如きは今は全く論せざることとし、こゝにはハムレット傳説の根源につきて少しく語る所あるべし。

最も古きハムレットの傳記はデンマークの史家 *Saxo Gram-*

*maticus* が紀元後一二〇四年に拉典文にて著し、一書「丁抹人之史」の第三卷及び第四卷なる *Amlethus* の物語なりとぞ。此書は一五一四年に刊行せられき。然るに一五七〇年に至りて佛人 *Bellforest* といふ者、右のサクソンの原著を殆ど筆任せに佛蘭西文に意譯して其 *Histoires tragiques* と題したる一著の第五卷に收めたり、これには *Amlethe* となりをれり。之を英文に譯したるものが *The Historie of Hamlet* にして、其出版は一六〇八年にて都合八章に互る長物語なり。さてシェークスピアは所謂原作「ハムレット」を基礎として其「ハムレット」を作りしか、若しくは直ちに佛文の「ハムレット物語」

に負ふ所ありしかといふ點は、學者の議論まち／＼にして一定せざれど、右の英譯に負ふ所無きとは略明かなり。「ハムレット物語」の英譯は寧ろシェークスピアの作の高評に促されて世に出でしものならんといふ。それはともあれ、右の英譯はフアネス氏の集注「ハムレット」の第二卷に原のまゝに載せられたれば、脚本との主なる異同を示すために、其大筋と緊要なるべき廉々とを左に掲ぐ。

基督教の未だデンマークに入らざりし未開の頃、又英吉利が該國の所領たりし殺伐の時代に、デンマークの王に

Roderick といふがあり、其國土を分割して州となし、州司を置きて之を管せしめたり。州司中に兄弟の者あり、兄を Horvendile 弟を Fenjon と呼べり。海賊業は時の譽れなりしが、Hor. は最も其道に秀でたりき。ノールウーの王に Collere といふ者あり Hor. の武名を嫉みて單騎格闘せんことを求む。應戦の結果 Col. 敗死し Hor. は敵の財寶滿船を得て歸國し、其の多くを國王ロデリックに献ず。王嘉して其一女 Geruth を Hor. に嫁す。Hamlet は其子なり。Fenjon 兄の名譽を妬みて亡きものにせんと欲し、先づ嫂を誘惑して弑逆を遂ぐ。(宴席にて暗殺し、罪を臣下に嫁す、

毒殺にはあらず)。Hamlet おのが身の危きを悟りて佯狂す。Fen. の黨與之を疑ひ Fen. に勧めて百方探偵せしむ。宮女中に Hamlet に戀慕せるものあり、之を使うて林中にて Hamlet に邂逅せしめ、戀愛に事よせて眞意を探らしめんとするにあり。Hamlet と育ちし一紳士竊に計畫を Hamlet に告げて警戒せしむ。Fen. 旅行すと偽りて林中に狩し、其不在中に妃と Hamlet とを一室に會談せしむ。顧問官某、室の垂帳の背に潜みて窺ふ。妃と Hamlet と室に入來る。されど Hamlet は聊も油斷せずして佯狂をつゞけ、頻に狂ひ廻り、手もて垂帳を拊ち試む。

何物か動くを覺り、*a yell a yell*と叫びつゝ、劍にて顧問官を刺殺す。寸々に切りて煮て豚に食はしむることなどあり。かくて母を罵り責むる語頗る長し。密談數刻の後、母は弑逆には關係なしと辨疏してハムレットに同心し、秘密を守り、復讐に助力すべしと約す。

*Fen.* はハムレットを英國に送らんとす。(密書の件、すりかへの件等、すべて沙翁が作の通りなり、只海賊船の一條だけは無し。)かくてハムレットは英國に渡り、*Fen.*の命と詐りて英の公主と婚し、やがて脱走す。時に本國にてはハムレットは既に死にたりと信じて葬儀を執行せる最中な

り。ハムレット夜に乗じて *Fen.* が館に火を放ち、恰も酔臥せる近臣等を焚殺し、同時に *Fen.* が寢室に闖入し、名宣りかけて首と胴とを二分す。

民衆は翌朝に至り焼跡に集り來り、頭足處を異にせる *Fen.* を見て駭く。復讐の旨意を辨じて民衆を鎮撫するハムレットの長演説あり。原本によればハムレットは一個の中の大兄にして果敢勇武の君主なり。人民悦服してハムレットを國君と崇む。ハムレット再び英國に赴きて其の妻を具し歸らんとす。然るに英王に異圖ありてハムレットを殺さんと企つ。ハムレット逆まに英王を殺し、二妃を

て歸國す。叔父に *Wiglerus* といふあり、野心を抱きてハムレットを襲ふ。第二の妃 *Hametwude* 敵に内應してハムレットを弑し、*Wig.* に嫁す、云々。

シェークスピアの「ハムレット」に比べて、ハムレットの爲人の著しく異なるを見るべし。シェークスピアのは基督教徒にして、かゝる未開時代の武人とは思はれず。又筋の上より見るに、第一の「ハムレット」の方、幾分か此傳説の趣に近し、疑ふらくは所謂原作の「ハムレット」劇は一段と筋に於ても主人公の性格に於ても此傳説に近きものなりしなら

ん。尙此點に關しては、附録せる「ハムレット」とキッドとの關係に就いて、讀者の一考あらんことを望む。

登場人名

デンマーク國王、クローディヤス。  
 先王の子にして現王の甥たる ハムレット。  
 ノールウェー王子、フォチンブラス。  
 侍従長、ホローニヤス。  
 ハムレットの信友、ホレーシオ。  
 ホローニヤスの男、レーヤアチーズ。  
 廷臣、ブルチマンド。  
 同 コオネリヤス。

同 ローゼンクランツ。  
 同 ギルデンスタアン。  
 同 オスリック。  
 紳士役一人。  
 僧官一人。  
 武官(組頭)、マーセラス。  
 同 バアナードー。  
 兵卒、フランシスコ。  
 ボローニヤス家來、レーナルドー。  
 俳優若干。  
 道外方(墓掘男)二人。  
 旗頭一人。

英國使節數名。

デンマーク王妃、ハムレット母、ガアツルード。  
 ボローニヤスの女、オフィリヤ。

其他、公卿、官女、吏員、兵士、水夫、使者役、從者等。  
 ハムレット父王の亡靈。

場所

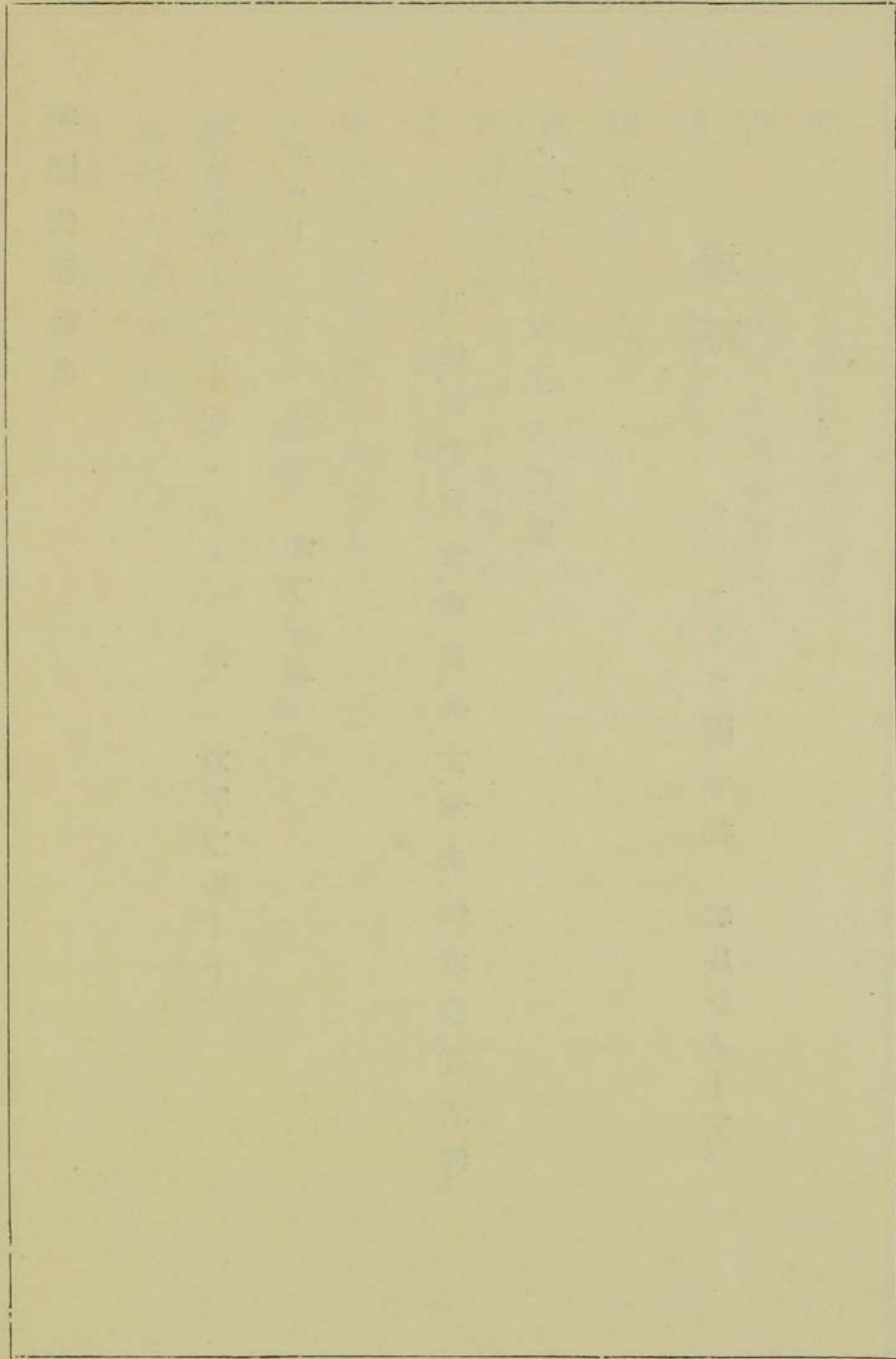
デンマーク國の都 エルシノーア。





*Edwin Booth*

登場人名





*Edwin Booth*

登場人名



# ハムレット

## 第一幕

### 第一場

エルシノーア。宮城前の高臺。深夜。

兵卒 フランシスコ 立番してゐる。

こゝへ細頭 バアナード 入来る。

バア 何者ぢや?

フラン あいや、其許こそ。 待て、名宣らしめ。

バア 今上萬歳!

フラン バアナードーどのか?

バア 中々。

フラン 刻限通りにようこそお出下されました。

バア 恰ど十二時を打つた所ぢや。退つて休ましめ。

フラン かたじけなうござる。嚴う寒うござる、心が切なうてなりませぬ。

バア 何も別條はおじやらなんだか?

フラン 鼠一疋出ませぬ。

バア む、休ましめ。自然我等が夜詰の同役、マーセラスとホレーシオとお

逢やつたら、急ぎ參られいと言うておくりやれ。

フラン けぶらひがしますやうな。……こりや、待て! 何者ぢや?

わが 若き學者ホレーシオと組頭マーセラス入來る。

ホレ 此國の良友。

マー まつた王家の忠僕。

フラン 安らかに過させませう。

マー お、其許にも。何人が代られたな?

フラン バアナードーどのでござる。安らかに過させませ。

はいと入る。

マー なう〜! バアナードーど!

バア さいふ御手前は……や、ホレーシオどのか?

ホレ まづは其様なもので。

バア ようこそホレーシオどの。ようこそマーセラスどの。

マー え、彼の物は今宵もまた出ましたかな?

バア 何も見ませなんだ。

マ一 ホレーシオどのには、何事も我々の氣の迷ひちやと申されて、我等が再度までも見ました怪異を眞とはせられませぬ。それゆる今宵夜と共に張番いたし、怪しい物が出ましたなら、目前實否をたゞいて一問答せらるゝやう御誘引申してござる。

ホレ はて、何の出ることがござらうぞ。

バア まゝ、懸けさしめ。何としても聽入れぬと取堅めてござる其お耳へ、二晩までも見ました始終を改めて語りませう。

ホレ さらば斯う腰を下いて、バアナードどの、お物語を承りませうす。

バア 正しう昨夜の事でござる。北斗星の西に當る、あれ、あの星が、恰ど唯今光りをる邊へ參つたころ、マーセラヌと身共とが張番の致いてをると、折しも鳴渡る一時の鐘……

マ一 しつ、だまらしめ。あれ、あそこへ現れました！

先の王ハムレットの亡靈現れる。

バア お崩れあつた先君をそのまゝのあの姿

マ一 其許は學者ぢや程に、言葉を掛けて見さしめ。

バア ホレーシオどの、先君のお姿に其儘でござらうかの？

ホレ いかにも。不思議とも又怖しいとも、身の毛がよだちまゝする。

バア どうやら物を言うてほしさうな。

マ一 何か問うて見さしめ、ホレーシオどの。

ホレ 汝本來何者なれば、故のデンマーク大君の武しく莊嚴しい御軍装を借り奉つて、此様な深夜には横行のするぞ？ 敢て汝に命するわい、語れ。

マ一 氣に逆うた。

バア あれ、だん／＼と立退きまする！

ホレ 待て！ 語れ、語れ！ 敢て汝に命するわい、語れ

亡霊消える。

マ

消えた。返答は好まぬげにござる。

バ

ホレーシオどの、何とちや？ 顛うて蒼ざめてゐめさる。何と、氣の迷ひ

とばかりも申されまい。どうでござるの？

神以て、此肉眼の正しい證據がござらなんだら、能う信じますまいわい。

先君に似申してをりませうかの？

ホレ

其許が其許に似てゐめさるやうに。あの甲冑こそは傲慢なノールウェー

とお手合せの折の物具。あの憤怒の面持も言葉戦は無益とてポーランド

の氷原にて、櫓に乗れる敵兵を懲らされた折の眼光。ても不思議な！

此通り再度まで、時刻とても同じ深夜に、我々が見張の間近を、出陣の歩調

で過りました。

ホレ

仔細には考慮も及びませぬが、唯大旨を申さうに、こりやこれ何事か當國

に珍變の起る前表。

マ

はて先づお下にござれ、承知りたい儀がござる。近頃何とも心得がたい

は、國內を舉り斯く嚴重に夜の目をも合せぬ警戒、毎日の大砲鑄造、まつた

外國より夥しい武器の買入、剩さへ船大工を驅集めて休日も與れぬ苛酷い

賦役。如何な大事がさしかつて、此様な晝夜兼行、火急の準備には及び

申すか？ 御案内の御仁はお聞せ下されう。

ホレ

その儀は我等がお話申さう。とにかく噂は斯様でござる。現に今がた

も見えさせられた先君の御在世中、かたぐも知らるゝ通り、前のノール

ウェー王フオオチンブラスが不遜の高言を怒らせられ、一騎打のお手合せ

あつたる所、名に負ふ勇猛の先君とて、フオオチンブラスは其場に落命。

豫て武門の掟に照らいて取結ばれたる契約によれば、フオオチンブラスは

一命もろとも其邦土を失ふべき筈。もつとも之に對して相當の所領を賭

けられたれば、此方御不利ともなるときは、それが敵の手に落つべかりしを、同じ契約の明文によつて敵方の御手に入つた。然る所一子同苗フオオチンブラス、血氣無謀の若者、此度ノールウエーの邊境にて、事を好み餌に群る命知らずの暴徒をこゝかしこより驅催すは、一定茶威を以て父が舊領を取戻さん結構と廟議一決、さてこそは此手配、徹夜の警戒も國內上を下への騒動も、畢竟はこれが爲とぞんずる。

バア

何さま、それに相違ござるまい。さすればあの物の怪が、此軍には因縁深き先君さながらの甲冑姿で、夜通しに現るゝも有理でござる。

ホレ

心の眼を痛むるは微塵。むかし羅馬全盛のころ、大シーザー落命の少しき前かた、墳墓悉く主を失ひ、墓衣を被たる亡者ども羅馬の街頭にをめき叫び、白日に光なく、星は火焰の尾を曳き、血の露降り、大海原を自在に扱ふ大陰も、世の果かとはかり、全く光を失うたとやら。それによつて似た異

變の前表、凶事の前驅、不祥の兆を當國人に見する天地の變象……や、しづかに。あれ、またあしこへ。

亡靈再び現れる。

どりや吾等が遮つて見う、祟を受けうとまよ。……待て、怪しきもの！ 汝聲あらば、能う物を言ふならば、予に語れ。……予には功德ともなり、汝には心安めともなる事のあらば、予に語れ。……知らば避けらるゝ國家の不祥を知りてあらば、お、語れ！……或は噂の如く、生前地中に埋めおいたる不淨財に執念残つて、能い浮ばずに彷徨ふか？ ならば語れ。待て、語れ！……

鶏鳴く。

お止めなされ、マーセラス。

マー 此鉢で打ちませうか？

ホレ といまらずはお打ちなされ。

バア こゝちや！

ホレ こゝちや！

マー 消えてしまつた！

亡霊消える。

あのやうな氣高い物をば手荒う扱つたは悪うござつた。空氣も同様に何の手ごたへもござらぬのに、毆打擲は効ない調戲ぢや。

物を言ひさうでござつた處に、鶏めが啼いたので……

バア

怖しい招喚を科人などが受けたやうに、怖れ戰いたる其風情。傳へ聞く、

且を知らず鶏が朗かな喉を開いて大日輪を呼覺せば、海中火中空中乃至土の中を彷徨ふ精靈も懾れ隠ると、證據を見しは今が始めて。

マー

げに鶏の聲で消え失せました。救世主の御降誕をお祝ひ申す季節となれ

ホレ

ば、お威徳のあらたかさに、曉告鳥は夜すがら唄ひ、亡者も畏れて出歩かず、眞夜中も無事息災、星や變化も能う祟らず、魔を使ふ婆も其通力を失ふとやら。

我等もさやう聞及うで半は眞とも信じます。したが、あれ御覽ぜ、朝日が紅の衣を被り、あなたに高き東方の岡邊の露を踏昇る。夜の見張もはや是まで。何と昨夜の顛末をばハムレット様に聞え上げうではござるまいか？ 吾等に答へぬ亡靈も王子には口を開きませう。御同意ならばさやう致さう。さるは王子を思ふ吾等、眞情まつた忠勤でもござりまする。

マー

それこそは望む所でござる。幸ひ今朝彼の君のお目にかゝる便宜の場所を身共心得をりまする。



第二場 同じくエルシノーア王城 城内の大廣間

喇叭の聲の中に國王クローアヤス先に、妃がアツルード、ついで  
て王子ハムレット、侍従長ボローニヤス、其男レーヤアチーズ、朝臣アル  
チマンド、コオネリヤス、其他の公卿侍者多勢入來る。

王

親兄故ハムレット 王崩御の記憶今も尙鮮かなれば、おのゝ深き悲歎に沈  
み、全國擧つて一つ眉根に顰まんが相應しき振舞なれども、哀んで傷らん  
は愚かなれば、吾等分別の以て至情と闘ひ、深く故王を哀みながらも國主  
たる身の本分をも忘れず。すなはち堪へがたき悲歎を忍んで、悲喜哀歡  
を等分に、一眼には涙を垂れ、一眼には笑を含み、祝うて故王の葬儀を了へ  
泣いて新婚の式を行ひ、前の嫂たるガアツルードを此度改めて妃となし、  
此デンマークの主權を分てり。まつた豫め此儀については廣く聰明の御

身等に詢り、十二分の談合を経たりし條、深く満足に思ふぞよ。……さて改  
めて申すべきは、面々もぞんじの如く、若輩者のフォオチンプラス、予をば  
庸主と侮つてか、但しは親兄の崩御によつて國內亂れたりと臆測つてか  
夢の如き便宜を恃んで煩しう使者を送り、先年其父フォオチンプラスが契  
約の明文によつて我勇敢なる兄君に獻げ奉りし舊領地を取戻さんす結構  
彼れが事はこれまで。……さて今日一同をかく集へつる仔細は、右フォオチ  
ンプラスが叔父ノールウェー王こと、近年老病にて臥床を離るゝこと叶は  
ざれば、かゝる陰謀あるを知らず、されども此度の徵募に従ひまつた賦役  
に應ずる輩は何れも彼れが配下の者ゆゑ、之を制へ止めんことは彼れが力  
に能はん筈。すなはち其旨を認めおいたり。……コオネリヤス、ブルチマ  
ンドの兩卿には、此挨拶の使者となつて、老ノールウェーが許に下向ある  
べし。たゞし御身たちに委ぬる所は、かまへて此書中に認めたる細目の

外に出づべからず。さらばちや、すみやかに命の果いて忠勤の程を見せられい。

デコロ

如何なる儀の嚴命にもあれ、忠勤の盡し奉りまする。

王

さもあらう。恙なうお往きやれ。

アルチマンド、コオネリヤス入る。

さてレーヤアチーズよ、御身の申條は如何なる儀ぢや？ 願事とおしやつたが、それは何ぢや？ 道理に合うた請願ならばデンマーク王が聴かいで

ならうか？ レーヤアチーズよ、御身が請ふことならば、請はれてやがて遣すのではなうて此方から望んでも遣すのぢや。御身が父御とデンマーク王

座との交情は心と頭、手と口とよりも懇親ぢやわい。レーヤアチーズよ、おぬしの望とは何ぢや？

レー

惶れながらフランス國へ再遊の儀を何卒御裁可下されませう。御即位を

王

賀し奉らうため、喜び立歸つてはござりますれど、大典滞りなく相濟み公務も果ましたる上は、改めてフランス國へ立戻りたき微臣が衷情、何卒御仁察下しおかれませう。

ポロ

して父御には異存無いか？ ポローニヤス、御身の意は？ 惶れながら、倅めが切なる請願、押問答の末に餘儀なう彼れが願文へ承引

王

の仕りました。何卒お聽届遣されますやう願上げます。レーヤアチーズ、此上は便宜次第に發足お爲やれ。時はお主のまゝちや、

ハム

めでたう日を送りませい。……さて、ハムレットよ、甥と呼うだは前の日、今は我子……

ハム

（傍を向いて）親族以上なれど、肉親とは思はれぬわ。はて、心地でもあしうてか、常住曇りがちな其面色？

ハム

いや、曇つてはをりませぬ、いつそ日あたりが好う過ぎます。

妃

いやなうハムレット、その愁はしげな色をふりすて、なづかしう君に事へ  
さしませ。いつまでも伏目がちに冥府なる君を慕はんも効なし。生あ  
れば死あり、人は此生を経て永劫の未來に赴く。これが浮世の常ぢやわ  
いの。

ハム

母上、げに常でござります。

妃

すれば何として其方の目には常ならぬこと、見ゆるぞ？

ハム

見ゆるとや、母上？ いや、さうあるのぢや。見ゆるとやは知ることで  
ござらぬ。まこと小子が心中の有りのまゝを表すは此墨汁色の外套でな  
く、此定例の喪服でなく、わざとらしい吐く溜息で無く、川と溢るゝ涙でも、  
萎れ顔のへし口でも、いや、ありとある愁歎の式、作法、外容でもござりま  
せぬ。げに是等こそは見ゆるもの、誰れにも擬事の出来るわざぢやが、そ  
れがしが心中には眼に見えがたいものがござる。其等は只愁傷の飾や衣

三

服に過ぎませぬ。

ハムレットよ、さやうに亡き父御をお歎きあるは孝子の殊勝な情操と感  
入ることなれども、またよう辨へたまへや、父御も嘗て其父御を失ひ、其失  
ひし父御とてもまた其父御を失はれたり。後れたる子が喪に籠つて暫く  
哀悼の禮を盡すは、げに然るべき情義なれども、さりとして頑なゝる哀傷は、  
第一神明に不敬の憚り、次に男らしからぬ愁歎、すなはち天に對しては非  
禮、心に信仰の守護無き證、短慮無智愚昧のふるまひ。何故とお言れ、か  
くあるは必然にして世の常事と悟りながら、何とていつまでも思ひ入り、  
氣むづかしく歎き哀まらんや？ あさましう！ かくの如きは神に背き、死  
者に背き、自然に背き、最も道理に悖れるわざぢや。父親の先だつは古今  
の定理、世に最初の死屍あつてよりこのかた、道理は常にかくあるをば「必  
然の理」と呼ばうたわい。こりやハムレットよ、詮無き哀傷を地に抛つて

予をば實の父とも思やれ。すなはち國民に、御身は即て王位を繼ぐべく、  
まつた予が恩愛は慈父に異ならずと知しめ給へ。さて彼のウイッテンバ  
アの大學へ再び赴かんの思立は予の最も好まぬ所、願はくば、近親とも、  
重臣とも、我愛子ともなつて、我等が面前に留りめされ。

妃

ハムレットよ、母の祈をば徒らになお爲やつそ。なう、こゝにゐや。ウイッ  
テンバアグへは往かしますな。

ハム

力めて御心に従ひませう。

王

はて、それこそは殊勝な返答。此上はデンマークに留り、吾等と同様に世  
を送りやれ。……妃よ、おじやれ。ハムレットの柔順なる承諾にて、心の花  
も笑む心地ぢや。其めでたさを祝はんため、只今より酒宴の開き、同時に  
賀砲を雲に放たば、天また王家の賀宴を祝うて地上の霹靂に響應せん。……  
いざ彼方へ。

ハム

喇叭の聲の中に皆々入る。ハムレット一人残る。

お、此硬き剛き肉が、何とて溶け融解けて露ともならぬぞ！せめて自  
殺を大罪とする神の掟がなくなばなあ！おゝ！おゝ！現世一切の業  
務が悉く厭はしうも、あさましようも、あぢきなうも、無益しうも思はるゝわ  
い！ちえ、あさましいわい！實を結ぶ毒草を抜きもやらぬ荒庭ぢ  
や、臭い穢いものばかりが一面にはびこりをる。これほどにならうとは！  
お死にやつて只二月！……いやまだ二月にもならぬ程ぢやに。あのやう  
な比類稀なる國君！それと此とを比ぶれば日の神と羊の怪物、母上の面  
をば荒い風にもあてまいと愛しがりめされた父上。ちえ、情なや！  
思ひ出さねばならぬか？睦じうなさるゝにつれて、彌いとしさの募る  
かとはかり、離れがたなうも見えさせられた母御が……まだ一月も経たぬ  
うちに……いやゝもう思ふまいぞ。……あ、脆きものよ、女とは汝が宇

ちや！……たつた一月！……ニオベのやうに涙にそぼつて柩をば送らせられた其履もまた古びぬに……母上が、母上すらも……おゝ！……分別無き獸とても今暫は歎いつらうに……叔父ぢや人と御再婚、我父の弟ながら、此ハムレットがハアキュリーズに似たる程にも似ぬ弟と。一月も経たぬ間に？ 空涙に摺りあかめた臉の色さへもあせぬうちに。おゝ、無慚非道！ 邪淫の床へかうまで待兼ねたやうに急ぐとは！ 是れ一定善い事でおりにない、大凶事のもとゐたらうぞ。……や、誰れか來をつた、むゝ、此胸が裂けうとまゝ！

ホレーシオ、マーセラス、バアナードー入來る。

ホレ 御前の御安泰を祝しまする。

ハム

おゝ、堅固でめでたいなう。や、ホレーシオ……但しは予の僻目か？

ホレ

御意の通り、臣ホレーシオでござりまする。

ハム

こりや、兄よ、その呼名は取換へうぞ。して何としてウイテンバアグから此處へは？……おゝ、マーセラスか？

マー

御前さまには……

ハム

ようおじやつたの。……(バアナードーに對ひ)おゝ、ようこそ。……(ホレーシオに)實正どうした仔細あつてウイテンバアグから遙々こゝへは？

ホレ

のらくら根性からでござりまする。

ハム

いや、其様な悪口は御身の敵からでも聞きたうない。まして自身で悪ういうてそれを予に信ぜさせうとは以ての外ぢや。なんで御身が懶惰漢であらうぞ。したが此エルシノーアへお出でやつた用事は何ぢや？ ようせぬと逗留中に暴酒飲むことを教へられうぞ。

ホレ

實は御父君の御葬儀を拜まうとて參りました。

ハム

はて弄るまい。おそらく母上の御婚儀を觀うためであらう。

ホレ げにおつしやれば、間も無う御慶事。

ハム なそれ、儉約！儉約！ 葬式に用うた炙肉をば即て婚禮の膳部へも廻す冷

いもてなしぢや。あのつれな目を見う程なら怨重なる讐敵と天で逢うた

はうがましぢやわい！ 父上が……父上の顔が見ゆるやうぢや。

ホレ え、何處にでござりまする？

ハム はて、予が心の眼に。

ホレ それがしも嘗てお目通りを致しましたが、眞に氣高いお容姿。

ハム 何處から如何やうに查べうとまゝ、又とあるまじい人であつたわ。

ホレ 御前、正しう昨夜お目にかゝつたかと存じまする。

ハム お目にかゝつたとは、そりや誰れに？

ホレ 御父君に。

ハム 父君に！

ホレ まづく、御驚愕を鎮めさせられ、暫くお聽下されませうす、只今聞上げま

する近頃不思議の一條、その證據人は此れなる人々。

ハム さ、その仔細早う聽かうぞ。

ホレ 二夜までも引續き此なる兩士、マーセラズ、バアナードーが夜詰の折節、草

木も眠る眞夜中に、世にも不思議の姿を見たり。其姿といつば、頭より足

の爪先まで、甲冑隙間もなく取りよろひ、御父君をさながらの容態にて現

れ出で、おごそかなる出陣の歩調にて、怖れ戦ける兩士の面前僅か二三尺

を隔て、徐々と通行なす。兩士は餘りの怖しさに、膽魂も溶解る心地、口

を緘み立つたるまゝ、物言ひかけも能せなんだと、さも怖しげに内々の物

語。それがし乃ち兩士と共に第三夜の夜詰を仕りしところ、聞きしに違

はず、時刻も姿も、片言の相違無く、現れいづる怪しき幻影。先君を存じ

をりまするが、其お姿に似たとはおるか、此兩つの手のお似たる程にも。

ハム して其場所は？

マ一 我々どもが見張を致しをりました  
る高臺にござりまする。

ハム 物言ひかけてはお見やらなんだ  
か？

ホレ 言ひかけては見ましたなれども、返  
答は仕らず、尤も一たびは頭を擡げ  
て何か言ひたげにも相見えまして  
が、折から啼き出す鶏の聲に戦も縮  
んで消え失せました。  
ハム ても不思議な。  
ホレ 憚りながら、此儀神以て相違ござり



ハム ませぬゆゑ、有りのまゝに言上いたすを臣下の本分と存じまして。  
いかにもく、とはいへ何とも心がり。今宵もお身たちは夜詰をする  
か

バマ一 御意にござりまする。

ハム 甲冑を着けてゐたと申すか？

バマ一 さやうにござりまする。

ハム 頭より爪先までも？

バマ一 御意の通り頭より爪先までも。

ハム すれば顔は見えなんだな？

ホレ いや、見えますしてござる、顔當が引上げてござりました。

ハム え、不興げに見えたか？

ホレ 御不興と申さうよりも寧ろ悒鬱のお面持。

ハム 蒼白う見えたか、但しは赤かつたか？

ホレ いや、きつう蒼ざめて。

ハム 御身をば見詰めてゐたとお言るか？

ホレ まじろぎもなされず。

ハム 予も其場に居合せたかつたわい！

ホレ すれば、嘸愕かせられましたらう。

ハム さもあらう。長う留つてゐたか？

ホレ されば相應に急ぎまして百を算へまする程の間。

バマア いや、まじつと長う。

ホレ それがしが見た折にはそれ程でござつた。

ハム 鬚は灰色であつたか？……どうぢや？

ホレ 御存生中にお見受申しました通り、黒い中に銀色が混つてをりました。

ハム 予も今宵は見張をせう。或はまた現れ出でうす。

ホレ 一定現るゝでござりませう。

ハム 父上の御姿を装ふからは、たとひ地獄が脚下に開いて物言ふなと禁むるとも、予誓つて言葉をかけうぞ。いやなう、おのゝくに依頼がある、今日ま

で此儀をば秘し隠し隠し隠したならば、此上とも口をつぐみ、今宵如何様の事起るも、只胸の中に合點なし、ていと口外致すまいぞ。御身等の誠意に

早晩報ゆる時もあらう。さらばぢや、十一時と十二時の間にて見張場でまた逢はうぞ。

三人 謹んでお勤をば盡しまする。

ハム はて、お互ひに誠意をば。さらばぢや。

父上の亡魂が甲冑にて！ 不祥の前表。さては隠れたる悪行あるよな。



え、夜の來るのが待遠しいわい！……それまでは肅としてゐいよ、我心よ。……悪事はやがて露はれうぞ、たとひ大地を以て人目を遮るとも。

ハムレット入る。

第三場 ポローニヤス邸の一室

レーヤアチーズと其妹オフィリヤと入來る。

レー

必要の品々も積込んだれば、さらばぢや。いもうとよ、出船順風の便宜のあるたび、居眠つてゐいで消息を爲やれよ。

オフ

すまいとばし思つてかや？

レー

ハムレットさまの、あの空めいたおいとしがりはな、結局一時の浮氣心、若い氣分のざれ事、いは、春育ちの莖の花ぢや、早咲なれば萎るゝも早く、美

オフ  
レー

しうはあれど當座の詠ぢや、香も慰みも徒の束の間、只それほど思ふがよいぞよ。

すれば只それほどの？

只それほど、思つておゐやれ。

總別人の

育つは筋や嵩ばかりでない、五體の太うな

るにつれて、心や魂の、内なる作用も大

きうなる。今こそは彼の君、そなたを可

憐らしうおもうて、假にも欺からうなどと

いふ汚い御心もおじやらすまいなれど、安

心のならぬ仔細は、下賤とは事かはり、御

自身の意さへも我物にして我物ならず、萬

事お氣儘にもなされにくい大切な御身



分柄ぢや。君たる人の取舍一つに國中の安危が係るからには、下々一同の意見望を詢はしめた上で、お妃定めなどもあるべき筈。なりや可愛いと仰あるとも、其格段な御身分で能はん程の御約束ぢや、所詮はデンマーク國中が應と言はねばいつ何時反故となるとも知れぬと思つて、眞にうはぬが利根な分別。軽々しう彼の君の甘い言葉に耳傾け、情の限を打込み、放埒な仰のまに〜二つなき操の實を穢さは、取返しのならぬ一期の身の辱。いもうとよ、恐れても又恐れませうぞ。とかく情の後陣に退つて邪淫の矢鋒を避くるが肝腎。謹慎深い處女は月に素顔を見するをさへ不檢束と思ふとやら。淑徳の權化でさへ能う免れぬは世の讒謗。春の幼い花の蕾はまだ咲かぬうちに螟蛉に食はれ、人もうら若い水の出花の春先には、とかく根を枯らす毒氣に觸るゝ。かんまへて油斷すまいぞ。用心は萬全の策。若い時分は我れから誤つ、誰れ一人誘はずとも。

オウ

そのお教訓は、妾の心の護衛にして、必ず忘るゝことでは無い。したが兄上、ともすると我が訓を人は自身では能う守らぬ。不品行な牧師は、他人には天へ往けというて險阻な荆棘路を教へておき、自身は放埒な人のやうに、あだ美しい花の咲く自墮落な道を通るとやら。そのつれなことをさしますすなや。

レー

おゝ、予が事は氣づかひ無用。つい時刻を過したわい。や、父御がわせられた。

ポローニヤス 入來る。

又のお祈禱は又のお恩恵。はからぬ幸運にて再度のお暇乞を仕りまする。

ポロ

まだこゝにか、レーヤアチーズ？ さ、船へ〜どうしたものぢや！ 帆は既に風を孕んで、一同が待ちかねをるわい。さ、おぬしの冥福！ まつ

た聊か申聞かせおくべき條々。彫りつけておきめされ。……考慮をうか  
と舌に出すな、機に合はぬ考慮は行ふな。友とは親め、さりながらかんま  
へて狎れるな。試験済の友達は逃さぬやう鐵箍をはめておけ。但しま  
だ翼も生え揃はぬ巢立たぬ知合と握手して手の掌の皮を厚うするな。喧  
嘩口論には關係ぶな、されど關係うた上は骨のあることを敵手に知らせい。  
誰が言葉にも耳は貸せ、口は誰が爲にも開くな。誰が意見も聞くは可し、  
我意見は言はぬが可し。財囊が許すならば身の廻りには金目を吝むな、  
但し異様な好みはすな。立派は可し、華美はわるし。衣裳は數々人を表  
す、別けてフランスの上流は此道の大通生粹。借手にもなるな、貸手にも  
なるな。借金は儉約の刃鋒を鈍くし、貸金は動もすれば其元金を失ひま  
た其友をも失ふ。最後に最も大切なる訓……己れに對して忠實なれ、さ  
すれば夜の晝に繼ぐが如く、他人に對しても忠實ならん。さらばちや。



我祈禱の功德を以て長う其方の心に銘せん。

謹んでお暇乞を申し上げます。

さ、時刻が迫つて僕共が待ちかねをるわさ。

いもうと、さらば。今言うたことを忘れまいぞよ。

あい、此胸に錠おろいて、鍵はお前の手にあづけておきまする。

おさらば。

レーヤアチーズ入る。

むすめ、兄がそなたに言うた事とは何ぢや？

あの、ハムレットさまの事でござります。

はて、それは好う氣が着いたわ。聞けば此中から王子がたび々お内密

にて、そなたの許へ入らせられるげな、すると其方が何の斟酌もなう甚う御

入魂にしやるげな……用心せいと言うて子に告げた者があるが……若し

オフ

ボロ

定ならば、きつと言うておかねばならぬ、其方は子の女でもあり、まつたま  
だ嫁入せぬ身といふことをば好う合點してゐやらぬのぢやぞよ。彼の君と  
の情交は何とぢや？ 有體に子にお言れ。

此中王子様が、幾度もく、お優しい約束をおつしやつて下されました。

おやさしい！ わつけない！ 此道の怖いことをば夢さら知らぬげの

其處女らしい言草わい！ 其方は其……約束とやらを實正ちやと思つて

かいの？

さあ、どう思つてよいことやら。

オフ

ボロ

はつて、教へやりませう。こりや、其方は嬰兒も同じぢやぞよ、そのや

うな約束をば、真正正銘の金貨同様に、やがて支拂うて貰はれうと思ふよ。

これからは萬事一段と氣がねのしやれ。さうでない……駄洒落の息を

切らさぬやうに言へば……子をば阿呆者に爲かねぬわい。

オフ でも王子さまには、そつとも狎褻がましい様子はなう、眞實らしうおつし  
やつて……

ポロ へ、らしうでもあらうかい。 はて、むざとした!

オフ ……偽でない證據にとて、あるたけの誓言をばなされましたわいな。

ポロ はて、それが阿呆鳥を捕へる毘ぢや。 血のくわつと燃える頃には、誓言は

口から出たらめ。 これ、女よ、そのくわつと燃えるものを火と思ふは誤り、

光る程に熱は無く、剩さへ約束する最中にも消えるものぢや。 向後は處

女だてらに軽々しい男まじらひは遠慮しやれ。 よし逢はうとあつても、

切に頼まれねば逢はぬ程の見識が大切ぢや。 さてハムレットさまの御意

はぢや、何がさてまだお年は若し、婦女とはちがうて、萬事伸縮が御自由な

御身分ぢやと思や。 所詮は御誓言を眞に受けやるなやぢや。 誓言とい

ふものは、人を欺さう爲ばかりに奇特らしう經文までも口ずさむ女術を宛

オフ 然の、不貞節を勧める仲人、肚と衣とは雲泥ぢやわい。 畢竟するに、有體に  
言へばぢや、向後は暫時たりともハムレットさまと言葉を交し乃至お物語  
仕ること罷りならぬ。 ていと申附けたぞよ。 さう、おじやれく。  
あゝ、畏りましたわいな。

二人とも入る。

第四場 高臺

ハムレットを先にホレーシオとマーセラスと従いて入來る。

ハム 身を斫るやうな風ぢや。 いかう寒いの。

ホレ まるで摘み切らるゝやうでござります。

ハム もう何時ぢやの？

ホレ まだ十二時にはおきますまい。

マー いや、もう打ちました。

ホレ え、打ちましたか？ 聞きおとしましたわえ。 すれば程もなく彼の亡霊の現れ出づる刻限でござる。

奥にて喇叭の聲、大砲の音。

ハム ありや何事でござりまするな？

ハム 今宵は王が徹夜の御宴なれば、互ひに賀盃を取換いて、足元もしどろに踊り狂ふ亂騒ぎ。 王がライン酒の盃を舉げらるれば、其都度喇叭を吹き銅太鼓を鳴らいて、酒戦の譽を稱ふるのぢや。

ホレ 御慣例でござりまするか？

ハム おゝさ慣例ぢや、が……此様な慣例は、予は此國に生れ、見馴れ聞馴れて生

ホレ や、御前、あれ〜あしこへ！

ひたつたれども、守らうよりも破つたが、遙かに面目ぢやと思ふわい。 東西遠近の外國人に、豚よ泥酔漢よと嘲り罵らるゝは、かゝる亂酒の慣習あるゆゑ。 我國人の所業は、假令上無き手柄とても、之れがために名譽の髓を失ふ。 かやうな事は一人の身の上にも間々あることぢや。 例へば或生得の疵があれば、すなはち素性が賤しいなど……こりや本來其者の罪では無い、出生は天然ぢやによつて……然るに其天然に得たる疵が追々に増長なし、道理の範圍を越ゆるに至れば……又は或癖が度を過いて世人の所謂行儀作法に叶はぬときは、他に如何な美德あるも、宿命が與へた此徽章、造化が與れた此制服を脱がぬ間……如何に此上なう純潔でも……此一點の疵の爲に腐蝕せられ、世の嘲侮を招くに至る。 只分厘の苦味のために、抜群なる美味の一切をも食ふに堪へずとなすならはし。……

亡霊現れる。

ハム

南無天使、諸天善神、護らせたまへ！……神霊にもあれ、悪鬼にもあれ、天の顯氣を持ち來るとも、地獄の妖氣を携へ來るとも、底意は善にもあれ、惡にもあれ、かゝるいぶかしき姿にて來る上は問答せん。予は汝をハムレットと、王と、父と呼び參らせうぞ。おゝ、デンマークの大君よ、お答へあれ！ 予をして疑惑に心を破らしめたまふな。神聖き御法の式を盡して正しう葬られたまうた御軀が、何とて蠟引の墓衣を破り、靜閑に御遺骨を埋めまゐらせたる陵が、何とて盤石の頸を開いて、又も御骸を吐出だいたるぞ？ 何とて甲冑まで隙なく着させて、さらでも凄き月の夜半に、斯くあくがれいでたまひつるぞや？ 人智の及ばぬ不思議を現じ、造化の侏儒たる人間をば怖れをのゝかせう御底意か？ 語らせられい。何故でおじやる？ 何故ぢや？ 命つけらるゝ事ばしあるか？

亡霊 ハムレットを手招きする。

ホレ

何さま他聞をば憚るげに、あれく、御前をば招きまする。

マ

あれくうやくくしう手を靡かせ、別所へと御前を招きまする。なれどもおこしなされますな。

ホレ

必ずおこしなされますな。

ハム

こゝにては物言はぬな。すればそちへ行かうぞ。

ホレ

あゝもし、かまへて……

ハム

はて、何恐るゝことがあらうぞ？ 針程にも惜まぬ命ぢや。まつた魂は

彼れ同様に不滅なれば、何の害をも受けう筈なし。またもや予を招きする。さうぢや。

ホレ

これはいかなこと！ 海河なんどへ誘きよせ、まつた海中へ突出たる物凄き絶壁の上に立たせ、そこにて恐しき姿を現じ、御正氣を奪ひ亂心せしめ



奉る手もあること。さらでも千仞の海を瞰下し、轟く怒濤を聞くときは、不思議に心の亂るゝためし。

まだ招きををる。おゆきやれ、ついて往かうぞ。

かまへておこしなされますな。

え、放せ!

いや、おとまりなされませい。

我宿命の促す所ぢや。五體

ハム  
ホレ  
ハム  
マ  
ハム

にありとあらゆる動脈鐵の如くに張り満ち、ニミヤの獅子の筋をも凌ぐわ。まだく子を招きををるわい。……放しめされ。……  
と劍を抜く。二人手を離して退る。  
妨害なさは手打にいたすぞ! え、退れといふに! ……おゆきやれ。  
従いて行かうぞ。

亡霊についてハムレット入る。

お心が惱亂して我歟の辨へもあらせられぬ。

御後を尾ひませう。命に従ふべき場合でござらぬ。

いざさらば。……此行末は何となるやら。

こりや何かデンマークに非道事がおぢやりまするぞよ。

善悪ともに天の導き。

あいや、先づお後を尾ひませう。

ホレ  
マ  
ホレ  
マ  
ホレ  
マ



二人入る。

第五場 高臺の他の一部

亡霊先にハムレットついて入る。

ハム

いづこへ子をつれゆかうとや。 答へい。 われはもはや行くまじいぞ。

亡

わがいふことをよく聞けよ。

ハム

は、あ。

亡

阿鼻焦熱の苛責の焰に、此身を委ぬる時刻は迫れり。

ハム

お、いたましやなあ！

亡

かひなき憐みを寄せずもあれ、心を定めてわが語る一大事をよつく聞け。

ハム

は、あ。 語らせられませい。

亡

聞いたる上は必ずともに、復讐をば忘るまいぞよ。

ハム

や、何と？

亡

われこそは汝が父の亡霊なれ。 只真夜中の若干時のみ、閑浮にさまよふ

許あれども、娑婆にて犯し、罪業の焼き浄めらるゝそれまでは、焦熱地獄に餓鬼の苦み。 もしあの世の祕事を語るを禁ぜられずもあらば、只一言をだに洩さんに魂は慄へ戦き、若き血沙は氷とこりり、二つの眼は星の如くに、其圓座より躍りいで、縮れたる其頭髮も、怒る針鼠の糞毛のやうに、一筋毎に逆立つべきぞよ。 さもあれ冥府の一大事は、人間の耳に傳へがたし。 聞けよ、お、聞けよ！ まこと亡き父を愛する心の切ならば。

ハム

お、！ お、！

亡 非義非道の弑逆の怨を晴らせハムレット。

ハム なに、弑逆とな!

亡 おほよそ弑逆に非道ならぬはなしとはいへども、これこそまことに例しも知らぬ、非義非道の弑逆ぞや。

ハム いざとく其仔細をお語りあれ。 刹那に千里を走るといふ戀の思ひの翼よりも、黙想の羽がひよりも、尙とく翺翔りて復讐なさん。

亡

さもさうず、さもありなん。 かくても感動せざりせば、物忘れ川に生ひ朽つてふ益なき艸の鈍きに劣らん。 いでさらば、よつくお聞きやれ。 予園内に眠れる間に、毒蛇來つて螫し殺しぬと、實しやかに言ひ拵へ、うまうま國中を欺いたれども、まこと此父を螫しつる毒蛇は、今其頭に、黄金の冠を戴きをるぞよ。

ハム

すりや、わが心の知らせにたがはず! あの……叔父御か!

亡

いかにも、亂倫とも邪淫とも、言はうやうなき人畜生……天成人を惑亂す不思議の奸智に長けたれば……貞操無二とも見えたりしわが妃をば説き惑はし、竟に耻づべき邪淫の途げたり! お、ハムレットよ、是れ何といふ悖戻そや! 大婚の式場にて、契りつる言葉をつゆ違へず、深くも愛せし子に背いて、彼奴の如き醜じものに心を移し従ふとは!……さりながら眞の操は、よし神人と化現して邪淫の來り誘ふとも、ゆめく心を動かすまじく、輝く天使につれそふとも淫婦は淨樂の床に倦んでやがて腐肉に思を寄する……や、はや吹きそむる朝けの風。 言葉短かに物語らん。 日ごろの習ひ、眞晝過に、予園内に眠れる折から、油断を見すまし忍びより、汝の叔父が小瓶より我耳に注ぎ入れし大毒液の効力は靦面、水銀のやうに我五體のありとあらゆる血管を走り傳つて血汐に觸るゝや、譬へば乳汁に酢の滴りを注ぐが如く、鮮血忽ち濁りこいつて、滑かなりし我肌を見る見

る掩ふ瘡ぶたは、癩病やみをさながらの、目もあてられぬ醜さ穢さ。……ま  
つこの如く假寝の間に、現在弟の手に罹り、命をも王冠をもまつた妃をも  
一時に奪ひ取られて罪業の、花の盛りにあさましや、聖禮も受けず、懺悔  
もせず、最期の油を塗らるゝこともなく、頭に夥しき咎めをいたゞき、神の  
御前に引出されし怖ろしや！

ハム

おゝ、おそろしや〜！

亡

汝孝子の心あらば、ゆめ此怨を忍ぶ勿れ。デンマーク王家の閨房を邪淫  
の床とならしむるな。とはいひながら忘れても、母には害を加へまいぞ  
よ、天の捌きに打任せて、心の鬼に身を責めさせよ。さらばなりハムレッ  
ト。闇を照らせる螢火の効なき焰の薄るゝは、はや曉の近づく知らせ。  
さらば、さらば、おゝさらば！、わがいひつけをば忘るゝなよ！

ト 亡霊消える。

ハム

おゝ、ありとある天の神々！ 下界にありとあらゆる神！ 地獄にありと  
あらゆる悪魔も！ 何を馬鹿な！ おゝ、こたへをれ、わが心。おのれ、  
我五體の筋肉、ゆめ俄に老朽つるなよ、しかと此身をさゝへをれやい。  
……なに、命令をわするなと

やー いふにや及ぶ、あさま  
しの亡き靈よ、惑亂したる此  
頭に記憶の力の存する間は、  
いひつけをば忘るなとやー  
念にや及ぶ、我記憶の帳づら  
より、をさなき耳目の寫しお  
いたる格言、名句、色形、あらゆる記録を拭ひ去つて、我頭腦の巻中には、  
只尊靈の嚴命ばかりを餘事をまじへいで記留めう。 おゝさ、天に誓うた



ぞよ！……あさましき非道の女性！……たぐひなき大悪人！ 面に笑を  
たへながら……さうぢや、覺眼に書きとめおくが當然ぢやわい。……面  
笑をたへながら、笑みつゝも尙かくの如き大悪事を行ふ者の世にありと  
は！ ともかくも此デンマークには現の證據が……どうぢや叔父貴、まづ  
此通り。……いで此上は、大切な命令を。 む……さらば、さらば、お  
さらば。 わがいひつけをば忘るゝなよ！。 もはや天に誓うたぞよ。

此時奥にてホレーシオ、マーセラスの聲にて下の如く呼ぶ。

御前、御前……

マー ハムレットさまい……

ホレ 天よ君を護らせたまへー

マー 何卒！

ホレ ほうい〜！ 御前さまいのう。 ほうい〜

ハム ほうい〜！ こゝへ來う。 ほうい〜！

ホレーシオ、マーセラス 入來る。

マー いかいわたらせられまする？

ホレ 何とでござりましたぞ？

ハム おゝ、奇怪千萬！

ホレ 御模様をお聞かせ下されませい。

ハム いや。 言うたらば人にいはう。

ホレ いや、私は、誓つて口外はいたしませぬ。

マー 私とても、他言は仕りませぬ。

ハム したらまあ、何と言ふぞ？ 人間の念頭にかつて思ひ反ばうことか？……

二人 他言はすまいな？

二人 神以て他言はいたしませぬ。

ハム 此デンマーク廣しと雖も、内に住める悪漢にして世に怖しい大悪人でない奴はるぬわい。

ホレ はて、それしきの事は、あの世から亡霊が来て告げます程でもござりますまい。

ハム む、さうぢや。 いかにもさうぢや。 ぢやによつて、もう／＼窮屈な事はやめにして、互に手を振合せて別れたがよからう。 人はめい／＼に用も務もあるならひぢや。…御身たちは御身たちの務めを…予は予で、歸つて祈禱でもしませうわい。

ホレ これはいかなこと、とりとめもないことを仰せられます。

ハム はて、氣にさはつたら堪忍しやれ。 予がわるかつた、はて予がわるかつたによつて。

ホレ めつさうな、何のおわるいことがござりませう。

ハム いゝや、あるぞよ。 バトリック上人も照覽あれ、しかもおそろしいわい

事があるぞよ。 最前の幻影はな、ありや全く正しい精靈とばかりいうておく。 さて何を語らうたか、定めて聞きたからうが、こらへてたもれ。

さて改めていふぞよ、御身らは予が信友でもあり、學者でもあり、武人でもあるによつて、予の只一つの頼みをば聽いておくりやれ。

ホレ 何事でござりまする？ 承りませう。

ハム こよひ見たことどもを、かんまへて口外すまいぞ。

二人 畏りましてござりまする。

ハム いやさ、誓言をせい。

ホレ 神以て他言いたしませぬ。

マー 私とても神以て口外はいたしませぬ。

ハム 予が劔かけて。

マ一 もう誓言は仕りましてござりまする。

ハム 眞實これなる劔にかけても。

此時地下にて

亡 誓言！

ハム や、何といふぞ。ういやつの、お主もそこにか？……さゝさ……お聞きや

つたか、地の下で、誓言せいといひをるわい。……さゝ、誓言せい。

ホレ 本文を仰せられませい。

ハム 御身らが見た事をかんまへて他言せぬと、予が劔かけて誓言せい。

亡 (地下にて) 誓言！

ハム むゝ、現處、一切處な！ すれば居どころ改めう。……さゝ、こゝへく。

……ま一度予が劔に手を戴せて、御身らが見たことをかんまへて他言せぬと、此劔かけて誓言せい。

亡 誓言！

ハム ほゝう出来た、田鼠どの！ ても速うおわたりやる！ 立派な工兵ぢやわ

い！ さ、ま一度こゝへ、變へたく。

ホレ これはいかなこと！ 奇怪不思議！ 例も知らぬ……

ハム さ、ぢやによつて、只何事も知らぬ振をして聞いておきやれ。此天地の間

にはな、所謂哲學の思も及ばぬ大事があるわい。さゝこゝへ。……な、最  
前の通り、かんまへて……すれば後世の冥福があらう……たとひ向後、予  
がどのやうな様子をせうと……或は殊更に奇怪な舉をすまいものでも  
ないが……其折かんまへて、このやうに腕を組み頭を振り乃至意味ありげ  
に「はて、あれには仔細が」とか、「知らぬではなけれども」とか、「いはうとさ  
へ思へば」とか、「口外してよくば」とか、おぼつかかなげなことをいうて、予が一  
身の内密を知つたがやうに見せまいぞよ。……すれば必ず大事の期に、神

が冥助を下されうす。 誓言せい。

七

誓言せい！

ハム

はて、さう氣を揉むまい、安心さしめ〜！

二人劍の欄に接吻する。

此上は予も眞情のあるたけを御身らに酬ゆる積りぢや。 ハムレットづれの凡夫が、朋友の信義を能盡す限り、神慮にさへ叶はゞ、必ず違へることではない。 共に城内へゆかうぞ。 な、口元に指をあて〜…頼んだぞよ。(傍を向きて)世の關節が外れたわい！…何たる悪因縁ぢや、予が反正の任を帯んで此様な世に生るゝとは！二人に對ひてあいや、おじやれ、共に行うぞ。

ハムレット先に皆々入る。

\* \* \* \* \*

第二幕

第一場 ポローニヤス邸の一室。

ポローニヤスと家來レーナルドーと入來る。

ポロ

此金と此書面を俵めに渡しておくりやれ。

レー

畏つてござる。

ポロ

俵をば訪ぬる前に、先其行迹を探つてお見やるが上策であらうぞ。

レー

私もさやうに存じをりました。

ポロ

ほう出來た、あつばれ！ よいか、先づバリーには、何様な、何といふデ

ンマーク人がをるか、何として暮し、何處に住む、何様な仲間と交際うて、其費用は何程かと問うてお見やれ。さてかやうに迂曲に問うて、敵手が悴を存じをると分つたらば、一段と話を運うで「それがし彼男の父者をも友達をも存じをりまする、まつた當人をも幾らか」と些許は悴をも存じをるやうに見せかけるぢや。……心得たか？

レ

ボ

「當人をも幾らかは、さりながら善うは存じませぬが」と言うて、「したが其お人が小生申す所の仁でござらば、中々の氣儘者、云々の道樂もござる」など、何なりと心任せに作りすまいて言うたがよい。が、悴の不名譽になるやうなとは努言ふまいぞよ。必ず共に氣をつけやれ。但し若氣の我儘には附物のやうに知れ渡つてをる放逸や亂暴や不埒ならば關心は無い。博奕をなさりまするなぞと？」

レ

ボ

中々、又は酒を飲む、劍術をつかふ、喧嘩口論をする、悪所入りをする、そこどころまではよい。

レ

ボ

それではお名前にさほりませう。氣も無いこと。そこがおぬしの言ひ廻しぢや。したが今言うた外の誹謗は、例へば荒淫ぢやなぞとは假初にもお言るまいぞ。それは予が本意で無い。結句悴の過失は、猛しい心の溢れで、血氣剛な、躰の足らぬ頃には有りがちの不埒と見ゆるやうに、味よう言ひ倣いてくれさしめ。

レ

ボ

ではござりまするが……何故にそのつれなことを致しまするか？

レ

ボ

中々、それが承りたうござりまする。はて、それは斯様ぢや。そもく是は天下晴ての謀計ぢや、斯く、譬へば、製作のしてをる間に、ふと疵が着いた品などのやうに、悴にさばかりの難



を附くれば、おぬしの話敵手が、よいか、自然おぬしが探らうとしておりや  
 る其當人が、右噂のあつた不埒どもを曾か犯いてをるのを見たことがあれ  
 ば、一定おぬしに調子を合せて、ま此やうにも言はう、「え、其許様は」とい  
 ふか、或は「お手前は」乃至「貴殿は」とい  
 ふか……これは身分にもより、其國風  
 もよることぢやが……

御意で。

そこでその其男がぢや、其男が……え、  
 と、何やら言ひかゝつてをつたのぢや  
 ……はて、何とやら言ふ積りであつたが  
 ……何といふ所でしまふたか？

私に調子を合せまして「お手前は」とか、乃至「貴殿は」とか……



ボロ

「おぬしに調子を合せて……それく。おぬしの言ふことに調子を合  
 て、先づ此やうにも言はう「え、其御仁ならば存じをります、え、昨日」又  
 は「先日……云々の折にお目にかゝりましたが、お連は云々の方々で」又は  
 おぬしが言はうやうに、或は「賭博をしてゐた」とか「亂酔してをつた」とか、  
 「庭球で喧嘩をした」とか、或は又「さる賣店へ入るのを見た」とか……とい  
 ふのは女郎屋のことぢや……其他さまざまの事を言はう。何と如何ぢ  
 や？……虚の餌で實の鯉を釣上ぐる。まづ此如く、何が遠見のある智慧者  
 は、いつも遠廻りのして間道から本城を陥すことぢや。おぬしも、最前か  
 ら言はうた通りにして、伴の内情をお探りやれ。合點が往たか、どうぢや？  
 合點いたしました。

ボロ

堅固でお往きやれ！ さらばぢや。

レ

御機嫌ようござりませう！

ボロ 己が眼でも素振を見やれよ。

レー 心得ました。

ボロ 好きな音色をば出させたがよいぞよ。

レー 心得ました。

ボロ さらばぢや……

レーナルドー 入る。

オフィリヤ あはたぐしく入来る。

オフ 何としたオフイリヤ！ 何事が出来たのぢや？

ボロ お、父上様、々々々、眞に怖うござりました？

オフ はてさて、何としたのぢや？

父上様、居間で縫物をしてをりましたらなあ、ハムレットさまがな、外套の胸元は開いたまゝ、帽子も着さず、靴下も汚れ、解けた紐は踝へ垂りはうだ

い、顔の色はシャツほどに蒼ざめて膝がたく、怖しい事を告うために地獄から出された人かのやう、それは情ない顔持して、つい今しがた妾の前へ。

ボロ そもそも焦れて気が狂うたか？

オフ さあ、どうであるか知りませねどな。

ボロ さうかとも思はれて。

オフ して何と言はせられた？

妾の手頸をきゆと捉へ、御自身の手を斯う翳し、肖顔畫でも描かうやうに妾の顔をじいと思つめていご



ざりましたが、長いことさうしてゐてから……妾の手頭を軽く振つて、頭を斯う三度上下して……軀も摧け命も盡けうす程に、いとほげな深い溜息をなされてな、それが濟むと手を放いて、肩越に頭だけ此方へ向け、詠めいでも見えるかのやう、目の助けは借らいで外へ出て行かせられた、いつまでも此方を見詰て。

ボロ さ、おじや。こりや王にお目にかゝらねばならぬわ。それこそは戀の氣狂ぢや、天が下一切の煩惱何れも人間のわづらひぢやが、何がさて戀の激しい特質は、第一に自ら害ひ、果は何様な怖しいことをもしかねぬ。あゝ残念な……え、これ、何か近い頃に彼の君へ無情いことを申上げはせなんだかや？

オフ いゝえ、何も申しませぬ。したが父上の命令ゆる、お艶書をば突戻いて入らせられても逢ひませなんだわいな。

ボロ さてこそは氣が狂はせられた。さて……残念や、一段と深しう分別して様子を觀なんだのが脱落ちや。一時の戯にそもじを疵物にさつしやらうかとばかり思ひ込うだのは、おのれやれ、邪推であつたか！南無三寶！とかく老人の過慮と若い者の無分別……さあ、王の御許へ參らう。こりや直に聞上げねばならぬわ。戀の顛末を申したなら、お憎みを受けうも知れぬが、隠しておいたなら尙一段の哀みぢや。さう、おじやれ……

第二場 城内の一室。

喇叭の聲、王妃、廷臣、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン及び侍臣若

千入來る。

王

お、ようこそ、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン！ 久しう逢見たう  
 存じをつたる上に、折入つて頼みたい仔細のあつて、取急ぎ召寄せたわ。  
 灰にはお聞きやつつらうが、打つて殺つたハムレットが此頃、外なる人も  
 内なる人も往時には似ぬ變りやうぢや。 かやうに我歎をも忘るゝに至つ  
 たる事の因は、父王の死去の外には、何としても思ひ及ばぬ。 御身等へ頼  
 とは是の事ぢや、幼いより共に育ち、彼れが若氣の氣心をも善う吞込うで  
 おゐやる御身等、暫く當城に留りやつて、近しう相交り、慰事に彼れを誘  
 ひ、吾等の未だ存せぬことにて、聞知らば療治の術もあらんす彼れが病患  
 の原因もあらば、何卒折を得て探出しておくりやれ。  
 なう方々、御身がたをばハムレットも折々の噂話、御身等程に和子と心の  
 合はん人の又と二人世にあらうとも思ひませぬ。 暫時宮中にお留りやつ

妃

ロ

て、我等が望を遂げさせう爲に、禮義深切を盡いてたもらば、此度の參内は  
 王の感謝に相應しい報酬をば受けられませう。  
 兩陛下には、我々に臨ませられます無上の大權の持たせられて、御意の  
 まゝ嚴命あつてこそ然るべけれ、お頼とは恐入まする。  
 併しながら、兩人ともに御受の仕り、謹んで微軀を獻じ、力の及びまする限  
 り、忠勤の拔でまするでござりませう。

ギル

王

かたじけなうおじやる、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン。  
 かたじけなうござる、ギルデンスタアン、ローゼンクランツ。 さらば直に  
 も見舞うたもれ、變り果てたわく子を。 ……誰ぞ、ハムレットがゐやる處  
 へ、兩卿を案内しや。

ギル

天よ願はくば我々の參向と忠勤とを王子の御意に稱はしめたまへ、お役に  
 立たしめたまへ！

妃

げにしかあらせたまへ！

ローゼンクランツ、ギルデンスタアン、二の侍臣に案内せられて入る。  
ボローニヤス 入来る。

ボロ

申上げます、お使者がノールウェーより吉報の齎して歸朝仕つてござる。

王

足下はいつも吉左右の祖ちやわい。

ボロ

でござりますか？ 誓文、恐れながら、小官神明に對し奉りまして、陛下

に對し奉りまして、本分を守りまするは靈魂を守りますると一様でござ

る。さればこそ能い探りました……さらすば小官の此頭腦は最早昔日の

やうに機敏うは能い嗅出だしませぬ……いや、正しう能い探りました、ハ

ムレットさま御喪心の眞の理由を。

お、語りめされ、それこそは待兼たわ。

ボロ

先づお使者達に拜謁の仰附けられませう。 小官が御左右は其御大饗の點

王

心と遊ばいたがようござりませう。

王

足下みづから優待して此處へ伴ひめされ……

ボローニヤス 入る。

妃

ガアツルトどの、和子が亂心の源泉を悉く探出したと申すわ。

王

覺束なう思ひます。……父王の崩御とか、吾等の早まつた婚儀とか、只大

筋に過ぎますまいぢやまで。

王

む、何れとも取糺いて見う……

ボローニヤス 先に、デルチマンドとコオネリヤスと入来る。

ブル

ようこそ面々！ してブルチマンド、ノールウェー王の返答は何とぢや？

殊なう鄭重なる御挨拶。 はじめての謁見にて、直様お使の遣され、甥の殿

の軍準備を差止められてござります。 右はポーランド征伐の爲とのみ思

召されし由の處詮義の末、陛下への御謀反と相分り、さては老病不能の爲

かゝる不覺と歎かせられ、すなはちフォオチンプラス殿召捕のお使者差遣はさる。彼人所詮は命に服し、王のお譴責を蒙り、結局陛下に對し奉つて向後干戈を動すまじくと、叔父君の御前にて誓言ある。老王殊なう御悦喜あつて、年額三千クラウンの知行所を賜はり、且うは徵集められし軍兵を以てポーランド征討の儀差許さる。それにつき委細は此書に(と書面を差出しながら)相見えませうが、何卒右企の爲、當御領内を平和の通行御裁可下されませうやうとお願、途中の安全を圖りまする條々な此書に認めござりまする。

頗る予が意に適うた。間を得て讀んだる上、篤と勘考して返答せん。先づそれまでは兩人ともに太儀千萬、まかんで、休息お爲やれ。夜に入らば共に飲まうぞ。ようこそ歸朝!

アルチマンド、ゴオネリヤス入る。

王

ボロ

此御用向も先づ以て首尾よう。……我君、お妃、そもく君王の稜威とは何ぞや、臣下の本分とは何ぞや、乃至は晝は何故に晝にして、夜は夜なるか、まつた時は時なるかなど、論議ひまするは、是れ只夜や晝や時を徒費するに過ぎませぬ。蓋し簡潔は智慧の精神、冗漫は手足や虚飾でもござりませうによつて、それゆゑ小官は簡潔に申上ぐる。王子さまはお狂氣、いかにもお狂氣と申上ぐる、何故となれば、豫め狂氣の本義を定めうと仕るなどは、畢竟狂氣も同様の振舞ではござりませぬか? 併しそれはそれと致して……

妃

いやなう、語、潤色よりも肝要の事柄をば。

ボロ

お妃、何の小官が虚辭空言を申しませう。王子お狂氣とは事實でござる。眞に以てお氣の毒でござる、さてお氣の毒でござるが事實でござる。いや、鈍い文飾。併しおさらばでござる、最早潤色は用ひませぬ。すれ

ば先づお狂氣と相定めまして、さて残りましたは吾等が右結果の原因を發明の仕つたる一條……と申すよりも或は右缺陷の原因と申したが當然でもござりませうか。何故と仰せられい、かやうな缺陷がちの結果は所詮原因無うては叶ひませぬからでござる。これが即ち申し残して、さて残りました一條は如何でござる。とくと御賢察下されませい。……小官に一人の女がござりまする。……もつとも右は手許に置きまする間の事……其者が孝順にも、お聽下されう、此書をば小官へ渡しました。いざ、御推量下されませう。

ト 艶書を取出して讀む。

「天津姫とも思ふ我魂の本尊、こよなうも艶麗なるオフィリヤの君へ。……こりや拙、拙い文句ぢや。『艶麗なる』は拙い句ぢや。ともかくも其後を聽せられませい。かうでござる。」

ト 又讀む。

妃 「君のいみじき白き御胸に、これなる句どもを、云々」  
それがあの、ハムレットからオフィリヤへ？

ボロ お妃、まゝ暫く。有體に申上げませう。

ト 又讀む。

「星の火を無しとも思せ。  
昇る日を停るとも思せ。  
まことをも偽とおぼせ。  
しかはあれ、予に一心ありと思すな。  
あはれ、なづかしきオフィリヤよ、予は句を綴るに拙し。予は字數を限りて呻吟く術には長せず。さもあれ御身を戀る我心のいと多く切にして更に一切なるを信じたまへ。さらば。」

いとも戀しき姫へ、此形骸の我有たらん間は、長永に御身の有たるハムレットより。」

此書をば女が命令通り小官に渡しました、のみならず、いつ、いつこにて、いかさまに言寄せられたるかをも悉く申聞えましてござる。

してそれに對するオフィリヤの行動は？

小官をば如何な者とばし思召されますか？

誠忠な名譽の男と。

王  
ボロ

その通りにありたうござる。さりながら何と思召されませう。……小官が此激しい戀の羽ばたきを見ました折……こりや豫め申置かいで適ひませぬが……女から聞きまする前に、とくにも其儀をば見て取りましたか……何と思召されませう、陛下にせい、お妃にせい、其際小官が机の抽出か覺帳かのやうに、若し凝と目の瞑つて無言で見過しましたならば……

王  
妃  
ボロ

何と兩陛下には思召されませう？ いや、小官は眞直に着手つて、まづこのやうに女めに申しました。「ハムレットさまは王子ぢやぞよ、其方とは分が違ふ、とつても無いことぢや」とさ申聞せ、王子がお出入の場所々々へは、かんまへて參らぬやう、お使をも遠ざけ、賜品をも戴くな、と庭訓の與へましたる所、女め其通りに仕りました。さて王子は撥破けられて……手取早う申しますれば……御悞鬱にならせられ、それからして御斷食、それからして御不眠、それからして御衰弱、それから又御喪心、と自然漸々と募らせられて、只今の御狂亂、さて、歎かばしいこととござる。

(妃に對ひて) 御事も然おぼさるゝや？

げに、然うもあらうかと思ひます。小官が「これは如是でござる」と確つと申上げました際に……承りたうござる。……それが然うでなうござつたことが、見事、一たびでもござりま



王 したか？  
予は存せぬわい。

ボロ (頭と肩とへ指さし) これからこれを奪らせられい、萬一にも間違ひましたら、  
手懸さへござりますれば、どのやうな内密をも、地球の中央に押匿してご  
ざりませうと、探出してお目にかけてませう。  
此上は何として實否を糺さうぞ？

王 御存じあらせらるゝ通り、王子には時折、此大廣間の御廊下を幾時となう  
歩かせられまする。  
ボロ げに其通りぢや。

紀 さやうの折柄に、わざと王子へ女をば放ちませう。さて陛下と私とが帳  
の蔭に隠れて、其會合をば窺ひませうす。萬一にも王子が女をば戀はせ  
られず、まつたお心も狂うていらせられぬやうでござらば、小官が職を罷

王 めさせられい、水飲百姓とも相成りませうす。

紀 ともかくも試みるであらう。

王 あれあしこへ和子の奴が、いぢらしう悄然れて、何やら讀んで來ますわい  
の。

ボロ いざ、あちへ入らせられい。兩陛下とも、いざ。すぐに物を申掛け  
て見ませう。

王 如、侍臣入る。

ハムレット 書を讀みながら入來る。

ハム はれ、お許されませう。ハムレットの御前には、如何わたらせられます  
なり？

ボロ お、健康、健康。

ハム 小官を御存じでござりまするか？

ハム 　　む、よう存じてをる。魚商ぢや。

ボロ 　　ではござりませぬわい。

ハム 　　なりやせめて彼奴程の正直者であ

つて欲しい。

ボロ 　　正直者？

ハム 　　中々。正直者は、今の世では、一萬

人中の一人ぢや。

ボロ 　　これはお道理ぢや。

ハム 　　（讀みながら）何が故に然云ふ。夫れ

天日の淨き光とても、好んで壞爛の

肉に觸るれば、狗兒の屍に蛆を醸

す。……女をお有ちやつてか？



ボロ 　　ござりまする。

ハム 　　日中には外へ出すまい。世間をおぼえるは可いことぢやが、ともするも

無分量いことをおぼえる。氣をお付けやつたがよい。

ボロ 　　え、何と御意なされます？……（傍を向いて）まだ女の事をば思込で居ら

る。したが初手には老生を見知らいで、魚商ぢやなど申された。い

やも深しう感溺られたことかな、首つたけぢや。いかさま老生とても若

い時分な甚う色戀で苦悶も致いた、ほとく如是にもあつた。今一度物

を言うて見う。……何を讀せられます？

ハム 　　文句ぢや、文句、々々。

ボロ 　　え、何事でござりまする？

ハム 　　事とは、そりや誰が？

ボロ 　　いやなに、其讀ませられまする事は何事でござりまする？

ハム 誹謗ぢやよ。悪舌漢めが茲に斯う言うてをるわい。老人には白き髯あり、其面は皺くちやにて、目よりは濃き琥珀色の桃の脂を流す、而して智は夥しう不足し且うは膝節弱くとある。こりやも悉く其通りぢやが、さりとて斯う歴々と書いておくのは、些と無作法であらうわい。何故とお言れ、御身ぢやとて、若し蟹のやうに逆様に這はうならば、予と同年でもあらうによつて。

ポロ (傍を向いて) 狂人の言ふことながら理が立つてゐる。……え、ちと浮世離れを遊ばされませぬか？

ハム あの世へでも行くか？

ポロ なにさま、それも浮世離れでござる。……(傍を向いて) さてはや折々は手際な返答をせらるゝ！ ともすると狂人が旨いことを言ふ、生中正氣の分別があつては、あのよな思切つた不理窟は言はれぬ。今はまづ分れて、不意と

ハム 女に出逢さすやうに工夫せう。……恐れながら、これにてお暇を戴きたうござります。

ハム はて、それほど遣したうてならぬものはないわい。……命は別ぢやが、命は命は。

ポロ 御機嫌よう渡らせられませ。

ポロ ニヤス 離れる。

ハム うるさい奴の、阿呆め！

ポロ (ローゼンクランツとヤルテンスダアンと入来る。

ポロ ハムレットさまをお尋かな？ あしここにいらせらるゝ。

ロー (ポロニヤスに) 御機嫌よろしう！

ポロ ニヤス 入る。

ギル 御前様！

ロー 王子様!

ハム お、さてもく、なつかしい! どうぢやぞい、ギルデンスターン?  
……あ、ローゼンクランツか!……兩人とも、如何ぢや、よい景氣か  
の?

ロー 先づ世間並にござりまする。

ギル 仕合せ過ぎませぬといふ意味合で仕合せにござります。運命の神の帽子  
の飾紐ではござりませぬので。

ハム 女神が靴の底でもないか?

ロー でもござりませぬ。

ハム なりや彼の女神が腰の邊、取りも直さず御恩恵の中央程にゐるのぢやの?

ギル 眞實 私共には、女神もお目をかけさせられます。

ハム 何ぢや、お目かけ? あ、聞えた、いかさま彼神は淫婦ぢやなう! 何ぞ

ロー 珍聞は無いか?

ハム 何もござりませぬが、世の中はおひくと正直になります。

如何な科ばしあつて、御身等は、運命の神の爲に、如是牢獄へは送られたの  
ぢや?

ギル 牢獄と仰せられますは!

ハム デンマークは牢獄ぢや。

ロー すれば此世界とても。

ハム 立派な牢獄ぢや。其中に監禁所もあれば獄室もあり、穴牢もある。デン  
マークは下々の下の一つぢや。

ロー 私共はさやうには心得ませぬ。

ハム はて、然らば御身たちにはさうで無いのぢや。總別思倣しの外には事物

の善も無く、悪も無い。予に取つては牢獄ぢや。

はて、それならば御大望の爲でござりませう。お望に比べては、お國が狭うござりまするでがな。

ハム おゝ〜！ 胡桃の殻に押籠められうと、無邊際の主とも思はうものを、悪夢さへ見なんだなら。

ギル その夢と御意あるが、取りも直さず御大望でござる。何故と仰あれ、所謂

大望の本体は夢の影に過ぎませぬ。

ハム 夢も影ぢや。

ロー 中々、私は大望をば果敢ない、影の影とも申すべき空なものと同列にはしたうな

ハム すれば乞食共が本體で、彼の帝王や驕乗り歩く英雄や豪傑は其乞食共の影

ぢやとも言はるゝ……何と、宮中へ行くまいかの、予やもう問答は出来ぬわい。

ギル お陪從 仕りませう。

ハム わつけもないこと。予は御身らをば餘の從臣どもと同列にはしたうな

い。なせとお言れ、正直に言はうなら、予は世にも怖ろしう奉侍せられて

ハム ゐるわさ。時に、友達づくに遠慮なう問ふが、エルシノーアへは何しにお

じやつた？

ロー 御前をお訪問のために。外に仔細もござりませぬ。

ハム 予は乞食の境涯ぢやによつて、謝禮は乏しい、さりながら禮は言ふ、御身ら

の深切に比ぶれば、一定高價でもあらうなれど……迎ひを受けたのでは

無かつたか？ 自身の好みか？ 全く任意の訪問か？ さ、正直にお言れ。

ハム ささ、お言れといふに。

ギル 何と申ませうやら？

ハム はて、何とでも……只眼目を。呼寄せられたのであらうかの？ それ

〇 御身らの顔の色に、さすが廉恥心の隠しおほせぬ白状の影が見ゆるわ。  
ハム 兩陛下からお使が参つたのであらう？

〇 何の爲にでござります？

ハム それを予が問うてをるのぢや。こりや、ローゼンクランツ、ギルデンスター  
アン、友たるの信義を思ひ、諸共に生長つた幼い折の交り、莫逆と契つた互  
ひの友誼、其他吾等より辯のよい者が數へ擧げうす微妙友達の本分を思は  
い、包まず真直に、何卒予に話したもれ、お迎ひを受けたのか、どうぢや？  
（傍を向きギルに）どうしたものであらう？

ハム （傍を向きて）いや、そちらがさういふ心ならば……（ギルに對ひ）眞情があらば、

お隠しやるな。

ギル お迎を受けましたのでござります。

ハム その仔細は予が話さう。さすれば御身らの白状を遮り、他言せぬと御身

〇 らが兩陛下に誓つた義理は秋毫も損せぬ道理ぢや。予は近來……何故か  
は知らねども……悉く歡樂をば失うたわい、諸藝をも廢しまうた。能  
い堪へられぬ憂愁の、我胸臆に鬱積して、地球といふ此立派なる大組織も、  
予に取つては荒れ果てた岬も同然。此空といふ世に美しい天蓋も、あれ、  
あの莊麗の穹窿も、燃ゆる黄金を鏤めたる雄大無双の碧海も……はて、我  
目には、只もう汚い穢らしい毒瓦斯の漲る場所とばかり見ゆるわい！ 人  
間は、ま何たる造化の妙工ぢや！ 理智には秀で、能力には限がない！  
風姿といひ、舉動といひ、いみじうもあり、ふさはしうもあり！ 行爲は天  
使の如く、智慧は神にも似た此人間！ 世界の華とも萬靈の長とも思ふ此  
人間！ その人間が、予に取つては、只の塵埃ぢや。嬉しうない、心に適  
はぬ。いや、女とてもぢや、笑ふのは女ならばとお言らうでの？  
〇 以ての外の儀にござります。

ハム

すれば何故にお笑やつた？ 予が嬉しうない、心に適はぬと言つた時に。

ロ

眞の人間さへお氣に適ひませぬやうならば、人の眞似をする俳優どもは、  
嘸かしお手薄なお待遇を戴きませうと存じまして。最前彼等をば追越し  
ました、程なうこれへ御奉公申上げうとて参ります。

ハム

はて、王の眞似をする奴ならば歡んで迎へくれうぞ。……貢をも献らせう  
わい。まつた遍歴騎士には劍と楯の技を揮はせ、情人役も無報酬では泣  
かせぬ。戀人形もあばれはうだい、まつた道外形は、指が觸つても吹出す  
やうな輩を存分に笑はせ、女形は四邊かまはいで無遠慮に、若しも言はな  
んだら、白の口調がわるうならうす。其俳優とは？

ロ

以前御眞員に遊ばいた都方の悲劇俳優でござります。

ハム

旅へは如何して参つたか？ 都方にゐたはうが、名の爲、利の爲によさうな  
ものぢやに。

ロ

御改革で興行が出来ませぬかと存じます。

ハム

彼等の評判は、予がゐたころに變らぬか？ 同じ様に持囃されてゐるか？

ロ

いや、さやうには参りませぬ。

ハム

何として？ もう老込んだか彼等は？

ロ

いや、相變らず出精致してをりまするが、近頃は子供連と申して、鷹の雛の  
やうに、思切つて甲高に白を陳べまする怖しい人氣の一座がござりまする。  
それが當今の流行にて、在來のをば並の劇場なぞと誹謗の致しまするによ  
つて、細劍を佩いた紳士なぞは、爲筆が怖うてか、在來の劇場へは先づ足踏  
をば能い致しませぬ。

ハム

何ぢや、子供ぢや？ 誰れが扶持をする？ 給料は如何支拂ふぞ？ 其奴  
らは甲の聲の出る間ばかり俳優をして居うといふのか？ 格段の工夫も  
無い分には、彼等とても早晚一度並の俳優とならねばなるまいが、その曉

には、他人に言うたことが取りも直さずおのが後身の悪口ともなるによつて、身で身を害ふも同様と、作者共に苦情をば言ふまいか？

ロ 眞實双方の争闘は甚う激しうござりましたが、世人はまたそれを興がり、いろく〜と使喚けまする、それがため一頃は作者と俳優とが口論する一段がござりませねば、其作は賣口が無いと言ふ程でござりました。

ハム 虚事のやうぢやの！

ギル 折々は立廻りをも致しました。

ハム 童連が勝つたか？

ロ 中々、御意の通り。ハアキューリーズも、所領もろとも、一切降参にござります。

ハム それも強ち不思議で無い。叔父御がデンマークの王とならるゝと、父上存生の砌には侮り賤めたる輩までが、叔父御が方寸の肖像書をば、或は二

十金、四十金、乃至五十金、百金をも吝まらずして、争つて購ひ求むる。あつばれ、是にこそ尋常ならぬ理合があらうす、學問で探られうものなら。

奥にて盛んに喇叭の聲。

ギル 俳優どもでござりまする。

ハム かたぐ、ようこそ此エルシノアへ。さ、手を〜。東道ぶりの附

物は當時流行の禮式ぢや。御身たちと斯うしておかぬと、俳優どもへの舉動が、こりや是非とも愛相ようせにやならぬによつて、御身たちに對してよりも一段と鄭重にも見えう程にの。御身たち、さてようおじやつたの。……したが、叔父ぢやの父も、母ぢやの叔母も、甚い誤解ぢやわい。

ギル え、と仰せられまするは？

ハム 北々西だけが狂うてゐるのぢや、風が南なれば鷹と鷲との見分はつくわさ。

ボローニヤス 入來る。



ボロ これは御兩所、萬福々々！

ハム (ボロニーヤスを遠目に見て二人に) こりやギルデンスタアン……御身もく……

……耳をく。あれ、あの大きな赤兒はまだ襦袢を離れをらぬ。

多分二度目の襦袢でござりませう、老いては幼兒に返ると申します。

ハム 定、俳優共の事を告に来たのぢや。聽いてゐやれ……(わざと無心として二人

を相手に)成程、お言る通りぢや。月曜日の朝、げにさうであつたわ。

ボロ 殿下、申上げまする儀がござりまする。

ハム 殿下、申上げまする儀がござりまする。むかしく、ロッシュュースが羅馬の

俳優たりしころ……

俳優共が参りました。

ハム プズ、プズ、プズ！

ボロ 何がさて……

ハム 俳優おのく、驢馬に騎り……

ボロ ……彼等こそは天が下の名優でござる、悲劇にもよく喜劇にも宜しく、歴

史物、山野物、山野が、りの喜劇、歴史が、りの山野が、り、乃至は悲劇仕

立の歴史物、悲劇仕立の喜劇混りの歴史が、りの山野が、りにもよろしう

ござれば、場面を變へぬ作にも制限の無い作にもよろしい。セネカとて

も重過ぎませず、ブロータスとても軽過ぎませぬ。定型物まれ、即興物ま

れ、類無しの技倆者でござりまする。

ハム あはれ、エフタ、以色列の士師……でもおぬしは見事な寶物をお有ちや

つたなう！

ボロ どのやうな寶物を有ちをりました？

ハム はて……

花の娘を只一人、

又無き者とめできるが……

（傍を向きて）相變らず女が事を。

ボロ ハム なう、エフタの叟よ、何とさうであらうが？

ボロ 小官をエフタと呼ばせらるゝか、いかさま、小官、女をば一人有ちをりまする、はい、又なきものと愛でをりまする。

ハム いや、さうはならぬわ。

ボロ なりや如何なりますな？

ハム はて……

業因果か神ぞ知る。

その次は

思はぬ事こそ起りけれ。

あとは彼唄の劈頭を見やれ。……もう中止ぢや、あそこへ氣を換へる物が

來たわ。……

四五人の俳優入來る。

お、ようおじやつたの、師匠たち。皆よう來たな。一同達者でめでた

いなう。ようおじやつた。……お、おぬしか！先度とは異うて顔に目

覺しい飾が出來たの、こりや予の方から卑下をせにやならぬわ！……や、

若姫御兼奥方ぢやの！ 姫神も照覽あれ、御も久しう見なんだうち、恰ど

繼足の長ほど、天へ近うおなりやつたぞよ。祈禱しや、よ、聲が不通用金

貨のやうに、輪の中へ割込まぬ用心にな。……師匠たち、皆よう來てくれた

の。時に佛蘭西の鷹匠ではないが、見かけたが最期ぢや、すぐに何か一白

聽かうぞ。さ、技を見しや。さあ、何か悲壯な條を。

俳優長 何に仕りませう。

ハム いつぞや汝に或長白を聞いたことがあるが、それは舞臺には掛けられなん

だものぢや。掛けたにせい、一度以上はなかつた。何故なれば、俗は受けなんだものぢや、彼等には醜態であつた。なれども予が聞いた所、まつた此道にかけては超と予に立勝つた人々の評判では、場面も善う整うて巧妙でもあり穩健でもあるといふ立派な作ぢや。今も記えてをるが、或人が言うたに、強ひて味を附けうとて薬味を撒けたといふやうな句もなければ、兼取つた作者ぢやと難癖を附けられさうな文意も見えぬ、いはゞ正路な作法、口當りも佳いが毒も無い、そして美しうもあるが、拵へすまいたのではなうて自然ぢやと言うた。其中の最好もしう思つた長白はエニヤスがダイドー御前への物語ぢや、とりわけブライヤムの最期を語るあたりぢや。まだ記えておゐるならば、此句から始めておくりやれ。かうつと、かうつと……

「さても荒々しきビルラスは、彼のヒルカニヤの獸のごと……」

さうでは無い。……はじめは「ビルラス」ぢや。

「さても荒々しきビルラスは……ゆゝしき馬腹に臥すからに、心も黒し腕も黒し、げに烏婆玉の夜かとも、面も頭も爪先も、隈なく塗つたる韓紅は、主殺さるゝを無慚にも照らす都の兵燹に、焼け凝りたる父よ、母よ、女の子、男の子の血汐なり、斯く凝血を塗り被つて、眼はさながら紅玉の、烈火と猛つて鬼ビルラスは、老いたる王をぞ尋ねける」

さ、この後を附けたり。

ボロ

さて〜お功者なことぢや、抑揚と言ひ、お氣の入れかたと申し。

俳優長

「やがて彼れに逢ふ。いたはしや老の身の、手馴れし劍も心に任せず、あしらひかねて立つたる處に、兎を覘ふ荒鷲の、ビルラス颯と驅寄せ、猛つて撃てば、靨は外れて太刀風に、よろめきまろふ老人よ！ さすが非情の城樓も、此一撃にや感じけん、炎々たる其頂上、雷火と碎け

て落ちければ、ビルラス暫く耳聾ひたり。見よ、白頭の老翁を、斫らんとて揮上げし、劍は空にとまつて、畫ける猛者のそれかとも、斫りもやらず、助けもやらず、立縮む。

「さもあらばあれ荒るゝ日に、大空暫く寂寞と、雲は鎮り、風に聲なく、下界も死んだる折ふしに、雷虚空を裂く如く、ビルラスやがて敵意を復し、血汐したゝる大劍を、老王めがけて打下す。神世のむかしサイクロップが不滅の鏡をマーズのために鍛ひに鍛ひし鐵槌とても、よもかばかりには無仁ならじや！」

「につくし、にくし、おのれ淫婦、運命神！ 八百萬の神々よ、あはれ神ばかりに謀らせたまひて、彼奴が力を奪はせてたびたまへや、彼れが有つたる小車の、輜も輻をも打摧いて、残る轂を久堅の、天の丘より鬼住ふ奈落の底まで抛げうちたまへ。」

ボロ

こりや些と長過ぎるわ。

ハム

刈込ませたがよからう、その髻と一しよに。……さゝ、續けておくりやれ。道外節か淫猥話で、も無ければ眠てしまふ男ぢや、さあ〜へキユバの條を。

俳優長

「さはさりながら人誰れか、包める后を見し誰れか……」

ハム

「包める后？」

ボロ

結構ぢや。「包める后」は結構ぢや。

俳優長

「眼ぞ昏む涙雨に、燃ゆる火、消よとばかり、昨日までは嬰路の懸りし老の額には、あさましや古襪、多くの子達を生みまし、其弱腰を纏へるは只一重の毛織物、赤跣足にて彼方此方と走らせたまふを見し誰れか……毒に浸せる舌を揮つて運命神を罵らざる？ 天上の神々も

此有様を見そなはさば、ビルラスが不仁にも彼女が夫を斫り責み、老いたる後の斯くと見て悲み叫ぶ聲音には……人界の哀傷に神の心の動かすばいさ……天つ眼の焰も濕つて、神の御胸も痛まん。」

あれ、御覽せ、太夫は顔の色を變へ、眼中には涙をさへ湛へをります。……(俳優に對ひて)もはや止めておくりやれ。

ハム けつこうぢや。残りはやがて演じて貰を……なう、卿よ、太儀ながら此俳優共を接待してたもるまいか？ え？ これの、彼等をば懇切に扱うてやりめさ、俳優は當代の粹を見する簡短な活歴史ぢや。死後の碑文は如何あらうとも、息のあるうちに彼等に悪しう寫されぬがよいぞ。

ボロ 相當に扱ひ遣すでござりませう。はつて、そここではならぬわ！ 強ひて相當に扱はうならば、咎をまぬかるゝものが世にあらうか？ 此方の身分相當に相手をば勞りめさ。よ

ボロ 侍遇が相手の分に過うとも、それは恩惠の裕な證ぢや。 伴て往かしめ。 ちへおじやれ。

ハム 從いて往きやれ、明日は劇を観うぞ。

俳優長 ボロニヤスに從いて俳優長の他皆々入る。 ころやく／＼師匠。「ゴンザゴ殺し」をば演じておくりやらうかの？ 中々、畏まりました。

ハム 明日の晩に演じてほしい。事によつたら、十二行乃至十六行程の白を予が書下いて挿入れうと思ふが、何と暗誦えておくりやらうか？ 中々、畏まりました。

俳優長 よし。あの卿に尾いてゆきやれ。したが弄物にすまいぞよ…… 俳優長 入る。ローセンクラッツとヤルテンスタアンに對ひ かなか、晩じてから又逢はう。 ようこそ此エルシノーアへはお出でや

つたの。

御前、さやうならば！

ロ  
ハム

お、さらば、機嫌よう！

ローゼンクランツ、ギルデンスターン 入る。

今こそは只一人。お、何たる無頼漢の士百姓ぞ予は！ さてもく奇  
怪ではないか？ あれ、あの俳優が、只假初の假作事の哀傷に、我れと我心  
の底までも感動させ、それがため顔色は蒼ざめ、目には涙を湛へ、見るから  
に物狂ほしく、物言ふ聲も断々續々に、一舉手一投足の末までも其人柄に  
相應さすといふは？ しかもそりや何の爲にか？ へキュバの爲にか？  
：かくまでに歎き狂ふ彼れに取りて、へキュバは何者ぢや、まつたへキュバに  
取つて彼れは何者ぢや？ 彼れに我有つたる程の大悲憤の因由があり所  
縁があらば、如何な事をなしをるであらうぞ？ 涙を以て舞臺を溺らせ、

怖しい白を以て聴衆の耳を突裂き、覺ある者を狂せしめ、覺無き者をも畏  
れしめ、辨別無き者をも惑はしめて、目をも耳をも騒さうす。然るに予  
は！ 鈍根愚昧の横道者、拔作鈍太郎のやうに、十二分の理由ありながら、  
徒らに因循し、只一言をも能  
い言はぬ、王權をも生命を  
も奸賊の爲に失ひたる現在  
の父、國王の爲にすらも。  
予は卑怯者か？ 予を惡漢  
と呼ぶのは誰れぢや？ 我  
素頭を打割り、我髻を笔取つて我面上に叩きつけ、我鼻柱を引振つて予を  
虚言吐、大虚言吐と罵るのは誰れぢや？ 何處の何奴ぢや？  
や！



虚言吐、大虚言吐と罵るのは誰れぢや？ 何處の何奴ぢや？  
や！

無念千萬、なれどもその通りぢやと言はねばならぬ、成程子は臆病者で、虐  
げられても腹を立つだけの意地さへも無いに相違ない、さなくば夙に、彼  
の人外めの腐肉を以て國中の鷲の腸を肥いた筈ぢやわ。おのれ、荒淫無  
慚の悪漢！ 殘忍非道、不倫醜褻の悪漢めが！

おのれ、此怨！……

はて、予は何たる大阿呆ぢやー え、立派ぢやわい、奇特ぢやわい、現在  
の父を殺され、天地共に復讐を責促るに、口先ばかり賣女のやうに氣安め  
の言句を並べ、只はしたなく咀ひ罵る、腐卑女のやうに……。賤婢！

あさましい！ え、あさましいわい！ やい此腦めは活動かぬかい！…  
…傳へ聞く、さる罪惡の覺ある者曾て演劇の見物せしが、巧なる筋立の身  
につまされ、即座に舊惡を白状せしとか。げに殺人の罪に舌はなくとも、  
いつかは不思議に露はるゝ。俳優どもに吩咐けて、叔父王が面前に、父が

最期に似通うたる事を演せしめ、顔色に心を着け、彼れが窮所に探を入れ  
う。 びくとでもするならば、我取る道は定まる道理ぢや。 一つぞや見た  
る亡靈は惡魔かもはかられぬわ、惡魔は好もしき姿を粧ふといふ。 或は  
予、此日頃、心氣頻に衰勞して憂愁に沈みをれば……。 かやうな際には、とか  
く乗せられ易いといふ……。 陥れう底意かも圖りがたい。 確な證據がほし  
いものぢや。 王が本心を探る手段は演劇の他には無いわい。  
入る。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱

第三幕

第一場 城内の一室

王、妃、ポローニヤス、オフィリヤ、ローセンクラントツ及びギルデンスタアン入來る。

王 すりや、如何に遠廻しに問試むるも、何故安らかにも送らるゝ身を、かく故意らしう荒狂ひ、人をも危ませ、自らをも苦しむるか、其仔細を申さぬとなり？

ロー 御自身にも御不例とはおつしやられますが、何故とも仰られませぬ。

ギル

探りまわらするを好ませられぬげに、とかうして御本心を伺ひまわらせうと仕りますると、狂人めいた御辯口にて、つと餘所事に紛らせられまする。

妃

兩卿への待遇は何様

ロー

でござつたぞ？

いかにも正しいお行儀ぶり。

ギル

しかし、何とやらんおむづかしげなる御氣色にも相見えまして。

ロー

お話は好ませられませぬものゝ、問ひまわらすれば、十分御返答は遊ばされました。





妃

何ぞ慰樂を勧めて見てたもつたか？

ロ

さればでござります、参る途中にて、圖らず或俳優共を追越しましたゆゑ、

其儀申上げましたる所どうやらお喜悅の御様子。彼等は既に参向致し、

今夕御前にて、何か演じまするやう仰付けられましたげにござりまする。

ホ

其通りにござります。兩陛下にも上覽あらせらるゝやう願ひくれいとの

王

お言葉にござります。喜んで覽ようす。彼れの心が遊興事へ向うたとは何よりも喜ばしい。：

ロ

：兩卿には此上とも、其志の鈍らぬやう、傍らから介添しておくりやれ。

王

畏まつてござります。

ロ

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

王

ガアツルドどの、御事も暫し此場を。ふとオフィリヤに逢はせうため、

王

唯今是へハムレットを窃に招かせておいたによつて。ポローニヤスと吾

妃

等とは、法の許す牒者となつて、物蔭に潜み、二人が出會の様子を窺ひ、此中の煩悶は、戀病か、さもないか、舉動によつて判断せうと存する。

御意に従ひませう。：：：なう、オフィリヤ、和子の心が狂うたのは和女の標致ゆるであれかしと念じます。すれば和女の優しい氣立が正氣に返ら

する縁ともなり、所詮は二人が面目ともなりませうすほどに。御意の通りであつてほしいと存じます。

オ

妃入る。

ホ

オフィリヤよ、和女は此邊を歩いてゐやれ。：：：憚りながら、陛下、物蔭に忍びませう。：：：(又オフィリヤに對ひ)此書を読んでゐやれ、さういふ行をしてをれば獨りゐても怪しうは見えまい。：：：ともすれば人間は、此つれな不埒をするものぢや。信心らしい面附と殊勝らしい行體で、惡魔根性に口當りのよい外被を掛くる、それがまたそこにもこゝにもあるためしぢや。

王

(傍を向いて)お、全く其通りぢや! 今の一言は我良心に鋭き筈を加へるわい! 塗立て、美しげに見ゆる賣女の頬が、紅白粉に比べて穢いよりも、我行は、我極彩色の言葉に比べて、尙幾段も穢いわい。お、つらやの!

ホロ

見えさせられたやうにござる。こちへ入らせられませい。

王とホローニヤスと入る。

ハムレット 入来る。

ハム

存ふるか、存へぬか? それが疑問ぢや... 残忍な運命の矢石を、只管堪へ忍うでをるが大丈夫の志か、或は海なす艱難を逆へ撃つて、戦うて根を絶つが大丈夫か? 死は... ねむり... に過ぎぬ。眠つて心の痛が去り、此肉に附纏うてをる千百の苦が除かるゝものならば... それこそ上もなう願はしい大終焉ぢやが... 死は... ねむり... 眠る! あ、おそら

くは夢を見う!...そこに陰魔があるわ。此形骸の煩累を悉く脱した時に、其醒めぬ眠の中に、どのやうな夢を見るやら、それが心懸りぢや。憂世の苦厄を自分と長びかすも、畢竟は此故ぢや。短剣の只一突で、易々と此生が去らるゝものを、誰がおめく〜と忍うでをらうぞ? 世の凌虐や侮辱を... 虐主の非道や驕る奴輩の横柄や、成就はぬ戀の切なさ、長びく裁判のもとかしま、官吏の尊大を堪忍すればよいことにして君子大人をも虐ぐる小人共が無禮などを... 死後の危惧でもなくば... 誰が此厭な世に、汗を流し呻いさながら、此様な重荷を忍うでをらうぞ? 曾て一人の旅人すらも歸つて來ぬ國が心元ないによつて、知らぬ火宅に往くよりはと現在之苦を忍ぶのでがな... まつ此様に、良心は人を臆病者にならする、まつた決心の本の色は蒼白い憂慮に白ちやけ、如何な大事の企圖も、このゆるに逸れ、果は實行の名を失ふ... (オフィリヤに目を着けて) や、まて暫し!

オフィリヤちゃんな！……（オフィリヤに

對し）なう、姫神、予が罪の消滅をも

祈り添へてたもれい。

オフ まうし御前、此中は如何わたらせら

れまする？

ハム 忝うおじやる。健康ぢやく。

オフ まうし、御記念の賜物をば、とうか

ら返しまぬらせうと存じてをりま

した。お受取下されませ。

ハム いや、予は受けぬ、予は何も與した

覚えは無い。

オフ 慮外ながら財はつたを能う覚えて



をりまする。嬉しいお言葉が添うたりやくこそ、忝う思うたれ、香が失

たからは納めさしませ。心ある者は、いかな貴い寶も、眞情が添うてゐね

ばあさましよう思ひまする。さ、御前。

ハム は、は、は！ 和女は貞女か？

オフ ええ？

ハム 美人かよ？

オフ なせに其様なことをおつしやりまする？

ハム はて、貞女でそして美人ならば、貞女と美人とは親しうさせぬがよいとい

ふことぢや。

オフ 貞女と美人となら、好朋輩ではござりませぬかえ？

ハム けもないこと。なせとお言れ、操を墮す美の力は美を引上ぐる操の力

の幾層倍ぢや。これが不理窟と思はれた頃もあつたが、今はそれが尋常

ぢや。以前は和女をば可憐いと思つてゐた。

オフ 實、妾も然うとばし思つてをりました。

ハム さう思つておゐやつたら大間違であつた。徳はなんぼう接木しても悪し

ハム い臺木の元の氣は脱けぬわ。可憐う思つてはをらなんだ。

オフ すれば甚い思違へをしてをりました。

ハム こりや寺へ行きや寺へ。なんで罪業者を鞠育てうとはお爲やるぞ？ 予

などは随分正直な生得ぢやが、母御が生んでたもらなんだらばと怨めしう  
思ふ程に、高慢で、執念深うて、野心が激しうて、自身で許しさへすれば、澤  
山悪事をもしかねぬ、たゞそれを調整へる思案とそれに像を附くる想像と  
それを行ふ時と場合とが無いばかりぢや。天地の間に匍匐る予のつれの  
ものが何事かを能せうぞい。人は悉く怖しい悪漢ぢや。誰れをも頼に  
爲やんな。尼寺へお行きやれ。……父御は何處にぢや？

オフ 宿にをりまする。

ハム よう閉込うでおいたがよい、我家でもない所でえせ猿がうをお爲やらぬた  
めに。さらば。

オフ (傍を向いて) お、神々さま、王子を救うて賜はりませ！

ハム (行きかけて又戻り) 自然嫁入を爲やるならば、祝儀物の代りに、かういふ呪咀を  
與さうぞ。……假令和女が、氷のやうに清淨であらうと、雪のやうに潔白で  
あらうと、世の悪口はまぬがれまいぞよ。……寺へ行きやれ寺へ。さら  
ばぢや。……(行きかけて又戻り) 又は如何あつても嫁入をするとならば、阿呆  
の妻になりや。發明な男は、汝等が如何な怪物と彼等をするかを能う知  
つてをるによつて。寺へ、さ、片時も早う、さらばぢや。

オフ (傍を向いて) お、神々さま、お正氣に戻いて賜はりませ！

ハム (行きかけて又戻り) そちたちが紅白粉で塗りこくり、神の下されたの、他に面

を作るといふことも、よう聞いて知つてをる。跳る、品をする、甘たれる、神の作物に渾名を附ける、淫蕩をも無知ゆゑちやと言抜ける。もうく塘忍がならぬわ、予はそれがために氣が狂うた。結婚はもうさせぬぞ。既に結婚した者は、只一人の外、そのまゝにさせておく、餘の者は今のまゝで一生を送らうぞ。さゝ、寺へ。

ハムレット 入る。

オフ

おゝ、たぐひない御方の、あさましいお身の果！ 殿上人の眼附に博士の辯舌、武士の武器業、國の花、末の力と皆人に頼れて、風流の鑑、躰の型と崇められてゐさしましたに、もう無効ぢや、もう無効ぢや！ 生中天の樂のやうな御誓言の蜜を吸うたるゆるゑ、世の中の女子中で最あぢきない身となつたわ！ 盛りの花のお姿も狂亂の嵐に萎れ、高尚いお心も、調子を外いて荒々しう振合いた鈴の様に、ゆかしかつた音色の名残も無い。おゝ、何た

る因果ぢや、以前を見た目で今を見るとは！

王とポローニヤスと入来る。

王

戀ぢや？ いやく戀ではないわい。只今彼れが言うたことは、聊か條理を缺いてをれど、狂人のやうでもない。何か心中に鬱々と孕み育つるものがあるわい、自然それが解つたなら容易ならぬことが出来る。それを先だつて禁むるため、只今咄嗟の思立、多年怠つたる貢物催促のため、彼れを英吉利へ遣すべし、異なる國の山水風物、見るもの聞くものが珍しければ、我歎を忘れ果つるまで蟠つた惱も解けうす。御身の意見は？ 一段の儀にござりませう。併しお病患の原因は、やはり叶はなんだ戀ゆゑちやと存じます。……どうぢや、オフィリヤ！ あゝいや、王子仰のことは申すに及ばぬ、残らず聞いたわ。……御意の通りに遊ばされませう。したが、御異議なくば、演劇の果ましたる後、御母妃、王子とお差對にて、御

ポロ

病患の仔細立入つてお尋問のつたらば如何にござりませう？ 御意により、小信そと傍聞仕りませう。お妃の方にも及びませずば、其折英吉利へなり、まつた御賢慮のまに、幽閉所へなり、お移しあらせられて然るべう存じまする。

三

そのやうにはからほう。

位高き者の亂心は打棄て、はおかれぬわい。

皆入る。

第二場 城内の一室

ハムレット 先に俳優等入来る。

ハム

白をば、予が物したやうに、輕うすらくと言廻いて貰ひたい。例のわざ

俳優長

ハム

とらしい白廻しを聴く程なら、町の呼報者に吩咐けて叫かされたはうが優ちやわ。まつた手もてこのやうに空を切るまい。總別しとやかに物したがい。畢竟情が高ぶつて、早瀬、暴風、乃至旋風のやうに狂ひ亂るゝ最中ちやとて、必ず程といふことを學うで、ふくらみを失はぬやうにするが肝腎ぢや。おゝ！ 予は彼の荒事師どもが、わつけもない默劇や空騒の外は能う賞翫せぬ土間連の氣を取らうとて、荒廻り叫立つるを観るたびに、何とも堪忍がなりかぬるわ。暴風神を演過いたり、暴君を演過いたりするを見ては、打懲いてもやりたいわい。あのやうなことは止めてくれい。畏りましたござります。

ちやというて穩柔過ぎてもならぬわ。そこはめい、心を師として、科介に白を合はせ、白に科介を合はせたがよい。とりわけ大切なのは、自然の程合を過ぎぬことぢや。そも、演劇は、今も昔も、いはゞ消化に鏡を捧

げて、正邪美醜の相容や當國、當世の有りのまゝを寫いて見する筈のものぢやによつて、度を過いては本意に外るゝ。尤も、過不及とも、初心の觀者は興じもせうが、數千人の客よりも只其一人にこそと日頃思うてゐねばならぬ筈の、其見功者にはあさましう思はれうぞ。然るに、ともすると人間の役を演じながら、殆ど基督教を信する人間の聲、舉動とは思はれぬ程に、いや異教徒まつた土耳古人とすらも思はれぬ程に只もう荒狂ひ叫き立て、恐らくこれは造化翁の傭手めが下手々と作りをつた人間でもあらうかと思はするやうな俳優もある、それをまた方量もなう褒立つる輩もあつたわ。

俳優長

その邊は随分と改めました心得にござります。

ハム

はて、悉く改めたがよい。次に道外方には定めの文句の外は言はずまいぞ。ともすると本筋の邪魔となるをば思はで、無智の見物を笑はせうた

めに、我れから馬鹿笑ひをする輩もある。わるい癖ぢや。かやうなことを名聞とする道外方は笑止千萬ぢやわい。さゝ、支度さしめ。

俳優長 入る。

ボローニヤス 先に、ローゼンクランツとギルデンスタアンと入来る。

ボロ

どうでおじやつたの？ 王には劇をば観させられうかの？

ハム

お妃も御一しよにて直さま成らせられます。俳優共を急がせておくりやれ。

ボローニヤス 入る。

ギル

御身たちも手傳うて催促しておくりやるまいか？ 心得ました。

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

ハム

なう〜！ ホレーシオ！

ホレーシオ 入来る。

ホレ お前にをりまする。

ハム ホレーシオ、おぬしこそは予が交際うた人の中の眞の君子人ぢや。

ホレ はて是は何事を……

ハム あゝいや、追従をいふとは

し思ふまい。高潔な魂の

外には、何一つ衣食の料と

なる収入もないおぬしか

ら、何で予が推舉を望ま

うぞ。貧者は追従をされぬものぢや。

砂糖浸しの舌は驕る愚人を舐めた

がよし、蝶番の自在な膝は諂うて利のある處で曲げたがよい。こりや我



ホレ

合點でござります。

演劇の最中にそつとでも目を盗まれましたら、賠償

ぬしを常に上もないものと極印を附けた。何故とお言れ、おぬしは運

命の賞罰を一樣に甘んじ受け、如何な事に出會うても動する色が無い。

あゝ、彼神に弄ばれて心にも無い音を出す筈のやうでは無く、血氣と分別

とを等分に備へた手合こそは仕合せものぢや。情の奴とならぬ男を予に

賜れ、我胸の中央に、底の底に、おぬしと同じに安置して守本尊ともするわ

い。……つい餘計なことを言うた。……今宵、王の前にて、演劇の催す筈、其

中の一場面は、我父の最期の様によう似てをる。幕が開いたら、魂を凝し、

叔父者の様子を窺うてたもれ。若し彼れの隠匿が或一白にだに現はれず

ば、いつぞやの亡靈は悪魔にて、吾々の想像はワルカンの鐵砧ほどにもむ

さくるしいわい。よう氣を着けて見てたもれ、予も彼れが面を見つめ、従

にて互ひに語りあうて、其上で判断せう。



ハム は私がいたします。  
 はや観覽に參つた様子ぢや。予は氣が狂うてゐねばならぬわ。な、御身も何處ぞで。

アンマークの進行曲を奏する。喇叭の聲の中に王妃を先に、ボロニヤス、オフィリヤ、ローセンクランツ、ギルテンスターン及び他の公卿炬火を携へたる衛兵など入來る。

王 ハムレットや、如何に暮しめさるぞ？  
 ハム 立派に、實正。三度の食事が鬼蜥蜴の好物でおじやる。空氣ばつかり食うてをる、空約束ともいふわ。鶏は斯うしては飼はれぬ。何をお語るやら。それは予への言葉ではないわ。  
 王 はて、もう予の言葉でもない。……(ボロニヤスに對ひて) 卿よ、御身はむかし大學で演劇を演たとお言つたなう。

ボロ 御意の通り。しかも上手ぢやといふ評判でござりました。  
 ハム して如何な役を演じめされた？  
 ボロ ジュリヤス・シーザーを演じまして、神殿で殺されました。ブルータスが殺しをりました。  
 ハム 何ぢや、噛取る？ 人の命を噛取るとは、さて〜虎のやうな奴ぢやの…  
 ……俳優共の準備はよいか？  
 ロー 中々。御意を相待ちをりまする。  
 妃 ハムレットや、こゝへおじや、予の傍へすわりや。  
 ハム いゝや、母上、こちらの金屬のはうが引力が強うござる。  
 とオフィリヤの傍へ寄る。  
 ボロ (王に對ひて) おほう！ あれを御覽じませい。  
 ハム 暫らく御裳を借させませい。

といひつゝ、オフィリヤの裳裾に近く横になる。

オフ あもし、御前……

ハム はて、裳の裾へちよと頭を載せるばかりぢや。

オフ よろしうござります。

ハム 田舎業でもするとはし思やつたか？

オフ いゝえ、何とも思ひませぬ。

ハム はて、美人の脚間に枕などゝは善い思附ぢやわい。

オフ え、何と御意なされます？

ハム なにさ。

オフ いかう浮かれてゐさせられます。

ハム たれが、予が？

オフ 御意にござります。

ハム

おゝ！ 徒のおことの戯歌作者ぢや。かういふ折に浮かれいで何とせうぞい？ あれを見ませ、母君の嬉しきうな顔附、父君がなうなつてから、恰ど二時間ぢや。

オフ

いゝえ、もう二月の二倍にもなります。

ハム

え、その様になる？ なりや黒は鬼に被せたがよい、予や貂皮でも被てくれうわ。 あゝくゝ！ 二月も前にお死にやつたのに、まだ世間から忘れもせぬ？ すれば、権門豪族の名は半年位は死んでからも持つと見ゆるなう。 したが寺でも建てんければ、所詮は彼のひよこすか馬のやうにならう。 彼奴の碑文は斯うぢや「見やれ、お見やれ、ひよこすか馬も、いつか忘れられ、棄てられた！」

オガイ 木笛を吹く。 黙劇の俳優入来る。

ワウ 王に扮したる者と、妃に扮したる者と、いかにも嘘じげに擁抱さ

あひつゝ入来る。妃は膝まづいて何事か王に對ひて主張する  
 介。王は妃を扶け起して其頭におのが頭をもたせかくる、やが  
 て草花の咲亂れたる堤に身を横たへる、妃は王の眠れるを見て  
 出行く。すると一人の男入来りて王の金冠を奪ひて之に接吻  
 し、王の耳へ毒液を注入して入る。妃歸來り王の死せるを見附  
 けて悲歎の科介をする。以前の毒殺者は二三の黙優を伴れて  
 又入来り、妃と共に悲む爲をする。死骸を荷ひ去る。毒殺者は  
 何か贈物をなして妃を説く、しばらくは否み嫌ふ介をしたる妃  
 は竟に其心に從ひ、共に睦まじげに擁抱うて入る。

オフ あれは何でござりますか？

ハム はあて、あれは隠匿……悪い事といふことぢや。

オフ 今の黙伎が劇の筋でござりますかえ？

序詞役 入来る。

ハム 此奴で一切が解らうわい。俳優は秘いてをることの出来ぬものぢや。

オフ 悉皆口外つてしまふわ。

オフ 今の黙伎の解明をばいたしますかえ？

ハム 中々。如何な舉動の解明をもする。見するを恥かしうさへ思やらぬな

らば、如何な事の解明をも恥かしうは思はぬ奴ぢや。

オフ またそのつれなことをば。妾は劇を見ませうず。

序詞役

吾等が爲、まつた吾等が悲劇の爲に。

茲に寛仁なる方々の御前に屈みて、

御心長う御覽せられ候へかしと願ふ。

入る。

ハム 序詞か、指輪の銘か？

オフ ほんに短うござります。

ハム 女の戀のやうに。

王と妃とに扮したる二人の俳優入來る。

劇の王

いかに后、御身と予とが、互ひに深く相思うて、ハイメン神の許を受け  
妹背の契を結びてより、太陽の太神の御車は、ネブチューン神の沙路を  
も、テラス神の圓陸をも、三十度までこそ廻行りたれ、又三十返り十二  
の月は、借れる光の燦然かにも、十二返り三十度まで、此現世をぞ照い  
たる。

劇の妃

さばかり長き旅路を、日も月も又こそ辿り候ふべけれ、吾等の戀の果  
てんまでには。さもあれ、うれたきは此頃の御衰弱なり、安き心も  
候はぬぞとよ。安き心はあらずとも、御心にな掛けたまひそ。愛と  
憂との均しきは女子の心の常なり、或時は共に無く、或時は限際無し。

劇の王

君ぞ知る我愛情を、其愛情の深ければこそ、唯いさゝかの疑懐だにも  
やがては身を責むる憂きことゝなるぞ戀の習ひなる。  
いやとよ、我妹子よ、我身力衰へぬれば、遠からずして訣れつべきなり。  
尊まれ愛まれて、御身は世に存へたまへ。また頼もしき人をも見立  
て、後の夫とも……

劇の妃

な宜給ひそよ餘れる語を。さる心こそは二心ぞ。又の夫こそは禍  
なれや！ 始の夫を殺す程の女子ならでは後の夫には見えまじきを。

ハム

(傍を向きて)ウオオムウツド、ウオオムウツド！

劇の王

又の婚姻を思ふ心は、戀情にはあらず利欲とこそ。後の夫に搔抱か  
れ候はん日は、先の夫を改めて殺し候ふ日よ。  
其御言葉の、御心と一つなるを信ずれども、人は心にしかと思ひ定め  
たることをも破りさふらふ。志望は記憶の奴隷にして、生るゝ勢ひ

は猛なれども、生長つことは覺束なし。熟まぬ程こそあれ、秋來れば  
 熟果の如く、振はざれども標落す。我心の負債は拂ふを忘るゝこと  
 必然なり。哀しきにつけ、樂しきにつけ、情の思立たせつる事は、情  
 盡きては力を失ふ。喜び極まる所に悲の極まり、悲喜立地に顛倒す。  
 人生は無常なり、切なる愛と雖も利運と共に消長す、何の不思議かあ  
 らん。愛と利との先後は如何？ 豪家も倒るゝときは寵人も走りて  
 避け、貧者も世に出づれば、敵も身方となる。利は先にして愛は後な  
 らん。富むときは友に事缺かねど、事缺きて友を求めば、友も即て敵と  
 ならん。さもあれ立戻つて、正しう申さんするが、志と運命とは背き  
 易く、人の計畫は常に破る、思念は我有なれども事は我有ならず。今  
 こそは又の夫に見えまじとも宣給へ、予死なば御心の動かんすらん。  
 予、君に別れて、再び人妻となりもせば、地は食を與へず、天は光明を

劇の妃

ハム

あれを破つたなら！  
 賜すもあれや！ 晝夜の慰安も知らで、頼みも望みも盡きよ！ 獄舎な  
 る苦行者と憂日を途りて、喜の色を奪ふあらゆる不幸は、ありとある  
 我吉事を滅せかし！ 此世にも後の世にも、禍災の身に纏へところ！

劇の王

深くも誓はせられ候ふよ。我妹子よ、暫し彼方へ。いたう疲れぬれ  
 ば、假寝して紛らし候はんす。

眠る。

劇の妃

御眠に御心を休められ候へ。あはれ、災禍よ、ゆめ我等が身の上には  
 來らずあれ。

入る。

ハム

母上、お氣にめしましたか？

妃

妃かちと言過はすまいかと思ひます。

ハム いや、言うたことは守りませう。

王 此筋立をばお知りやつてか？ 何も不埒はあるまいの？

ハム いえ、そつとも。ほんの戯れちや、戯れに毒害するのちや。

王 何といふ表題ぢやの？

ハム 鼠おとし。はて、如何して？ 比喩ぢや。ギエンナであつた弑逆を仕組

んだので、太公はゴンザゴ、妃はバブチスタと言つて、やんがて解らせられ

うが、怖しい奸計の話ぢや、が、かまうたことはない。陛下にせい、誰れに

せい、心の潔白な者には不相關いこと。脚に傷有つ馬こそ跳ぬれ、こちらの

脊骨は……

悪漢 ルシヤナスに扮したる俳優入來る。

オフ あれは王の甥のルシヤナスといふ奴ぢや。

御前は、筋語役のやうに、何事も善う御存じぢや。

ハム おゝさ、ちやらつく操人形をお見せやらば、汝と汝の情人との交情も、見事

解中で、見せうぞ。

オフ ほんに鋭いお口ぢや。

ハム 此鋭さを鈍らせうとしたら大唸りに唸らにやなるまい。

オフ はれま、善うもなり悪うもなつた。

ハム さういうて夫を迎へにやならぬわ。……やい殺人者、はじめい、白癩、其醜

い面を止て、早う始めい。さ、怨を晴らせと大鳥の啼く聲も皺枯る。

ハム 心は黒く夜も黒し、薬も利きて手も汚えたり。折もよしや人も無し。

汝真夜中の暗に摘みて、三たび魔王の呪咀に萎れ、三たび毒氣に染み

ぬる草の臭き液よ、汝が怖しき天然の魔力を以て、すぐにも健かなる

命を奪へ。

と毒液を眠れる王の耳に注ぐ。

ハム

彼奴は王位を奪はうために園内で王を毒害しをる。王はゴンザゴというて、眞實有つた話、巧妙な伊太利語で綴つてある。やんがて彼殺人者めが妃をば騙いて手に入れをる。

オフ

あれ、王がお起ち遊ばす！

ハム

何ちや。偽の火を怖しう思うてか！

妃

何となされまゝたぞ？

ボロ

劇を止めい、劇を！

王

燭火を持て。……あちへ〜！

皆々

御燭火、々々々、々々々！

ハムレットとホレーシオの外皆々々入る。

ハム

傷を負うたる鹿は泣くとも

脚に傷無き壯鹿が遊ぶ。

眠るもあり眠られぬも

あらさまぐの浮世や。

何と、これで一束の羽飾とブロウンスの薔薇の二筒も着けたなら……予の運命が如何變らうと……俳優共の仲間に入つて、何と株持になられうかの？

ホレ

中々、半株程は。

ハム

何の、全一株ぢやよ。

知らずや御身デーモンドの、

ジョーヅの神の高御座も、

あさましや、今は主をかへて、

羽ばたくは、嗚々、嗚呼の……孔雀。

ホレ ならば酌をお踏みなされませ。

ハム なう、ホレーシオ、予は亡靈の言うたことを十千萬兩にも買はうぞ。 お見  
やつたか？

ホク 中々。

ハム 毒害せうと言うた時に？

ホレ 正しう見届けました。

ハム え、何と！ さ、音楽ぢやく〜！ さ、笛を持って、笛を！……

殿さま狂言お嫌ひならば、

はて、さもさうず、……お嫌ひあるも有理。

さあ〜、音楽々々〜！

ローゼンクラントツとギルデンスタアンと又入来る。

ギル 憚りながら、一言申上げたい儀がござりまする。

ハム はて、千萬言でも聴かうわい。

ギル え、陛下におかせられましたは……

ハム うん、陛下が何となされた？

ギル お奥に渡らせられました後、きつう御不快の御氣色にあらせられまする。

ハム 御酒が過ぎたか？

ギル いや、御腦氣ゆるにござります。

ハム はて、しからは、侍醫にお通じめされてこそ當然の計ひでおちやつたらう

に。予等などが生中の配劑を試うものなら、一段と御腦氣が募らうわい。

ギル 恐れながら、さやうな埒も無いことを仰せられませいで、當面る公用をお

聴取下されませう。

ハム ならば柔順ういたす。 いうたく〜。

ギル 御母君に於せられましたは、殊の外御心痛の遊ばされ、我々兩人をお遣し



にござります。

ハム ようこそ御入來。

ギル これはいかなこと！ いやなに、まつたうな御返辭を賜はりませうならば、御母君の御諚をば申聞えませうが、さなくば、もう斯うお暇を賜はりまする。

ハム そりや出來ぬわ。

ギル え、何と仰せられまする？

ハム まつたうな返辭をせいといふ、予が心は健全でないから出來ぬわい。予に出來る返辭ならば、御身がたの命のまうちや、いや母上の命のまうちやによつて、そな事は止にして、肝腎の用をお言れ。さて母君が……御母君御諚には、今夕の御舉動には、殊の外御驚愕遊ばされましたとの事にござります。

ハム 何ちや、現在の母親を驚愕させた？ はれ、驚歎すべき忤ちやの！ 只それぎりか、驚愕の後段は無しか？

ロ一 つきましては、御寝なりまする前に、密々御居間にて御對談あらせられうとの御意にござります。

ハム 心得た。母上が十層倍母上であつた程にも命に従はうというてたもれ。まだ何ぞ用事がおじやるか？

ロ一 御前、以前は小官をば御心友とおおぼしめされたと存じまする。今とてもちや、此双手掛けて。

ハム ならば承りまする、なせ御鬱懷にわたらせられます？ 心友と仰せられながらお包みあるは、御自ら世を狭う遊ばさるのでござる。實は、出世が出來ぬからちや。

ロ一 これはまた異なお言葉。王お納得にて御世子にわたらせらるゝではござ

りませぬか？

ハム それはさうぢやが、草が長びる中に……いや、此諺も最早陳腐いわい。

俳優共笛を携へて入来る。

お、笛か！ こゝへ持て……こちへ来ておくりやれ。(とギルダンスダンスを後へ伴れゆき)何で御身は予が風上へ廻るのぢや、係蹄に掛けうとでもするやうに？

ギル めつさうな！ 萬一にも慮外の御奉公にござりましたなら、御前を思ひ過しましたる無様にござります。

ハノ 何の事やら能う解せぬわ。これをお吹きやるまいか？

ギル 小官には吹けませぬ。

ハム どうぞ吹いてたもれ。

ギル 迎も小官には吹けませぬ。

ハム 頼むと申すに。

ギル でも一向に吹きかたをば存じませねば。

ハム 虚言を吐くよりは容易い位ぢや。母指と他の指とで、それ斯う此孔どもを壓へて、息を斯う吹込めば、おのづから善い音色を自由自在に發するわい。それ、これが歌口ぢや。

ギル でもござりませうが、それを善い音色の出るやうに扱ふことが出来ませぬ。手心を心得ませねば。

ハム はて、これは如何ぢや？ すれば御身は予をば一管の笛にも劣る痴者と思ふたのぢやな！ いや、現に予を弄ばうとお爲やつたわ。予が歌口を調べ、予が心の奥秘をもあなぐり、ありとあらゆる予が本音をば吐せうとお爲やつたではないか？ 此小かな一管にも、見ん事、いみじい音楽がある、それを御身は能い鳴らさぬといふ。すれば予をば笛よりも弄び易いもの

と思やつてか？ こりや、子を樂器扱ひにするのは隨意ぢやが、其手際では所詮好い音色は出まいぞや……

ボローニセス 入来る。

や、機嫌ようて！

ボロ 申上げます、お妃の御意にござります、すぐさま御對顔あらせられませ

い。

ハム あゝ、あの雲をお見やれ、どうやら駱駝のやうではないか？

ボロ はて、いかさま、駱駝のやうに相見えませるわい。

ハム どうやら鮎のやうに見ゆるわい。

ボロ 脊附が鮎のやうにも見えませる。

ハム いや、鯨のやうではないか？

ボロ いかさま、鯨のやうにも見えませる。

ハム

すればやがて奥へ往かうわ。(後を向きて)堪忍のならぬほどに阿呆扱ひにし

ボロ さやう申上ぐるでござりませう。

ボローニセス 入る。

ハム 口でやがてと言ふのは容易い……かたぐも退つてよからう。

ローゼンクラッツ、ギルデンスタアン等入る。ハムレット一人残る。

今こそ夜の丑三つ時、をは口を開き、地獄よりは毒氣を送る。今ならば熱

血をも能い飲まう、晝が見ば戦く業をも今ならば能い爲さうぞ。ましてし

ばし！ 先づ母上に……おゝ、心よ、ゆめく本性を失ふなよ。ネロが

魂をば決して此胸に入らすなよ。殘忍の子とはなるとも不孝の子とはな

るまじいぞ。舌をば劍とするとも手に劍を取るまじいぞ、言行表裏といは

うとまゝ。言葉では如何に罵らうと、それに手形をば押すまいぞよ。

第三場 城内の一室

王先にローゼンクランツとギルデンスタアンと入来る。

王

心に叶はぬばかりではない、かやうな狂人を打棄ておくは、吾々の身の上なれば、御身等に伴はせ、直にも英吉利へ遣さうと存する。急ぎ國書を認めう程に、出立の準備を爲やれ。刻々に暮りゆく彼れが狂態、國の爲なれば是非に及ばぬわい。

ギル

支度仕るでござりませう。大君を命の綱と頼み奉る國民の安危を思はせらるゝは、有りがたくも尊い御配慮にござりまする。

ロー

匹夫さへも禍危を避けるためには智慧の限りを盡しまする。まいてや臆兆の生死に係はる上御一人の御身の上。王は單獨にては亡びず、譬へば

王

大渦の巻くが如く、あたりの一切が引入れられて諸共に亡ぶと申す。若しくは山上の大車輪の如く、自然壞れ落つることもござらば、其巨いなる輻の一端に、嵌め添へた限の無数の小器は、悉く破滅をまぬがれませぬ。大君の御歎息な取りも直さず國民の呻吟とござりまする。此上は何卒出帆を急いでおくりやれ。放し飼の狂犬をば、早う鎖に繋ぎたいわい。

ギル

取急ぎまするでござりませう。

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

ローニヤス入来る。

ボロ

申上げます、王子には御母君の御居間へ入らせられます。小官お帳の蔭に潜み、始終を窺ひ奉りませう。一定お妃には厳しう御意見のあらせられませう。最前も御意ありし通り、何が骨肉の御中とて、御最負目も

ありがちなれば、何人か便宜に傍聴仕らんこと至極の御賢慮と存じます  
る。御機嫌よういらせられませい。何れ御影前に、伺候いたし、委曲を  
申上げませう。

王

かたじけなうおじやる。

ボローニヤス 入る。

お、穢き我罪の此臭みは、大空へも達かうわい！ 此世界開けて前先の大  
逆罪……兄殺し！ え、情なや、祈ることが出来ぬわ。祈りたいと思ふ  
心は心底より起れども、罪の深さを思ふときは、其覺悟も破れ、一時に二事  
を行はうとする輩のやうに、あちこちと迷うて何れをも能う果さぬ……  
よし此呪はれたる手に、兄の血が凝着いて二倍の太さとなつてをらうと、  
天憐愍の雨を下さば、雪よりも淨うなりさうなもの！ 罪人の身に照臨な  
くば、大慈悲も何の役に立つぞ？ 祈るときは墮落をまぬがる、まつた墮

落しても救ひを得るとか。此二つの功德がなければ、祈禱の効は無  
さうぢや、此上は神に縋らう。予の科は過去の事ぢや……したが何とい  
うて祈つたものであらう？ 非道の毒害をゆるさせられませ？ いやい  
やこれではならぬわ。殺いて取つた王位、王冠、王妃をば其儘にしておい  
て、罪だけを免さるゝことが出来うかい？ 此亂離の現世では罪を犯いた手  
と雖も、黄金で鍍金すれば、正義公道をも曲げ、ともすると非道に得た財貨  
の力で、國の掟をも買取る。なれども天上の法廷では、何事も見透し、毛  
頭もいつはることは出来ぬ。此上は何とせう？ 悔懺には如何な罪をも  
滅すといふ。いで、悔懺の誠を以て……とはいふものゝ眞の悔懺の出  
來ぬときは？……お、あさましや！ 死の間にも似た我此胸！ 改  
心せうと思へども、竊に取られた小鳥のやうに、もがけばもがくほど罪障  
の元の絆に引戻さるゝ心の苦しき！ 助けたまへ神々！ 試みませい。

こゝみをれ、頑固な此膝め、やい、鋼  
鐵のやうな此心め、赤兒の筋のやう  
に柔軟になりをれやい！ 諸願成  
就々々々々。

王一隅に退りて膝まづ

きて祈る。

ハムレット入来る。

ハム

今こそ遂げうわ、恰どよし、祈の最  
中。いでや怨を……すれば彼奴  
は天へ往く！……予は怨を晴らす  
？ こりや思案ものぢやわえ。 悪  
漢あつて父を殺す、其子其報に件の悪漢を天へ送る、天へ……はて、こり



王

や傭はれ仕事ぢや、復讐ではないわい。 父上、彼奴の爲に、御最期をなさ  
れた折は、塵欲尙胸宇に漲り、罪障は彌生の百花と咲誇つてゐたであらう。  
人事を推して他世の捌を想像れば、嗚や咎めの重からうす。それに何ぢ  
や？ 今彼奴は後世を祈る最中ぢや、今殺さば極樂へも往きをらう、これ  
や返報の法でないわ。……さうぢや、今は討つべき時ではないわい。 酔臥  
すか、邪淫に耽るか、乃至は喧恚、毒舌、遊戯、何にてもあれ、御救の道無き  
程に魂の汚れたる機を俟つて、横さまに薙倒さば、彼奴が踵は天を蹴つて  
黒闇地獄へ眞逆様、永劫の苛責を受けう。……母上のお待兼……暫し命を  
延いて置くは只其病ひを長めうためぢやぞ。

ハムレット入る。

語は空へ上つても心めが地を離れぬ。 心にはぐれた語は天へは達かぬ。

王入る。

第四場 王妃の居間

妃とポロニーヤスと入来る。

ポロ

やがて入らせられます。お手づよう仰せられませい。餘りと申せば  
分量もない御悪戯に、王お腹立あらせられたを、陛下御中に立たせられ、様  
々お調停の始終、篤とお物語遊ばされい。いや、もう黙りませう。必ず  
共にお手づよう仰せられい。

ハム

(奥にて)母上々々々々！

妃

心得ました。氣遣あるな。お退りあれ、あれ、聲が聞ゆる。

ポロニーヤス 垂帳の蔭にかくれる。  
ハムレット 入来る。

ハム

さて、母上、何御用でござりますか？

妃

ハムレットや、そなたは父君に對して大い不埒をお爲やつたの。

ハム

母上、こなたこそ父上に對して大い不埒をなされた。

妃

はれま、わつけもない返答をお爲やる。

ハム

はて、道に外れた尋ねやうをなさるゝ。

妃

これはしたり、ハムレット！ 如何したものぢや？ みづからを見忘れま  
したか？

ハム

いゝや忘れませぬ、十字架掛けて忘れぬ。こなたは妃ぢや、こなたの夫の

妃

弟に再縁なされた……忘れられたらよからうに！……現在の母上ぢや。

ハム

此上は問答の出来る者を呼んで糺明させう。

妃

まゝ、お下にござれ、起たせませぬ。こなたの心の奥底までも鏡に掛け

ハム

て見さす程に、そこ一寸もお起ちあるな。

妃

何としやる？ みづからを殺さうでな？……あれ、誰れぞ来て、あれい！

ボロ

(垂帳の蔭にて) やあ〜！ 出あへ〜！

ハム

(剣を抜きて) や！ 鼠？ こたへたか、うぬ！

と垂帳越しに突く。

ボロ

(中にて) お〜！ やられた！

と倒れて息絶ゆる。

妃

お、お〜！ まあ何事をお爲やつたぞ？

ハム

何をしたか予は知らぬ。今のは王か？

妃

てもまあ手荒い、むごたらしい何といふ大悪行！

ハム

何、むごたらしい大悪行？ 王たる人を弑しておいて其弟と夫婦になつた

に比べたら、悪行でもおじやるまいぞ。

妃

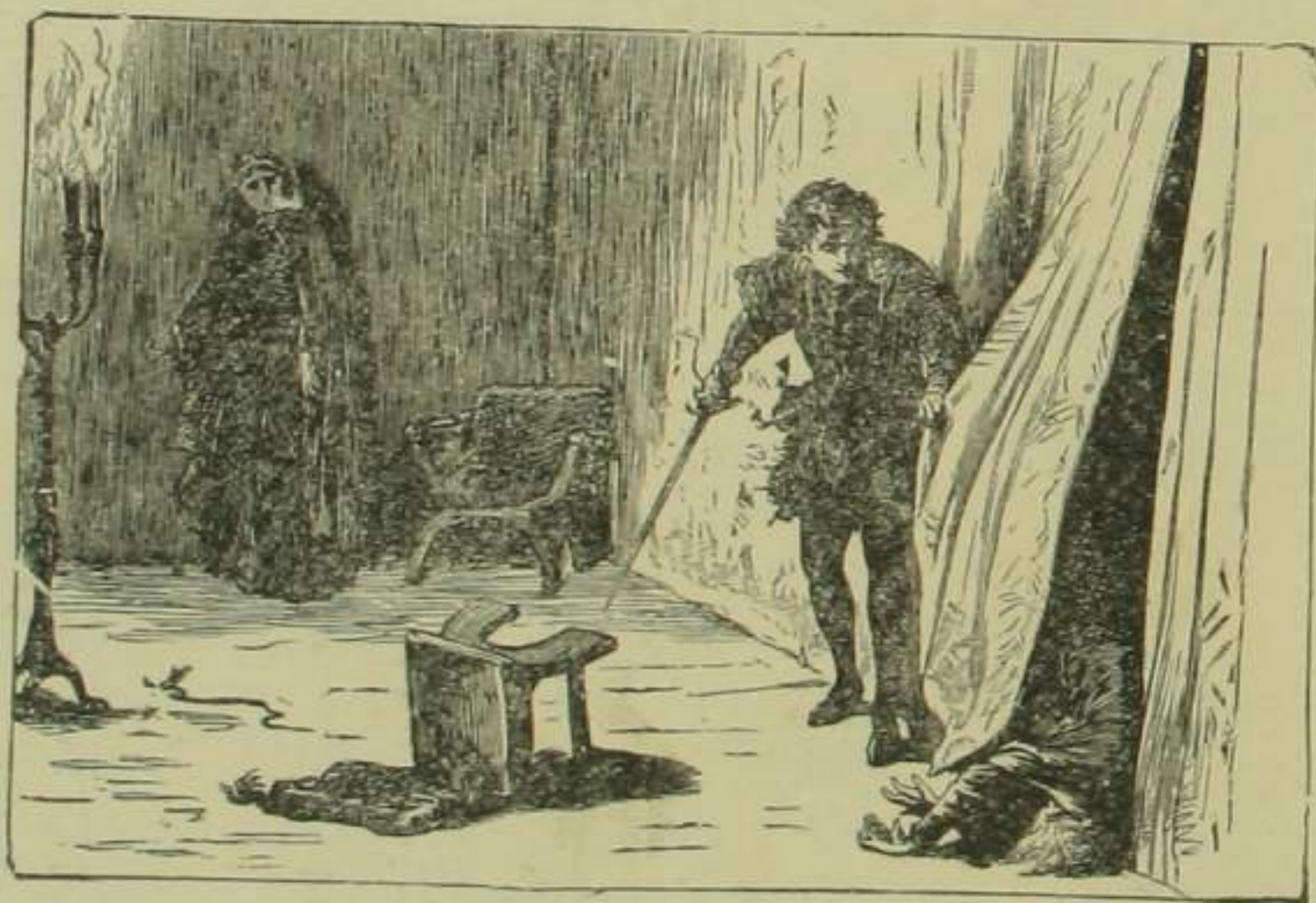
なに、王たる人を弑すると？

ハム

中々、その通りぢや。

とハムレット垂帳を裏ける、ボ  
ローニヤスの死骸現れる。

おのれ、けうこつな、あさましい出過者、  
さらばぢや！ 汝よりは目上の者と思  
うたに、自業自得ぢやわい。 餘りに手  
出しや口出しをすれば危いと悟りをつ  
たか？……(妃に對ひて)これ、手を振絞る  
のを止めさしませ。 ま靜に！ はてま  
あ、お坐りあれ、道理の榨木に掛けてこ  
なたの心をこそ振絞つて見せう程に、邪  
曲非道に慣らされて、性根が鐵石となつたら知らず、かりにも道理が徹る





ならば。

みづからがどのやうな事をしたればか、現在の母にむかうて其様にはしたなう聲高に？

ハム

どのやうなとは、これ母上。廉恥の面に泥を塗り、淑徳をも偽善と呼ばせ、清淨の戀の額から薔薇の章を剝取つて水腫物を代となし、堅き夫婦の契約をも博徒の誓言と一つにさする御所行ぢやわ！ 神に誓うた約束から其精神を抜去つて、有難い宗教をも謔語とする御所行ぢやわ！ 天もこれを見て面を赤うし、此堅い大塊も、慨然として色を失ひ、世界が今にも滅びるげに憂へ悲む御所行ぢやわ！

妃

これはまあ、なんたる所行ぢや？ 序開から凄じい其見脈。

ハム

これ御覽せ、此繪姿と此肖像、血を分けた兄弟ながら、此君の氣高き、立派さ。大陽神の縮髪、チョーヴ神の高額、軍神のやうな此眼には三軍戦き服

すべく、又此立姿は使神マアキユリーが雲に冲る高峯に降立たしたる御風情。姿容の美を集めて、あつばれ人間の鑑ぞとあらゆる神々が極印をば附けさせられたと見ゆる、是れこそ前の御夫。さて此方を御覽せよ、これが今の御夫ぢや。微の着いた麥の穂同然、健かな兄穂を枯らす人非人。母上、こなたは目は無いか？ 此様な美しい山の牧場に飼はれた身で、やうも此様な泥沼で餌をあさらうとなされたな？ こなたはこれでも目があるか？ よもこれを思案の外、戀の習ひぢやとはお言るまい。分別盛りのお年齢、狂ふ血は鎮まつて、事々に辨別のあるべきに、何として此像から此像へお心が移つたぞ？ 情欲のあるからは、一定感覺はおじやらうに、其感覺が麻痺したか？ なんぼ狂うた感覺でも、斯程雲泥と違ふ物を選誤へうほど狂はぬものを。如何なる悪魔が魅入りをつて母上を捉迷藏にしていたぞ？ 感はなくも目があらば、目がなくも感があらば、手も目

もなくも耳あらば、何もなくも鼻あらば、いやさ、狂うた感の只一つだにあるならば、これほどまでには惚けまいものを。……お、羞恥心よ！ 世の中に汝の血統は絶えたか？ 邪淫に老女の心も狂ふ、血の氣湧立つ若い男が、おのが情炎で謹慎も蠟、溶け、身を誤るは道理至極ぢや、恥ぢしむるには及ばぬわい。 思慮分別も邪淫を勧め、霜の中にも火が燃ゆるわ。

お、ハムレット、もう何もいうてたもんな！ そなたの語で始めて見た此魂のむさくろしさ。 何ぼうしにも落ちぬ程に黒々と染込うだ心の穢れ！ いや、膏ぎつた汗臭い臥床に寝浸り、豕同然の彼奴と睦言……

お、もう何も言うてたもんな。 そなたの言葉は劍のやうに此耳を刺すわいの！ もう何も！

極重悪人、人非人、前の御夫に比ぶれば百分一にも足らぬ奴、王の中の下司役者、國を盗む巾着切、人目を掠め王冠をおのが懐中へくすねこんだ……

妃 ハム

あ、もう何も！  
檻樓仕立の乞食王……

亡靈現れる。

大空にまします神々、何卒我身を護らせたまへ！……如何な御用あつて尊靈には此處へ？

妃 ハム

かなしや、心が狂うたな！  
身不省にして氣を鈍らせ、徒らに月日を過し、嚴命あつた一大事を遷延さする腑甲斐なさを御譴責あらうとてか？ お、語らしませ。

亡靈

ゆめく忘るなよ。 こよひ姿を現



いたは汝が鈍つたる決心に研を加へうためぞ。さりながらあれを見よ、怖れ惑うてをる母が様を！ 孱弱者ほど一段と、我と我身を責め苦しむる。懇ろにいたはつて、問ひ慰めい、ハムレット。

ハム 如何なされたぞ、母上？

妃 まあ、そなたこそ如何爲やつた？ 物も無い虚空を見つめて、最前から只一人で、何事をお言つてぢや？ 眼をば狂人のやうに瞳り、髪の毛は一筋々々、番卒共が驚いて起つたがやうに、伏つてゐたのが皆逆立ち……これハムレットや、上すまい、心をしづめや、氣をおちつけや。 汝は何處を見てゐやる。

ハム

あゝ、あれを！ あれ、御覽ぜ、蒼ざめたあの顔附！ あのお相で此お怨み、たとひ非情の木石でも理由を聴いたら震ひ動かう。……あゝ、兒を見させらるゝな。 そのやうな惘然い舉動をなされますと、金鐵と誓うた心も鈍

妃

り、血を流す勇氣も萎えて、涙ばかりが落ちませうわい。 そりや誰れにお言る？

ハム

こなたには何も見えぬか？

妃

どこにも……何も見えぬわいの。

ハム

聲さへも聞かしやりませぬか？

妃

おいの、お互ひの聲の外は。

ハム

はて、それ、あれを！ 音もさせいで影のやうに！ あれ、御覽ぜ、父上が、ありしにかはらぬ装束にて！ それ、今そこへ行かせらるゝ、あれ、最  
早扉の外へ！

亡霊消える。

妃

それこそは心の迷ひぢや。 亂心したる折ふしには、ありもせぬ物の形を  
上手に心で作るもの。

ハム

なに亂心！ 兒の手の脈は、これ此通りに健全ぢや、こなたのと比べても  
 間拍子が少しも違はぬ。 最前から言うたこの、亂心狂氣で無い證據は、  
 さ、お試しあれ、一語もちがへずに言うて見せう、狂人ならば外へ逸れて、  
 繰返すとは出来ぬ筈ぢや。 これ母上、後世安樂を願はうとなら、おのが  
 邪念に媚びて、良心をば騙さしますな。 おのが罪ゆるとは心づかいで、只  
 だハムレットが亂心ゆるとのみ思はしますは、譬へば悪性の腫物が内攻し  
 て膿み爛れ、はや一命にもかゝはれど、上邊を包む薄膜に欺されて命を失  
 ふに能う似た愚さ。 天に對うて懺悔めされ、過去を悔み、きつと未來をば  
 慎ましやりませ。 雜草に肥料を與れて臭い匂ひをば募らしますな。：：  
 ： 恕せ、我淑徳よ、澆薄の世の習ひとて、淑徳却つて不徳の前に、語を卑う  
 し頭を下げて、許容を乞はねばならぬわい。やい。  
 おゝ、ハムレットや、そなたは妾の此胸をば眞二つに裂きやつたぞや。

妃

ハム

おゝ、其一片の悪い方をば抛棄て、残つた善い方で淨い餘生を送らし  
 ませ。 さらば御寢あれ。……叔父者の臥床へはお渡りあるなよ。 操はな  
 くとも、せめて有りげな體をなされ。 習慣といふ怪物は、悪いといふ事を  
 つい忘らする悪魔なれど、善い行爲にも四季施を着せて、おひくく身に  
 そぐはす。 今宵ほどをお忍びあれ、すれば次の夜はやゝ容易く、又其次は  
 一段容易い。 習は性をも變へる、悪魔めを壓へつくるか、まつた不思議の  
 力を以て、彼奴を放出してしまふは定ぢや。 さらば、改めて御寢あれ。  
 冥福を祈らせませ折ともならば、この身もお祝福をば乞ひませうす。……  
 此老人をば  
 とボローニヤスを見て  
 不便なことを致いたわい。 したが、これとても天の配劑、天は之を以て予  
 を懲らし、予をかりそめの道具として此奴等を罰せしめらるゝでがな。

死骸をばかたづけて、犯いた罪は身に負はうわい。さらば、お寝あれ。……  
(傍を向きて) 只もう爲を思ふゆるに酷いこともせにやならぬわ。血祭はす  
んだれど、まだ大事が残つてある。……母上、今一言。  
何事をせいとお言る?

妃  
ハム

はて、兒が言うたことなどは皆棄て、何なりともなされませい。又も青  
脹れ殿に誘はれて、聞の中の穢い戯れ、頬摺やら接吻やら、汚ららしい手で  
頸を抱きしめられ、いとしいの可愛いのと甘つたるい言葉に騙されて、何  
もかも皆打明け、兒の亂心とても實は計略の爲ちやとお言れ。はて、何事  
も明いてしまはしやつたがようござる。さうもある筈、稀有な淑女賢女、  
貞女でいもなくば、誰れが此一大事を隠し果せう? あの狒々に、あの蝦  
蟊に、何の隠し果せうぞい? いや、秘密も分別も要らぬ、寓言で名高い猿  
のやうに、尻背で籠を開けて鳥を逃し、試に籠へ這込んで、おのが首の骨を

妃

ハム

打折つたがようござりませう。  
氣づかひ爲やんな、言葉が息から出で、息は命から出るものなら、そなたが  
今宵お言つたことをば他言する息も命もおじやらぬわいの。  
兒は英吉利へ往かねばなりません。御ぞんじか?

妃  
ハム

お、それよ、げにそのやうに定つてある。  
既に圖書の御印も濟んで、幼友達ではあれど、蠅とも思ふ兩人の者が、使節  
の役を承り、予のために行手を拂ひ、まんまと道案内爲よう魂膽。勝手  
にせいぢや。おのが仕掛けた地雷火で打上げらるゝを見るも一興。先  
方で穿つ穴よりも三尺下を此方で掘り、月を目がけ彼奴等をば打上げなん  
だら奇怪であらうぞ。双方の目算が同じ道で撞着さば、それこそは面白  
い。……(といひつゝ、ホローニヤスの死骸を見て) 此男めが用をさせをる。隣室へ此  
食倒を牽いてゆかう。……母上、おさらば。……生きてをつた間は、口數の

多い阿呆であつたが、かうなつては沈毅嚴肅、てもよい顧問官ではあるぞ。さう、おぬしの始末をつけよう……お寝みなされませ。

とハムレットはポローニヤスを摺引りて一方へ、妃は他方へ別々に入る。

第四幕

第一場 城内の一室

王先に妃、ローゼンクランツ及びギルデンスタアン入来る。

王

其歎息は只事でない。仔細は何とちや？ 事情を語りめされ。和子は

妃

何處に？

かたぐには暫し此場を。

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

王

あゝ、もうし怖しい目を見ましたぞや！

妃

や、何と？ ハムレットが

王

何としたぞ？

妃

浪と暴風とが闘ふやうに、

王

狂ひ騒ぐ狂氣の餘り、物蔭

妃

に何者か揺くを見つけ、劍を抜いて走り寄り、鼠々！といふより早く、亂心

王

の見分もなう帳の蔭の老人を突殺いてのけました。



王

妃

王

おゝても忌々しき悪行！ 予若しそこに居合はせなば同じ目にも逢ひつ  
らうぞ。彼れを手放しおくは皆人の身の上ぢや、御身の上も我上も、何人  
の上も危し。さてもかゝる亂行をば何と國民に分疏かうぞ？ 齡ゆ  
かぬ狂人は、豫め取締り、人交らひなどさすまじきが君父たる者の務ぢや  
によつて、吾等が非難をば負はねばならぬ。悪い疾に罹つた者が、人の知  
るを厭うて療治の機を誤り、空しう一命を失ふにひとしく、愛に溺れて吾  
々もなすべきことをせなんだ報ぢや。して彼れは何處へ往んだぞ？  
死骸を取納めうとて何處へやら。何價値のない岩間にも黄金の脈が燦く  
やうに、狂氣ながら殺いたとをば、甚う後悔してをりまする。  
おゝ、ガアツルード、さゝ、奥へ！ 旭光が山の端に觸るゝとすぐさま、船し  
て彼れをば送り出さん。尙こよひの悪行は、我威勢と智慧とを以て、何と  
か巧みに言拵へ取繕はねばならぬわ。……やあゝ！ ギルデンスタア

ン

ローゼンクランツとギルデンスタアンと又入來る。

かたぐには尙餘人を呼集へい。ハムレット狂氣の餘りポローニヤスを  
殺害し、妃の居間より何處へか引行きたり。とう彼れを尋ねいだし、言葉  
静に和めこしらへ、ポローニヤスの死骸は拜堂に納めさせい。取急いで  
計らひくりやれ。

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

さゝ、ガアツルード、思慮ある輩を呼集へて、此珍事と共に我存をも語り  
聞かせん。世の讒謗は、譬へば石火矢の如く、こなたの端より彼方の端ま  
で轟き渡るが習ひなれども、かう先つて計らひおいたら、規は吾等が名を  
外いて、毒弾も空を撃たうぞ。さゝ、あなたへ！ 心が驚愕に搔亂さるゝ  
わ。

王と妃と入る。

第二場 城内の他の一室

ハムレット 入来る。

ハム まづこれでよしぢや。

ギル (奥にて) ハムレットさまー ハムレットの王子さまー

ハム や、あの聲は？ 呼ぶは誰れであらう？ おゝ、もう来たわ。

ロー センクランツとギルデンスターンと入来る。

ロー 死骸をば何となされましたぞり。

ハム 一所にしてしまつた親類の土や埃と。

ロー それは何處でござります？ 拜堂へ納めねばなりません、お教へなされませい。

ハム とさ思はぬがよい。

ロー 何とおほせられます？

ハム はて、足下らの内密ばかりを大事にして、おのがのは明放しぢやなど、思はぬがよいといふことぢや。まつた王子ともあらうものが、海綿に問はれうと、どう返答が成らうぞ？

ロー すりや小官を海綿ぢやとおほせられますか？

ハム 中々。王の恩寵やら、褒美やら、官位俸祿、何くれとお吸やるではないか？ したが、さうしたのが王に取つては上もない重寶、足下らを飼うておくのは恰ど猿猴が頤の隅に栗の實を貯へておくやうなものぢや、取つておいてやがて呑む。まつ其通り、足下らが吸溜めたものが入用となれば、



手間は要らぬ、一掃さうと擽るが最期、海綿はついまた乾枯びてしまふわ  
い。

ロ一 一向に解しかねまする。

ハム それで幸ひ。悪舌も抜けた耳にはぢや。

ロ一 もう、死骸は何處へおかくしなされました。是非共にお知らせあつて、  
吾々もろとも陛下の御前へ。

ハム しかばね？ かばねは王と共にあつても、王はかばねと共にはゐね。そ  
もく王の物たる……

ギル へ「物」とおつしやりまするは？

ハム はて、何でもないもの。案内爲やれ。そりや狐をかくいた、おつかけい。  
ハム レット先に皆々入る。

王 彼れを尋ねて死骸をば探し出だいて參れよと命じおいた。彼を手放しお  
くは如何にしても危し。さりとて辨別なき愚民らが甚う彼を愛しをれば、  
厳しい刑にも行ひがたい。總別無智の民は遠き思慮を以て是非を判する  
ことをなさず、唯目に見ゆる所のみにて粗忽の判断を下すが故に、犯人の  
罰重きときは、これを憫むに急にして犯せる罪の大いなるを忘る。事を  
滑かに治めうには、卒爾に海外へ出だしやるをも、多年の踟躕と見せねば  
ならぬ。危篤となつたる病には危険な療治もせねばならぬ、さなくば……

第三場 城内の他の一室

王侍臣を従へて入来る。

ローゼンクランツ 入来る。

如何ぢや！ 何としたぞ？

死骸は何方へおかくしありしか、何分にもお明しなされませぬ。

してハムレットは何處にをる？

彼方に。御意を伺ひまするまではと、附添を添へまして。

予が前へ伴ひ参れ。

なうく、ギルデンスタアン！ 王子を此方へ。

ハムレット 先に、ギルデンスタアン 入來る。

さて、ハムレット、ボローニヤスは何處にをる？

今夕食中ぢや。

なに、夕食中？ 何處でぢや？

いや、食うてをるのではなうて、食はれてをるのぢや。さる蛆蟲共が談合會を始めて、今恰ど宴會ぢや。や、蛆といふやつは、ほんに會席の王さま

ロ

王

ロ

王

ロ

王

ハム

王

ハム

ハム

王

ハム

王

ハム

王

ハム

王

ハム

ぢや。何故と被言れ、先づ我々人間がおのが食物にせうとて、ありとある動物を肥らする、そして澤山食べて肥る、さて其肥つた果が蛆蟲の餌食ぢや。すれば肥つた王も瘦さらばうた乞食も、蛆蟲の目からは唯もう種の違つた獻立、皿は二種でも食ふ口は一つ。さて、それが結局ぢや。はれやれ！

すれば王を食つた蟲を餌に魚を釣るまいものでもなし、又其蟲を食つた魚をば人が食ふまいものでもなし。

何のためにそのやうなことを被言るぞ？

はて、どんなことで王が乞食の腸を巡幸すまいものでもないといふことを知らせうためぢや。

ボローニヤスは何處にをるぞ？

天に。使を遣つて御覽せ。もし其使が能う逢はなんたらもう一ヶ所を

王 御自分でお尋ね。それでも今月中に見つからなんだら、表廣間へ行く道の階子あたりで、彼奴め、きつと匂ひをるであらう。

それ、表廣間のあたりを探して見よ。

ハム

汝等が往くまで逃げやせぬわい。

王

ハムレットよ、矛深く御事の身の上を案ずるによつて、此度の所行をば甚う歎はしう思ふぞよ。此上は是非もない、火急に海外へ遣さねばならぬ程に、出發の支度を爲やれよ。船も既に準備整ひ、風都合もよし、供奉の輩も今は唯英吉利行の沙汰あるを待つばかり。

ハム

すりや英吉利へ？

王

中々。

ハム

よろしい。

王

さういはいでは叶はぬ所ぢや、予が好志をお知りやらば。

ハム

それを見透しの天使が目に見ゆる。……さ、往なう、英吉利へ！……母上、

おさらばでござります。

王

ハムレットよ、此父にも。

ハム

母上にぢや。父と母とは夫婦ぢや、夫と婦とは同心一體、ぢやによつて母

上、おさらば！……さ、英吉利へ往なうぞ！

ハムレット 入る。

王

おぬしらは跡を尾ひ、すかいて速かに船に乗らせい。猶豫は無用ぢや、今宵のうちに申しやらうぞ。あちへく！ 手筈は萬事整うた、必ず共に急いでおくりやれ。……(獨自のやうに)いかに、英國王、足下若し我愛を重んずるならば……往しデンマークの劍窟がまだ生々と赤きがまゝにて、自ら降參を求めた程に予が威力を知るならば……よも予が命令を冷かには扱

ふまい。委細は書中に認め、すぐさまハムレットをば殺せとある予が嚴命を、必ず遂げよ英國王。彼奴はさながら邪熱の如くに、我血中に荒び狂ふ、それを治するは足下の任務ぢや。此事の遂げらるゝまでは、何ぼうにも我心樂みがたし。

王と共に皆々入る。

第四場 デンマーク國內の平野。

ノールウェーの王子フォオチンブラスを先に一人の旗頭一隊の兵卒を従へて進軍の體にて入來る。

フォオ いざ、旗頭、デンマーク王の御許に參つて、フォオチンブラス豫ての御契約

旗によつて御許の蒙り、御領内を進軍仕ると奏しまるれ。會合の地は心得てをらう。自然御用ともあらば、やがて參朝のせう程に、其儀をも申せ。畏つてござる。しづかに進め。

フォオチンブラス兵をひきゐて入る。

ハムレット先にローゼンクランツ、ギルデンスターン 其他の從者入來る。

ハム これは何方の御軍勢でござるの？

旗 ノールウェー國のぞござる。

ハム 何の爲にでござる な？

旗 ポーランドを攻めうためでござる。

ハム して御大將は？

旗 ノールウェー王の甥の殿、フォオチンブラスどのでござる。

ハム

征伐あるはポーランドの本國でござるか、或は其邊土でござるか？

旗

いや、實を申せば、有體の所名ばかりで何の益にも立たぬ小さい地面を略らうためでござる。唯の五兩を拂うて、餘り借りたうは無地面、私領地に賣りこかいたところで、ポーランドの手にも、ノールウエーの手にも、それ以上の金高は入りませうまいてや。

ハム

はて、然らばポーランド人は防ぎ戦はうとも致すまい。

旗

いや、既に成の兵を置いてござる。

ハム

二千人の命と二萬兩の金とは此藁屑の始末は着きますまい。是れぞ國富みて事無き餘りの膿瘍、外目には見えざれども、内より壞亂して命を奪る……忝うござつた。

旗

おさらばでござる。

旗頭兵をひきぬて入る。

ロー

お出かけ遊ばされませうや？

ハム

やがて追附かう程に、ちと先へお行きやれ。

ハムレットの他皆入る。

見る事聞く事が予を誑めて鈍つた宿志を勵ましをる！ 人間が何ぢや、若し食うたり寝たりの外に、何一つ一生の大事が無いなら？ 獸類に過ぎぬわい。必定、前をも見、後をも見る此大智見力を賦與せられたからには、此神のやうな智慧と力とを用ひさせもせいで、銷附かすは天意で無い。

本來予は獸のやうに忘れ易いか？ 又は餘りに思過し、遠く細かに思案するゆる、それゆる決斷がつかぬのか？……我想を四分したなら、智慧は唯一分ばかりで、残る三分は臆病根性……爲ねばならぬ理由もあり、意も力も手段までも備はりながら、口に「爲すべし」といふばかりで日を過すは何の爲ぢや？ 大地程に明白な先例が幾らも予を勵ましをる。あの軍勢を

見い、人数も費用も莫大なあの軍勢を、まだ嫩弱い貴公子が神々しい大望のあればこそ如是に引卒して、見えぬ行末を物とも思はず、有為無常の一身をば運や死や危険に曝いて卵の殻ほどの獲物を争ふ。大いなる故なくして動かんは偉人の振舞にあるまじいが、大義名分の繋る處には、唯一筋の藁屑の爲にも闘ふべきぞや。すれば子は如何ぢや？ 父を殺され、母を辱められ、理に於ても、情に於ても忍ぶべからざるを忍うでをるとは！ 眼前二萬の壯丁が、予に恥ぢよとばかり、幻影同然の譽の爲に、寢所に往くがやうに、おのが死場所に赴くではないか？ 戦ふ人数を容れかねる程の、戦死した兵卒を埋むる墓地にも足らぬ程の一小土のために！ おゝ、けふより後は、予また心を鬼とせうぞ、さなくば寸毫の價値も無いゆ。

ハムレット 入る。

第五場 エルシノーア。城内の一室。

妃先にホレーシオと一紳士役と入来る。

妃 逢ひますまい。

紳士 しきつて拜謁を願ひまする。全く心亂れし體、不便に存せられます。

妃 何を願ふのぢや。

紳士 とかく亡父の事を申しまする。此世には種々陰謀があるげな、と申しては咳拂を致し、胸を叩き、忌々しげに藁を蹴散らし、唯半分だけ意の通ずる曖昧な事を申しまする。申すところたはいなけれ、正體がわかりませぬだけに、聴く者に心あつて、めいゝの當推量あゝかかうかと補綴沙汰を致しまする。何さま、彼れが目ませや手眞似や小點頭を致いて曖昧に

申すを聴きますれば、どうやら容易ならぬ不祥な事がありげにも存ぜられ  
ます。

妃 呼入れてたも。(紳士役入る。妃傍を向いて)疵ある心には、些細の事さへも大  
凶事のきょうじ前觸かと驚かるゝ。愚かなは覺えある身の狐疑うしぎ顯るゝを憚る素  
振まひに罪の證あかしが現はるゝ。

以前の紳士役心狂ひたるオフィリヤをつれて入來る。

オフ デンマークのお妃さまは何處にぢや？

妃 どうぞいの、オフィリヤ？

オフ (歌ふ)

そちの殿御の其扮装は  
杖つゑに草鞋わらぢに一しほ目だつ  
笠かさにつけたる帆立貝はたてがひ。

妃 あゝ、オフィリヤ、其歌の意は？

オフ え、何といはします？ はて、まあ聴かしやりませ。

(歌ふ)今は此世になう方さまよ、

足あしにや墓石はかいし、頭上つむぎには

いつも緑みどりの八重やへもぐら。

おほう！

妃 いや、なう、オフィリヤ……

オフ まゝ、聴かしやりませい。

(歌ふ)雪ゆきと見るよな蠟ろうかたびらよ……

王わうクローティヤス入來る。

妃 あゝ、あれを御覽ごらんじませ。

オフ (歌ふ)花はなでつゝまれ涙なみだの雨あめに

濡れて墓所へしよぼくと。

王 オフィリヤよ、どうぢや、無事か？

オフ あい、おかたじけにござります！ 梟といふ鳥は麴麴屋の娘であつたとい

な。今日の事は分れど、明日は如何なることやら。御機嫌よういらせら

れませい。

亡父を思ふと見えた。

王 どうぞな、もう何もいいいで。したが、もし何の事ぢやと問ふ人があつた

ら、ま、斯ういはしやりませ。

(歌ふ)あすは十四日ヴレンチンさまよ

門へ行こぞや、引明方に、

ぬしのお方にならずもの。

それと見るより門の戸あけて、

ついで手を取り引入れられたりや

純潔の處女ぢや戻られぬ。

王 てもいぢらしいオフィリヤ！

オフ え、實！ 誓文なしに、つゝともう歌うてのけよ。

(歌ふ)ほんに思へば、思へばほんに、

なんぼ殿御の習ひぢやとても

それはあんまりどうよくな。

男がいふには

おれも誓文その氣でゐたが、

一夜寢て見て氣が變はつた。

王 このやうに成つて久しいか？

オフ 何事もやがておめでたうなりましよ。

人は辛抱が肝腎ぢや。 というて



泣かいではをられぬ、冷い處に臥かされてござると思へば。今に兄者が知らしやらう。御深もじの御意見、かたじけなうござります。……さあさあ妾の馬車を！……さやうなら、どなたも。さやうなら、あなたも。さやうなら……。

オフィリヤ 入る。

彼れが後を追ひ、萬事氣をつけておくりやれ……

ホレーシオ 入る。

お、これこそは深き哀傷の弊毒、畢竟父を亡うたのが源ぢや。お、ガアツルード、ガアツルード、總別禍厄は、敵方の牒者の如く、一個では來らいで大擧して寄するが常！　ボローニヤスが非業の最期、自ら招いた科とはいへ、和子が海外への流寓、予思慮足らずして窃に死骸を埋めしたため、愚民らが邪推の騷擾、オフィリヤが我歟の歎き、非情にひとしき狂氣の體と

りわけて心懸りは彼れが兄なるレーヤアチーズ、ひそかに佛蘭西より歸り來り、道路の蜚語に動されて深くも手を疑ふ様子。お、ガアツルードよ、それやこれやに我胸は、石火矢の霰彈に撲たる、思ひぢや。

騒がしき物音聞ゆる。

あら、あの騒ぎは？

スキツルの力士は何處にある？　彼等に戸口を固めさせい……

一人の廷臣入來る。

何事ぢや？

急ぎ此場を落ちさせられませ。大津浪の寄せたる如く、暴徒をひきゐてレーヤアチーズが、宮中へ亂入いたし、官人らを撃靡かし、唯今にも此處へ。暴徒は彼れを王と呼び、世界が新にはじまり、儀典も習慣も忘れられ、彼奴等ばかりが掟とも柱ともなつたがやうに、レーヤアチーズ殿を王とするぞ、

我々共が推擧するぞ」と帽を投上げ、手を打叩き、「レーヤアチーズを王とする、レーヤアチーズは國王ぢや」と雷のやうに罵ります。

行くべき獸逕へは追うてもゆかいで、何を誇らしげに吠ゆることぞ！ お

ゝ、あらぬ途惑ひをする愚かなデンマーク 獵犬ども！

奥にて凄じき物音。

王 や、戸を破つたわ。

レーヤアチーズ 甲冑姿にて剣を提げて入来る。デンマークの暴民 後よりつゞく。

レー 王は何處にをる？…かたゞは暫時それに控へてござれ。

暴徒 いや、我らも入ります。

レー 何卒、先づ吾等にお任せ下され。

暴徒 心得てござる〜。

暴徒等は戸外へ退き去る。

レー かたじけない。戸口を守りめされ。…おゝ、おのれ、非道の王。さ、父

を渡せ。

妃 ま、落着きや、レーヤアチーズ。

レー やあ、此期に及び落着く血が、只の一滴だにあるならば、此レーヤアチーズが身體は、我父の形見でなうて、奸夫の胤なりと清淨潔白の母の額に淫婦の烙印を打つも同然。

王 何としたぞ、レーヤアチーズ？ かく巨人の荒れたるやうにも叛逆の企つ

るはり？ 棄置きめされ、ガアツルド。我身をば氣遣ひたまふな。國王

の身邊には神々しい牆壁あつて、逆賊の窺ふとも、只垣間見るのみで志は

能遂げぬ。…レーヤアチーズよ、なにとて斯様に哮り狂ふぞ。…ガアツ

ルド、棄置きめされ。…話れ、どうぢや？

レ

我父は何處にをる?

王

此世にはをらぬ。

妃

さりとして王の咎ではなし。

王

はて、存分に言はせたがよい。

レ

如何にして世を去つたぞ? いつかな欺さるゝことではないぞよ。君臣

の盟約もけふを限りに地獄へ棄てた! 悪魔に與れた! 良心も信仰も

あつたものかえ! 後世も無ければ現世も無いぞ。さあ、此上は地獄の

最底へ墮うとまゝ、存分怨を晴さにやならぬわ。

王

何とせばおぬしを抑へ止むべきぞ?

レ

予の意が諾と言はねば、世界中の力を以てもいつかな抑へることは出来ぬ。

我力に限りはあつても、其限りある力を、見事十二分に使うて見せうぞ。

王

レーヤアチーズよ、父御の横死の顛末を審明にせうとお望みやるが、いざ

復讐となつては、敵身方の辨別なく、善悪一攫に討たんぞ心か?

いゝや、目ざすは父者の敵ばかりぢや。

すれば敵が知りたいか?

父の良友に對しては、まづ此様に兩腕を開いて、子の爲に命を惜まぬべり

カン鳥も同様に、我血を絞つても饗應さうわ。

はて、それでこそ孝子らしくもあり、名士らしくもあるわい。父御の横死

については、予に曲事無きは勿論、深うも痛みをる所たるは、いさゝか分別

のお爲やらば、日を見るがやうに解ることぢや。

(奥にて) 入らせい。

何ぢや! あの騒ぎは?

オフィリヤ前よりも一段取亂したる狂氣の體にていろく  
の草花を頭や襟に着けて入來る。

お、熱よ、我腦漿を乾し盡せ！ 八しほに苦き此涙に、物見る力も爛れは  
 てい！ やい、妹、そちが狂氣の此怨は、此兄が天に誓ひ、量に掛けたら秤  
 皿の顛覆るまで報うてやるぞよ。 彌生の春の花薔薇！ いとをしの妹、  
 なつかしの處女、可憐のオフィリヤよ！……でも、情ない！ うら若い處女  
 心も、老人の命同様、かう脆う死ぬるかいやい？ 性は愛慕によつて妙に  
 もなるとか、其妙なる魂が、戀慕ふ影の後を追うて、歸らぬ處へあこがれた  
 か？

オフ (歌ふ)

顔もかくさいで柩車に載せて、

へイノンノンネー、へイノンネー。

墓にや降ります涙の雨が……

おさらばでござります！

レ

正氣で敵を取つてくれいと、せがんだとても此様には、予の心を動すまい  
 わい。

オフ

かう歌はにやならぬわいな。

(歌ふ) ダウン、ナ、ダウン、もしか

ダウンと呼ばしやらば。

お、何とまあよう似合うたぞ！

そのなあ娘を盗んだ不義者は其

家の手代ちやげな。

レ

たはいの無いのが、意あるより百  
 倍ちやわい。

オフ

さあこゝに迷迭香がある。 萬年  
 も替らぬ證の記念ちや。 これは



お前へ。いつまでも忘れいでや。それからこれが蝴蝶草ちや、物を思へといふぞや。

レ

狂氣の中にも訓がある。忘れいで物を思へとは有理。

オ

さあ、(王に對ひ) 御前には茴香の花と小田巻草。(妃に對ひ) お前には返らぬ昔を悔み草ちや、妾も一つ取つておこ。これをば安息日の惠の草ともいふぞや。お、着け方は更へてちや。それからこれが雛菊。お前には、葦をば與したう思つたれど、父者がお死にやつたら悉皆萎れてしまふた。めでたい往生ちやと言つてちや。……(歌ふ)

戀し、懐しローピンさまよ。……

レ

憂も苦痛も艱難も、焦熱地獄の苛責までも、なつかしう物しをるわい。

オ

(歌ふ) 歸らしやんせぬかいな？  
歸らしやんせぬかいな？

何の歸らしやろ、お死にやつたれば、

おのが命の際まで待と。

お髯は雪の白々と、

頭は麻の亂れ髪。

またと逢はれぬ身の悲しさよ。

あの世を救うてたびたまへ！

皆さまの後世をも祈りますぞや。……恙なういらせられませい！

オファイリヤ入る。

レ

あれを御覽せ。ても情ない！

王

レーヤアチーズよ、其哀傷を吾等に分ちやれ、さらすば好意を無にする道理ちや。此上は汝の心に適うたる思慮ある輩を呼集へ、是非曲直を判せ

しめい。假初にも彼等子に罪ありと申さば、此國も、此冠も、此命も、ありとある我財寶をも償として汝に與せう。さりながら、若し罪無しと定まらば、心を鎮めて予が言ふことをお聴きやれ、さすれば汝に力を協せてきつと望をば遂げさせう。

レー  
む、さやう仕らう。我父が非業の最期、あさましい埋葬式、遺骨を飾る記念もなく、劍、紋章も懸けられず、何一つ表立つて儀式とても施さぬ其あさましい葬式が、天から奈落へ達く程に怨憤の聲を揚ぐるからは、罪を糺さ

王  
はて、さやう致すがよい。罪科のある處に報罰の斧を下しやれ。いざまづ諸共に奥へおじやれ。

王と共にレーヤアチズ入る。

第六場 城内の他の一室

ホレーシオと一侍者と入來る。

ホレ  
予にあひたいといふは誰れぢや？

侍者  
舟子どもでござります。書面を持參したと申します。

ホレ  
通さしめ……

侍者入る。

世界の何處からも消息のありさうな當もない、ハムレット様からでなくば、

舟子ども入來る。

一舟  
御息災であらせられませい！

ホレ  
おぬしたちもなう。

一舟 ありがたうござります。お前がホレーシオさまのやうに承りましたが、それならこれがお前へのお手紙でござります。……英吉利へ往かしました筈のお使者からでござります。

ホレ (讀む)

ホレーシオ足下、此書を披見せられたらば、此輩をして王に謁するの機を得しめよ。王に献るべき書を携へたり。海に出で、未だ三日ならざるに、我船は慄慄なる海賊に襲はれたり。船足遅うして逃ぐるに術なく、止むを得ず勇を鼓して接戦し、予は賊船に乗り移りぬ。此時双方の船相隔たりしかば、予は賊の虜となんぬ。賊の予を遇するや寛厚なりき、思ふに予によりて後に利する所あらんとするか。王に予が書を献じおきて、足下は命を賭し中を飛んで忽々に我許に來れ。語らば足下をして啞とならしむべき許多の奇聞あれど、語は到底意を

盡すに足らず。此輩をして案内せしめらるべし。ローゼン克蘭ツとギルデンスタアンとは英國へ赴けり。彼等につきても語るべきことあり。草々。

足下の莫逆ハムレット。

さ、持參の書面を陛下へ參らする手續をせう。早うそれを果いて、予をば先方へ案内しておくりやれ。共に入る。

第七場 城内の他の一室

王とレーヤアチーズと入來る。

王

父御を殺いた者が予をも殺さうと企てた仔細が斯く明白となつた上は、もはや予を疑ふ心は釋けて、無二の信友とも予を思やるが當然ぢやぞよ。

レ

げに有理とも存せらるゝ。さりながら斯様な曲事をば、斯様な容易ならぬ罪惡をば、何とて打棄てゝはおかれましてぞ？ 安危を思しめす賢慮のござらば、打棄てゝはおかれぬ筈。

王

おゝ、それにこそは二條の仔細がある。おぬしにはさまで肝要とも見えまいが、予に取つては緊い事ぢや。先づ彼れが母たる妃は、彼れが面を見ねば殆ど能う生きてはゐぬ。また予に取つては、徳か不徳かは知らず、妃は我命の綱ぢや。星の星座を能う離れぬが如く、予また妃を離れては、恐らくは存へがたい。次に、表立つて罪を問ひにくい第二の仔細は、彼れに對する愚民等が愛着ぢや。彼等が最負目の浸すときは、化石泉の木を石に化するがやうに、如何な罪をも美德と化する。されば生中に彼れを

レ

罰せうと覘ふ矢は、世論の逆風に吹飛ばされ、弓を持つ手に跳戻るわさ。すりやそれが爲に、むざ／＼大切な父を失ひ、剩へ妹まで狂人にしてのけたか！ 遡つても褒めらるゝものならば、何一つ足はぬことの無い今古に匹儔稀な女をば！ 見よ、此怨を報うてくれうぞ。

王

其儀ならば心安かれ。口髭に火のつく危さを興がる程の虚氣者と吾等をば思ふまい。やがて改めて語らう。予父御をもいとしう思へば、もとより我身をもいとしう思ふ、すればおのづから……

書面を携へて使者役の者入來る。

使者

何事ぢや？

王

ハムレットさまよりの御書にござります。これなるは御前へ、これなるはハムレットよりとや？ 何者が持參したぞ？



使者

舟子體の者の由に申します。小官は逢ひませず、クローディオの手より受取りましたが、彼れは持參の當人より入手の由に申します。

レーヤアチーズ、お聴きやらう。……退れ。

使者入る。

(讀む) 恭しく闕下に啓し奉る、それがし赤裸々にして罷歸りて候ふ。謹み

て乞ふらくは、夜明けて龍眼に咫尺し奉らんことを。若し卑願をし

も許させられなば、其折此卒爾なる歸朝の更に奇異なる顛末をも上奏

し奉らんと欲す。畏みて白す。 ハムレット。

これはまた如何したことぢや? 餘の者も皆歸りをつたか? 或は根も

無き譎詐か?

書風にお見覺はござりませぬか?

王  
レー  
ハムレットの手蹟ぢや。「赤裸々にして」……返し書にも「單身」とある。

レー  
おぬしの意見は?

一向に合點が参りませぬ。しかし歸朝は望む所。さう聞いては萎へたる勇氣も百倍いたす、王子に面と打對つて「覺えがあらう」と糺し申さん。

王  
レー  
ヤアチーズよ、若し歸國したが定ならば……如何にして歸國したか? せぬとは思はれぬが……若し定ならば、予が意に従やるか、如何ぢや?

レー  
從ひませう、武士の名折となりませずば。

王  
名を立てさせうと思へばこそぢや。彼れ氣まぐれにも中返りして、又と渡航せぬ心ならば、予彼れを説き勸めて豫て計畫置いたる一事を試みさせうに、彼れ之が爲に落命せやは。しかるも一言の惡評無く、現在の母妃までも、謀計とは心附かいで、不慮の變事と思ふであらう。

レー  
さすれば御意に従ひ申さう。自然小官を事に當らせて下されうならば、一段でござる。

王

思ふ壺ぢや。おぬしは豫て外遊以來、屢噂の種となつた、しかもハムレットの面前にて、とりわけ足下が堪能ぢやといふ其一藝について折々の取沙汰。おぬしの才藝一切よりもハムレットは只それをこそ嫉ましよう思うた様子、予が見る所では、それは數ならぬものとも見えたが。

レ

と仰せらるゝ其藝は？

王

いは、若人の帽子に着くる飾紐なれども、無うて叶はぬものぢや。老後となれば養生と品格とを第一とした薫んだ服装が似合ふやうに、若い者は端手な濶達な衣裳が似合ふ。今よりは二月前、さるノオマンの武士が参つた。……佛人の馬術に長じたることは予は親しく戰場にて彼等と闘つて存じをるが、件の武士に至つては殆ど一種の神通力。鞍壺に生着き、神變不思議に乗廻し、さながら駿馬と合體して人獸性を分けたがやう。何ぼう想像を逞うしても、所詮其實には及ばなんだわやい。

レ

ノオマン人でござりましたか？

王

ノオマン人ぢや。

レ

一定、ラモンドでござりませう。

王

正にそれぢや。

レ

あの男ならば、よう存じをりまする。彼れこそは彼の國人どもの國の盛飾にござりませう。

王

其男が兜を脱いで、おぬしが手練の噂をしたわい。護身術の鍛錬といふが中にも、とりわけ細刃の扱ひにかけては、かりそめにも敵手となる者があらば観物ぢや、いや、佛蘭西の劍客などは足下の向うへ廻つては、進退も攻防も着眼も何もあつたものでないとまでに圖なう賞めたわい。此物語がハムレットに甚う嫉妬心を起させ、おぬしが不意に歸朝のして試合を致すやうの事あれかし、と切に希願ふに及んだのぢや。さて之を縁とし

て……

レ

それを縁と致いて?

王

レーヤアチーズ、父御は眞實なつかしいか?

但しは涙は人前だけで、心

と肚とは別々か?

レ

何故にさやうなことをば?

王

父御を愛する孝心が足下に無かつたとは存せねども、總じて愛は時によつ

て始められ、又時の爲に火勢を更む。是れ我他の親しく見聞する所ぢや。

燃ゆる愛の焔の裡にやがては燃えさいて暗うなる燈心のやうなものが出

来る。凡そ物として長へに善なるは無い、何となれば善も過ぐるときは、

爲に滅ぶ。爲うと思ふ事は爲うと思つた時に爲すべきぢや、さなくば

此「思ふ事」がいろくゝに變化し、舌の數手の數事の數の世にある限り遷

り變る。さある時は、所謂「爲すべきぢや」も放蕩者の溜息同様、生中一時

レ

王

の心安め、所詮は其身の害ともなる。それはともあれ、肝腎なはハムレッ

トが歸國の一條、おぬし若し孝子たるの本分を言葉の外に證せんとせば果

して如何な事を爲さんすぢや?

教會堂の眞中央にて王子が喉を掻切り申さん。

何さま、如何やうの靈場とても、殺人の大罪をば能う庇ふまいぢやまで。

復讐に界は無い。したがレーヤアチーズよ、もしさる決心のあらば、當分

の間門外へは立出めさるな。ハムレットの歸りなば、おことが歸朝の由告

知らせ、まつた人をして足下が武藝を賞立てさせ、彼の佛人が言ひおいた

る評判の上塗なし、とかくして彼れを煽り、究竟は双方に賭物して、試合を

ばさすこととせう。計略などば嘗つて知らぬ眞正直の粗忽者、劍を檢

むることなどもすまじければ、おこと聊かの詐僞を以て、鋒圓めぬ劍を擇

び、計略の一突にて父御の怨を晴らすは容易し。

レ

御意の通りに仕りませう。まつたそのために剣に塗るべきものこそござれ。小官嘗てさる野師より購ひ置いたる油薬一たび尖鋒に之を塗れば、聊か微傷を負うたる者だに、必ずや命を落とす。月の下にありとある靈草を以て調製せる名膏の力でも救ひがたし。小官其毒をば劍尖に塗り申さう、さすれば、微傷を負はいたるばかりにても、彼れを殺さんこと必定でござる。

王

尙此上にも案を凝いて、我目算に叶ふやうに、時機や方法の便宜を查べう。萬一にも手筈を誤り、それがため事露見に及ぶべくんば、初めより爲さぬに如かず。されば此企には、よし先なるが破るゝとも立代つて望を遂ぐる後詰の工夫が無うては叶はぬ。……むゝ！ まで、暫時！……先づ表立つて双方の手練に賭物をなし……う、思ひついた。……一上一下の其間に體熱し口渴くは必定なれば、……もつとも然あるやう、故と激しう物しや

妃

つたがよいぞ。……すなはち彼れが何か飲料を求めう折の爲に、予は酒盃を準備しおかん、それを只一嘗せば、よし毒刃をばまぬがるとも、此方の規は外れぬ。やゝ、あの物音は？……

妃あはたゞしく入来る。

レ

踵を接ふる不幸と不幸。……レーヤアチーズよ其方の妹は溺れて死にやつた。なに、溺れて！ おゝ、何處で？ 斜に生ふる青柳が、白い葉裏をば河水の鏡に映す岸近う、雛菊、いらぐさ、毛茛……襲なる農夫は汚はしい名で呼べど、清浄な處女らは死人の指と呼うでをる……芝蘭の花で製へた花鬘をば手に持つて、狂ひあこがれ



つゝおじやつたげなが、それを掛けうとて柳の枝に、攀づれば枝の無情うも、折れて其身は花もろともに、ひろがる裳裾にさゝへられ、暫時はたゞよふ水の面。最後の苦痛をも知らぬげに、人魚とやらか、水鳥か、歌ふ小唄の幾くさり、そのうちに水が浸み、衣も重り身も重つて、歌聲もろとも沈みやつたといの。

レ

あら悲しや、妹は溺れ死んだか？

妃

おいなう、おいなう！

レ

これ、妹、水はたんとお飲みやつらうによつて、兄は涙は流さぬぞよ。というても癖ぢや、涙めが出をるわ。笑は、笑へ、癖には勝てぬ。これが果てたら、女根性も出てうせう。……おさらばでござる。……烈火と燃立つ言分はあつても、此鈍なものに消されてしまふわ。

レイヤアチーズ泣きながら入る。

王

いで彼れが後を尾はう。彼れが怒を鎮むるため夥しう骨を折つたわ！  
此事が原となつて再發すまいものでもない。いで尾いて行かう、

王と妃と入る。

第五幕

第一場 墓場。

甲乙二人の道外役、鍬、鶴嘴等を携へて入来る。

甲

すれば、自業自棄で死をつた其女子を本式通りに葬るといふかり！

乙

其通りぢや。ぢやによつて、早う墓を掘つてくれさしめ。お役人衆が檢

分して本式にしても可いといはしつた。

甲

我身を庇うて身を投げたのでもないに、本式といふことがあるかいやい？

乙

でも、それがお役人さあの言渡ぢやわいの。

甲

いや、本葬式にせうには、どうあつても自身暴擧でなうてはならんわ。

乙

先づ眼目が如是ぢや。予が自身も合點で身を投げるわ、えいか、それは所

行といふもんぢや。所行には三つ小分があるわ、第一を行ふこと言うて、

第二を爲るこというて、第三を成すこと言ふわ。かるが故にぢや、あの女

子、は、結句自身合點の上で身投げたものとせにやならんわ。

乙

まあさ、小父さあ、そりやもう然もあるけれどな……

甲

ま、またしめ。此許に水がある、えいか、此許に人が居るわ、えいか。も

乙

それがお上の御法かいの？

甲

さればいやい、これが検屍方の御定法といふもんぢや。

乙

寧ろ眞實の事を言はうかいの？ 身分の良い衆であればこそぢや、地下の

女子なら、これが何で本葬式になろぞい。

甲

出来た！ それよく。身分の高い衆ほど、平の信者に比べて、首縊るに

乙

も身投げるにも便宜の多いのが笑止ぢや。……どりや、仕事にかゝるかい。

甲

誰れの家柄が古い言うて 庭師と溝掘と墓掘ほど古いお武家はありやせん

しか此人が此水へ自身で往て身を投げたならば、好かうとも好くまいとも、  
そりや自身で往たのぢや。が、えいか、こゝが肝腎ぢやぞや。もしか其  
水が彼方から此方へ来て、其人を溺れたならば、こりや入水ではないわ。  
かるが故にぢや、我と我身を命を縮めぬ分には、自殺といふことにやなり  
やせぬわい。

わい。 アダムさあのお職掌を其儘に繼いでゐるのぢや。

乙 アダム様はお武家様でござらしたかいの？

甲 はあて、最初に御定紋(道具)を付けさつした人ぢや。

乙 アダム様には定紋はありやせぬがや。

甲 や、おどれは邪宗門か？ お聖書の中に「アダムが掘らした」とあるわさ。

乙 道具(お定紋)が無うて掘れるかいやい？ 序に今一つ問うておまそ、おのし

此返答が出来んやうなら、まつすぐに白状して……

乙 まああさ！

甲 石工より、大工より、船大工より、もそつと堅固なものを作るのは誰れぢや

乙 絞罪臺を作る人ぢやろ、主が千人と交代つても破壊りやせぬがな。

甲 こりや中々旨いことを言ふわい。 絞罪臺は可い。 可いは可いが、何の爲

に可い？ 悪い事をしをる奴を懲らしめる爲には可いが、教會堂よりも堅

固ぢやなんぞいふは、甚悪い事ぢやによつて、絞罪臺は結句おのしのやう

な奴に可い。 さあ、修正ぢや。

乙 「石工より、大工より、船大工より、もそつと堅固なものを作るのは誰れぢや」

つてかや？

甲 さうぢや。 早う解いて荷い下せ。

乙 や、解せたわ。

甲 何と？

乙 はれ、解せぬわいの。

遠く向うへハムレットとホレーシオと入來る。

もう鈍腦を撲たぬが可い。 阿呆馬は何ぼ叩いても驅出しやせぬわい。

此度此謎を掛けられたら、墓掘男ぢやと言はしめ。 はて墓掘男が作る家

は、大審判の日までも繼續くわさ。 やい、早うヨーハンの許へ往て、酒を一壺取つて来いやい。

乙の道外役入る。 甲は墓を掘りながら小歌を歌ふ。

おらも若い時や色戀もしたが、

色は浮世のなぐさみなれど、

時が約れば、オ、此身の、ア、爲かよ、

今ちやそれもこれもあほらしい。

ハム 彼奴はおのが爲る事をば何事とも辨へをらぬか、墓を掘りながら歌ふと

ホレ 慣れて平氣になつたのでござりませう。

ハム まつたくさうぢや。 使ふことの少ない手は細かいことにも感ずるわい。

甲 (歌ふ)

いつの間にやら年波や寄せて、

おらが首玉しつかと掴む。

果は島根に抛げあげられて、

變り果てたよ如是ものに。

と歌ひつゝ、頭蓋骨を抛上げる。

ハム あの髑髏にも舌があつて、曾ては唄なども能い歌うたであらうものを、元

祖の殺人者カインが頤骨で、もあるやうに、彼奴めが叩きつけをる。 今

こそは、如是匹夫に翻弄せらるれ、或は昔は、神の目をもくらまいた策士の

頭かも知れぬわい、なうホレーシオ。

甲また骨を抛上げる。

ホレ かも知れませぬ。

ハム 或はまた殿上人などの頭で、や、これはお早うおはす、某殿！ いかになら



せらるゝ?」なぞというたかも知れぬ。或は此頭が、後で與いといはう爲ばかりに、甲某殿の馬を激賞てた乙某殿であつたかも知れぬまでい、なうホレーシオ。

ホレ 御意にござりまする。

ハム はて、正にさうぢや。しかるに今は只蛆蟲の典侍の所有。願も無うなつ

て寺僕の鍬の刃で脳天を打叩かるゝ。ても幽妙な有爲轉變、吾々人間の

目にこそ見えざれ。あゝ、これらの骨どもは斯く抛棒戯に使はるゝ爲に

のみ養成てられたか? 考へると胸が痛うなるわい。

甲

(歌ふ)

鍬に鶴嘴、鶴嘴に鍬に、

附けて添へたが蠟帷子よ。

土の住居を造らうために、

ハム

如はお客にやそれ相應の。

と又一つ 獨體を抛上げる。

又一つ。此頭がさる代言人の獨體であるまいものでない。あゝ、彼れ

が得意の推脱や詭辯や裁判例や所有權や騙詐は如何なつたか? 何故此

様な農夫に泥まぶれの鐘で脳天を打叩かれながら黙つてをるか? 何故

毆打の訴訟を起すぞといはぬか? ふむ! 或は此男存生中には澤山

田畑を買取り、スタチュートとか、リコグニザンスとか、乃至終結讓與、二重

證人返納讓與など持つて廻つた奴でもあらうに、あゝ、かく無慚にも土

を盛られて、頭蓋骨を抛出さるゝが、其所謂終結讓與の終結であるか、返納

讓與の返報か? 所謂證人も最早彼れの買收權に關して何等有利の證言

もしてはくれぬか、二重證人があつても只一葉の契符だけの役にも立たぬ

か? 此函の中には地所讓渡の證文さへもあるまい。え、讓受けた當人

さへも如是る有様とならねばならぬか？

御意の通りにござります。

ハム 證文用紙は羊の皮で製るかなう？

ホレ 中々、犢の皮でも製します。

ハム さやうな品を當にするは犢や羊の行爲ぢやわい。……彼奴と問答して見う。

……(甲に對ひ)其幕は誰人のぢや？

甲 予のでござります。……(歌ふ)

土の住居を造らうために、

如はお客にやそれ相應の。

ハム いかさま、汝のでもあらうわい、其穴に入つてをるからなう。

甲 これはお前様ではおりない、今餘所から入つてござらしたばかりぢやによつて。予は此穴へ這入つてはをりやせんが、こりや予のでござります。

ハム

其穴に入つてゐて、汝のぢやといふは解えぬわい、死人が物を言はうか？  
何と、解えたか？

甲

聞えたかと問はつしやるのは聞えたが、解えぬと言はつしやるのは解えぬ。  
それ、また御手許へ御返禮ぢや。

ハム

汝や何者の爲に墓を掘るのぢや？  
物の爲ではおりにない。

甲

はて、何處の人の爲にと聞くのぢや。  
人の爲にでもおりにない。

ハム

すれば何を葬るのぢや？

甲

生きとる中は女の人ぢやつたが、なんまみだぶ、死ねてしまひましたかな。  
此奴め、七むづかしい奴ぢや！ 辭令表でも見比べて物を言はぬと、忽ち  
舉足を取らるゝわい。 誓文、ホレーシオ、此三年以來心附いたことぢやが、

時勢がおひく／＼尖つて来て 今いまは農夫の爪先が 殿上人の踵かかとに達とどき、凍傷しもやけを  
摩こするほどぢや。……(甲に對ひ)汝おれやいつごろから墓掘男はかほりにはなつたぞ?

甲 一年三百六十日の中で、予われが此仕事このしごとにかゝつたは、先のハムレット王様わうさまがフオ  
オチンプラスに勝かたしやりました日ひでござります。

ハム してそれは最早何年なんねんになるぞ?

甲 それをお前様まへさま知らしやらぬかいの? どのやうな痴人あほうでも知つてをるが  
や。若わかハムレット様さまが生れさつした日ひぢや、それ、氣きの狂ちがうて此間英吉  
利すへ遣やられさつしたハムレット様さまの。

ハム うん、さうか? 何なんでまた英吉利いんぎりへは遣やられたのぢや?

甲 はて、氣きの狂ちがつたによつて。彼國あそこにゐめされば、定ぢやう、正氣しやうきに復もとらつしやら  
うす。復もとらつしやらぬて、關かまふことはおりにない。

ハム なせぢや?

甲 彼國あそこならば目立めだつまいがな、傍わたりが皆狂人みなきちがひぢやによつて。

ハム ハムレットどのは何なんとして氣きが狂くるうたのぢや?

甲 それが苛えらう不思議ふしぎぢやて言いひますわい。

ハム どう不思議ふしぎぢや?

甲 ほんの事ことぢや、正氣しやうきをなうしてしまはしつたといの。

ハム いやさ、其因由そのよしとは何なんぢや?

甲 はて、本來もとは王子様わうじさまぢやがな、此このデンマーク國こくの。予われこゝに三十年ねんをりま  
すぢや、小兒わがきの時分じぶんから。

ハム 人は地ちに入はいつて腐くさるまでに何年なんねん経たるぞ?

甲 さいの、前ぜんから腐くさつてさへをらねば……近時このせつは瘡毒かさかきの死骸しがいが澤山いかに來きまする、  
其奴そのやつあ逆さかも耐たたんが……腐くさつてさへをらねば、八九年ねんは耐たちましょかい。  
柔革屋なわがはは九年ねんは耐たちましょ。

ハム

何故に柔革屋は久しう耐つか?

甲

はあて、お前様、商賣柄で皮が柔い  
てあるによつて、大分の間水を弾き  
ます。がい死骸を腐らせるの  
は、先づ水でござります。……これ、  
此獨體は、二十三年も土の中に入  
つてをりますのちや。

ハム

それは誰れのちや?

甲

ろくでなしの氣狂和郎のでござり  
ます。たれのちやと思はしやります  
す?

ハム

いや、知らぬわ。



甲

氣狂和郎め、時疫にでも罹りをれやい!  
此奴は昔時子の頭へ葡萄酒を一  
壺浴びせをりました。はて、此骸骨はヨリツクの獨體でござります、王様  
の侏儒でござりましたわい。

ハム

え、これが?

甲

中々。

ハム

見せい。(獨體を手に取りて)……はれ、惘然なヨリツク!……ホレーシオ、予は  
此者をば存じをつたが、戯謔にかけては眞に窮極る所を知らぬ、いや、拔群  
な奇想に長じた奴。予をば幾千度も脊に負うて歩いたものちや。それ  
を今にして想ひ起すと、厭らしうも怖しうもあるわい! え、胸が悪く  
なる! 此邊に唇があつたのちや、それに幾たび接吻をしたか知れぬ。……  
……こりや、汝の惡まれ口は如何したぞ?  
道外踊は? 歌は? 満座を笑  
齒を露出した此顔を誰一人相手

にするものも無いか？ 笑ふことさへも出来ぬか？ こりや、今、姫達の部屋へ參つて、如何な厚化粧を施しても、假令一寸程厚うても、所詮は如是顔にならねばならぬと言つて笑はせて來たがよい。……ホレーシオ、聞きたいことがある。

ホレ 何事でござりまする？

ハム アレキサンダアも地中に入つては、やはり此様に見えたであらうかの？

ホレ でござりませう。

ハム そしてまた如是臭氣が？ ベツ／＼！

と 罫を 下に おく。

ホレ さやうにござりませう。

ハム 死んだ後には如何なあさましい用に使はれうも知れぬなう！ 想像で辿つて見れば、アレキサンダア大王の遺骨とても、塵や土と化した末には、酒

樽の穴塞なぞに用ひられまいものでもない。

ホレ さうお考になりまするは、御穿鑿過にござりませう。

ハム いや、そつとも。穩當に考へて然ぢや、有るらしいことぢや。先づ斯う

ぢや、アレキサンダアが死ぬ、埋葬する、塵埃と化する、塵埃といふは土ぢや、土から粘土が出来、そこで其アレキサンダアの化成たるに外ならぬ粘土を以て麥酒樽の栓とすることもありげではないか？

萬乗の該撒も粘土と化しては、

徒らに風前の罅隙をや塞がらん。

あはれ／＼、嘗て世を震撼せし士、

今は只嚴冬に破壁をつゝる！

や、しづかに！ 彼方へ！ あれ、王が來るわい。

僧官其他行列を正して入來る。オフィリヤの遺骸を先に、

イヤアチーズ及び哀悼者多勢王、妃其他從臣等。

妃をはじめ殿上人。何者の葬送ぢやな？ 刺さへ不具の儀式は？ 疑ひ

もなく、こりや當の亡者は、亂心の餘り自殺をしたといふ標章ぢや。身分

の低くない者でがな。暫時かくれて様子を見う。

ホレーシオと共に物蔭へ退く。

レ

外には式ともござらぬよな？

ハム

あれはレーヤアチーズぢや、立派な若者ぢや。なう。

僧長

妹御の御葬儀は、宗法の許し申す限り、鄭重に仕つておじやる。御最期が疑はしうござつたによつて、大命のござりませすば、斯程恒例を曲ぐることも致さず、何の式も行はいで葬り、審判の喇叭の響くまで其儘に致しおき、まつた石、瓦、礫のたぐひを、後世を願ふ禱の代りに、死骸の上にも抛下くべきを、處女相當の花冠、式の如き撒花、鐘を鳴らいての送込までも許さ

レ

れましたは、何れも格外の處分でおじやる。

僧長

此上には叶ひませぬ。正しう世を逝つたる人々と同列に、これなる亡者に喝を唱へて安樂往生の勸め申すは、葬禮を瀆すの畏れ。

レ

土の中へ遺骸を入れい。……淨い美しい妹の肉中から、莖が生えいで、咲けいやい！……やい、情知らずの僧官どの、おぬしが悶轉つて吠える時分に、一定妹は天人ともなつてをらうぞ。

僧侶の一群入る。

ハム

や！ すりやオフィリヤが？

妃

(花を墓上に撒きて)いとしい人にとしい花を。さらばぢや！ 和子ハムンツトの妻ともならせませす日を頼うでゐたに。いとしいオフィリヤよ、そなたの新床を飾らうとこそは思ふたれ、墓地に花撒かうとは夢さら。

レー お、三重の禍災よ、十倍、三十倍ともなつて、残忍な行爲して汝の正多をば顛倒させた彼奴の素頭に落下れ！……待て土を、暫く待て、も一度妹を抱かねばおかぬわ。

と墓穴の中へ躍り入る。

さあ積み、土を積み、生身と死身の用捨は要らぬ、積んでく積上げて、此平地の中央へ、ペリオンはおろかオリンポスの雲に沖る大峯をも、眼下に瞰す山を作れ。

ハム (進み出で、) やあ、何者なれば業々しき其高言！ 汝が哀悼の語には、間斷無う廻る天の星も耳を駭かいて停止らうぞ。 予こそはデンマークの王嗣ハムレットぢやわい！

と同じく墓穴へ躍り入る。

レー おのれ、奈落に落ちをれやい！

と二人 掴み合ふ。

ハム そのつれな事を言ふは爲になるまい。これ、喉の手を放しめさ。 予は怒り易うも無う、まつた粗暴でもなければ、いざとなれば怖しいこともしかねぬによつて、用心するが利根であらうぞ。 放せ！

王 兩人を引分けい。

妃 ハムレットや、ハムレットや……

多勢 お二人とも……

ホレ まづ、お鎮りあらせられい。

侍臣等 二人を引分ける、二人とも墓穴より出来る。



ハム

はて、此事だけは、子の眼蓋の動く間は、彼奴と争はずにはおかぬわい。

妃

おゝ、ハムレット、此事とは？

ハム

オフィリヤを愛するそれがしの心の深さは、四萬人の實の兄が思ふ限りの愛を以ても決して及ぶことではないわ。……やい、汝はオフィリヤのために如何な事をする積ぢや？

王

こりやレーヤアチーズよ、ありや狂人ぢや。

妃

どうぞ堪へてたも。

ハム

さあ、誓文、何を爲よう氣か、それを見せい、泣かうとか、鬨はうとか？ 斷食せうとか？ うぬが身を裂かうとか？ 酔を飲まうとか？ 鰐を食はうとか？ はて、予もして見せうわ。汝は吠えうとて此處へお來やつたか？ 墓穴へ躍込うで予の面目を潰さうとや？ 何ぢや、一所に埋められたい、はて、予も一所に埋められうわい。山の高言を並べうなら、三人

妃

の頭の上へ億萬坪の土をも積め、積んでく積上げてオッサの高峯も疣か  
と見え、盛上つた大地の頂が日輪の火で焦げるまでも。いやさ、高言を吐  
かうなら、予も負は取らぬわい。

ハム

こりや全くの亂心ぢや。暫時あゝしておいたなら、やがては母鳩が黄金  
色の雛を孵いた時のやうに、おしだまつて鎮静らうわいの。  
これ、レーヤアチーズ。何故に足下は予を此様に扱ふのぢや。予は足下  
を愛してをつたに。……はて、鬨ふことはない。ハアキユリーズが有りた  
けの力を盡しても、猫は猫、犬は犬ぢや。

王

太儀ながらホレーシオ、彼れが左右に。……

とハムレット入る。  
ホレーシオ入る。

(レーヤアチーズに對ひ)昨夜言うたことを頼となし、今しばらく堪忍しやれ。



やがて彼の事を試う。……ガアツルドどの、和子に心を附けさしませ。……何れ此墓所には不死の碑を建てさせうす、すれば天下はおのづと泰平。まづそれまでは、何事も堪忍、堪忍。

皆々入る。

第二場 城内の大廣間。

ハムレットとホレーシオ入来る。

ハム 其事はそれだけぢや。さて他の一條ぢやが、一伍一什を記えておるやるか？  
ホレ 記えてとおつしやるは？

ハム いやなう、予心中に苦悶あつて、如何にしても眠りがたく、鐵枷に呻吟する暴徒にも劣る境涯よと歎するうち、ふと向不見に思立つて……あ、これぞ向不見の功德といふもの……深く計つたる事の敗るゝ場合に、一向の無分別が却つて大功を立つることがあるぞよ。荒削は人間がせうと、所詮の仕上は神力ぢやわい。

ホレ それは一定の儀にござります。

ハム そつと船室から起出で、海上用の外套を引掛け、暗中を探り探つて、目指す一品を求めたるところ、幸ひに望が叶うて、件の包をば手に入れた。すなはち我室へ立戻り、身を思ふの餘り、作法などを顧る違なく、大膽にも彼等が承り参つたる大命の書どもを開封のしたる處、何とホレーシオ……驚き入つた王が奸計！……デンマークの爲にも、英吉利の爲にも、ほつ！予を生かし置くは、怖しき事の限りなれば、此書一覽次第、寸時の猶豫も無

く、斧を磨ぐ間もあらせず立地に予が首を打落せと、種々様々な口實をば繕ひ立てし王が嚴命。

ホレ あらう事とも存せられませぬ！

ハム 其書面はこゝにある、後でゆつくり讀んだがよい。 さて其折、予が何と致

いたかを話さうか？

ホレ 何卒。

ハム まつ其如く、惡漢共に取圍まれたる絶體絶命……まだ腦中には是といふ開場

詞さへも出来ぬうちに、智慧が働いて、活劇をば演じはじめた。……すなはち予は座に着いて、新に國書を案文し、筆跡も見事に書認めた。嘗ては世の經世家と同じやうに、字を能く書くことなどは取るに足らぬ事と思つて、一旦習うたをも強ひて忘れうと力めたこともあつたが、今度こそはそれが忠僕の勤務をしたわい。 さて、何と書いたか、知りたいか？

ホレ 中々、承りたうござります。

ハム 王より英吉利王に宛て、懇なる依頼状……そもく英吉利は忠誠無二

の屬國なればとか、兩國の信義は常磐木の如く榮ゆべき筈なればとか、平和の神は常に小麥の花冠を戴いて兩國好誼の媒たるべければとか……かゝる負擔重き幾多の驚馬を列べ記し、書中一覽の上は最早寸分の躊躇もなく、懺悔をだに許さずして、此書持參の兩人をば立地に誅戮せらるべしと認めたわ。

ホレ して御印は、何となされました？

ムハ はて、それにもまた天の配劑。予平生隱袋の裡に、父王の印璽を所持しを

つたが、それをデンマークの國璽の模型。すなはち我認めたる命令書を式の如くに疊み、署名もし、捺印もして、安全に前の處に入れて置いた、取換兒とは誰れにも知られず。 さて次の日が海上の戦闘。其後の事共は

既にくはしう承知の筈。

ホレ すりやギルデンスタアンやローゼンクランツはさやうな身の果。

ハム はて、此處の役廻りを我から求めた彼奴等なれば、予は苛酷いとも思はぬわい。滅亡は自業自得ぢや。勇士が互ひに奮激して火花を散らす自刃の間へ匹夫下郎が入るのは兎角危いものぢやわ。

ホレ さて、驚き入つたる王の振舞！

ハム 何と此上は、當然の事では無いか……我父王を弑し、我母を弄び、我登極の望を遮り、剩さへ如是奸譎なる手段を以て我一命まで釣らうとせし奴……かゝる奴を誅戮なすは天の命する所ではないか？ かゝる人間の蝥賊を生けおいて、更に害毒を長せしむるは、それこそ墮地獄の大罪ではないか？

ホレ 程なく英吉利表より、かなたにての事の次第を、一定王の許へ申越すでござりませう。

ハム

いかに程なく。其時までは我有ぢや。人の命は「一」と言ふ程の間さへも無い。それはさうと、ホレーシオ、予はレーヤアチーズに對し、我れ

を忘れ、無禮を働いたを後悔するわい。我身の上に引當て、彼れが心根をも思ひやる。中直りをしてくれいと言はう。とはいへ、餘りに業々しう歎きをつたゆる、何ぼうにも堪忍がならなんだわ。

ホレ あもし！ 誰れやら參りました。

廷臣 オスリック 入來る。

オス 殿下にはようこそ御歸朝遊ばされました。

ハム かたじけなうおじやる。……(ホレーシオに對ひて) 此水蠅めをお知りやつてか？

ホレ (ハムレットだけに) いや、存じませぬ。

ハム (ホレーショオだけに) すりや予よりは運がよいわ、あのやうな奴を知つてをるこ

とは曲事ぢやまで。 彼奴は良い地面を澤山有つてをる。 牛馬でも、牛馬

中の領主となれば、随分國王の食卓へ秣槽を持込むことの出来る時勢ぢや。

彼奴は阿呆鳥ぢやが、泥土だけは、今もいふ通り 澤山有つてをるわさ。

憚りながら殿下、自然御間暇に渡らせられますならば、陛下より御申附

の儀を啓したうござります。

ハム おゝさ、謹み畏んで 承りませうす。 ま、其帽子を正當に用ひめされい。

それは頭に載せておくものぢや。

オス 忝うござりまするが、酷う暑うござります。

ハム いや、今日は酷う寒い、北風ぢやによつて。

オス 成程、随分とお寒うござりまする。

ハム したが、酷う蒸すによつて、予のやうな體質には暑いやうでおじやる。

オス 殊の外物でござります。 酷う蒸しますので、……どうやらその……物で

ござりまする。……いやなに、陛下より仰附られましたる儀は、此度陛下に

於せられて、洪大なる御賭を殿下のお爲に遊ばしました儀を啓し奉れで

ござりまする。 え、其仔細は……

ハム どうか、今言うたことを……

ハムレットはオスリックに帽子をかぶれと手で指圖する。

オス いや、全く。 全く勝手にござりまする。 え、新歸朝のレーヤアチーズ

どの儀は、實に彼人こそは何一つ缺所も無い名士でござつて、拔群な種々

の長所を具へをられ、應對振も嫺雅かでござれば、舉止風采も立派で、いや

實に剴切に論評ひませうならば、活きた禮儀の早見表乃至作法の撮要録と

もござりませうか、かりそめにも士君子たらん者の望みまする限りの諸の

美德をば、彼人は兼備へをられます。

ハム 評し得て遺憾なしぢや。もつとも彼れが長所や才能を一々分析しはじめたなら、餘り數の多さに記憶力が狼狽して、どう追驅けて見ても先方の船足が速いので、つい乗遅れとなるでもあらうが。いや、眞の事ぢやが、予は彼れを大器量人と信じをるわい。彼れが天分は、何ぼうにも貴く有りがたいによつて、物に喩へて評せうと思つても、似た物としては鏡に映る彼れ自身の影ばかりぢや、兎んや彼れの模倣をせうとする輩なぞは、只もう彼れが影法師たるに過ぎぬわ。

オス 殿下の御評言は周到適切にござります。

ハム して理由は？ いやさ、かやうな拔群な君子人を何故に蕪辭を以て推讃するのぢや？

オス へ？

ホレ 他の口では解せませぬかな？ はて、解せませうずに。

ハム 彼人の噂をめされたは何の爲ぢや？

オス レーヤアチーズどの？

ホレ (ハムレットだけに) 財布がもう空になつたのでござります、金言を費ひ果しましたので。

ハム (オスに對ひて) いかにも彼れの。

オス 豫てもお知識のあらせられます通り……

ハム いや、無いかも知らぬまでい。あつたところで格別嬉しうもおじやらぬ。さて？

オス お知識のあらせられます通り、レーヤアチーズどの長所の儀につき……

ハム いや知つてをるとは能い言はぬわ、彼れに劣らぬといふ自負自慢に類するのが厭ぢや。善く人を知るは自ら知るの謂なりとある。

オス 小官が申すのは、武器にかけてはござりますが、俗の評隘に因りますれば、

彼人の此長所は、天下無雙ぢやげにござります。

武器は何か？

細刃と短剣で。

それは彼れが武器中の二種ぢや。が、さて……

さて、陛下には彼人に對してバーバリー馬六頭を賭けさせられましたる所、

それに對して彼人質とせられましたは、承る所によりますると、佛蘭西製

作の細刃と短剣合せて六口、並びに飾帶、劍鉤などいふ附帶品。就中

釣懸機三箇は、優美の製作で、第一欄との調和もよろしく、風流を極めまし

たもので、雅致を盡いた細工にござります。

釣懸機と被言るは？

(ハムレットだけに) とくと御合點なさるゝまでには、何れ注釋書がお入用と存

じてをりました。

ハム

ホレ

オス

ハム

釣懸機と申すは劍鉤のことでござります。

腰に大砲でも垂下げてあるくやうになつたら、其様な言葉も似合はうが、ま

づそれまでは劍鉤であつてほしい。が、それから。六頭のバーバリー馬

に對して六口の佛蘭西劍、其附帶品並びに雅致を盡いた釣懸機か。とりも

直さずデンマーク對佛蘭西賭ぢやの。なんで如是なものが、御身が言はる

るやうに、「質とせられた」のぢや？

オス

ハム

え、陛下には、殿下と彼人と十二合お手合せあらせられます間に、三た

びの中以上を彼人の能い贏つことはあるまいとあつて、すなはち九に對す

る十二と賭けさせられ、自然殿下に於せられてお立合を許させられます

ならば、直にも御試合を催させられませうやうとの叡慮にござります。

オス

ハム

立つて逢ふのは否ぢやと言うたらば、如何ぢや？

いや、武藝のお手合せを遊ばされますことを申しましたので。

ハム

此室内を歩いてゐよう。御意とあらば、恰ど予が遊技の時刻でもあるによつて、試合剣をこゝへ持参したがよい。彼人にも異存なく、王の御意も變らぬならば、成るべくは勝ちませうぞい。爲損じたら、めつたに突かれて恥を曝すばかりのことぢや。

オス

その通り復命いたしませうや？

ハム

おゝさ、潤色はお心任せぢや。

オス

長へに臣が微衷を殿下に薦め奉りまする。

ハム

過分々々……

オスリック 入る。

自分と自身を薦め奉るも當然ぢやわい。彼奴の爲には誰一人人口を利く者もあるまいによつて。

ホレ

あの鼻は尙殻が取れぬ癖に善う走ります。

ハム

彼奴は乳を吸ふ前に乳房に辭儀をしをつたらう。彼奴をはじめ、總別澆季の世に歡び迎へらるゝ小鳥どもは、纔に時代の調子を手に入れ、辭儀口儀の只皮相を能う諳んじたに過ぎぬわい。泡沫同然の似而非學問で、箴別け、扇ぎ別けて七むづかしい世評の中をも潜り脱けをる。したが只一吹ふいてお見やれ、石鹼玉が消ゆるわ。

一 紳士 役 入 來 る。

紳士

殿下、陛下先刻オスリックを以て思召を薦めさせられましたる所、同人立歸り、殿下お廣間にてお待受の旨を復命 仕りましたるにつき、右レーヤアチーズとお立合の儀尙御異存のござりませぬか、或は御延期などにもござりませうや、承り参れとの御誕にござります。

ハム

予が心は變らぬ。王の御意次第ぢや。御都合さへ宜しくば、此方はいつでも宜しい。今でもよし、いつでもよいは、予の境遇に異變なくば。

紳士

兩陛下をはじめ御一同、只今お渡りにござります。

ハム

ちようどよい。

紳士

お妃より殿下に望ませられますは、お立合に先だちまして、何卒レーヤアチーズどのに對し、御和睦の御挨拶どもござりまするやう。

ハム

御庭訓かたちけなう承つたぞ。

紳士役入る。

ホレ

此賭は御不利にござりませう。

ハム

いや、さうは思はぬ。彼れが佛蘭西へ參つて以來、予も絶えず修行したわ。まつた數違ひなれば勝たうぞよ。……とはいへ此胸が、何としたか甚う堪へがたなう惱ましい、よもやおぬしは……なにさ、かまうたことでない。

ホレ

はて、それは何となされたので……

ハム

わつけも無いことぢや。恐らく婦人などならば、氣にもかけうすること

ぢやわい。

ホレ

お心が進みませぬならば、お止になされませい。兩殿下のお渡りをお止

ハム

め申し、お障りの由を申しませう。

ハム

何の〜。前兆などを氣にやせぬわい。雀一疋落つるにも天の配劑。

今來れば後には來ず、後に來ずば今來うよし今は來ずとも、いつかは一度來うすによつて、何事も覺悟が第一。残いてゆく世が我世でなくば、早う死なうとも何の事も無いわ。棄てゝおきやれ。

王、妃、レーヤアチーズ、殿上人多勢、オスリック及び他の從臣試合用の劍籠手等を携へて入來る。酒瓶を戴せたる卓子をも運

王

さう、ハムレット、こゝへお來つて此手をおとりやれ。

王はレーヤアチーズとハムレットとを握手さする。



ハム なう、予が罪を赦しめされ。無禮を働いたなれども、御身君子人たるからは、過ぎたるをば赦しめされ。列座のかた人も知らるゝ通り、まつた御身とても聞かれつらんが、予は狂氣の爲に痛く身や心を苦めたり。御身の情を害ひ、名を思ふ心を傷け、まつた義憤を立たせたるは悉皆亂心がさせたる事ぢや。ハムレットに於ては、未だ曾てレーヤアチーズに無禮を加へた覚えは無い。若しハムレットにして本心其身を離れ、彼れにして彼ならざるの時に無禮をレーヤアチーズに加へたりとすれば、それはハムレットの所爲ではない。ハムレットにはさる覚えは無い。すれば誰が所爲ぢや？狂氣の所爲ぢや。すなはちハムレットみづからも害を蒙つた一人ぢや、狂氣は不幸なハムレットみづからの仇でもおじやるわ。……かうかたぐの面前にて、底意なく誓言の上は、往る日の過失は、屋根越しに矢を放つて圖らず同胞を傷けたる一時の粗忽と恕しめされ。

レ

其お詞にて怨は晴れ、情だけは釋けましたが、武門の面目は格別、然るべき長者の和解によつて、それがしが名折とならぬやう、立派な先蹤とも示されませぬうち、いつかな和睦は仕りませぬぞ。まづそれまでは御懇情をば、お言葉の儘に、いたゞいておくでござりませう。

ハム

此上は隔心なく、お互ひに心を許いて、同胞づくの試合をせう。……試合劍を持つて。……いざ。

レ

いざ、こちへも。

ハム

レーヤアチーズ、をさない予が技は、象眼の地板も同然ぢや、おことの手練が照返されて、暗夜の星のやうに輝かうぞ。

レ

戲言をおほせらるゝ。

ハム

いや、神以て。

王

オスリック、兩人に劍をとらせい。……ハムレットよ、賭の義はお知やつてか？

ハム なかく。陛下には弱い方へ重い賭物を遊ばいたさうな。

王 双方の手並を知つたれば、懸念はせぬ。もつともレーヤアチーズの上達を思つて、数違ひにしておいた。

レー コリやちと重いわ。他のを見せい。

ハム これが氣に入つた。……長さには異りはないか？

オス 御意にござりまする。

ふたり立ちの身支度する。

王 それなる卓子に酒瓶を据ゑい、……もしハムレットが第一合か第二合か乃至第三合に於て相手方に報ゆるを得ば、あらゆる壘壁より祝砲を放たしめ、王はハムレットが未來を祝つて酒盃を擧げうぞ。まつた酒杯へは四代のデンマーク王が寶冠に著けた品にも優る眞珠を投せん。盃をもて。いざや王がハムレットの爲に只今祝盃を擧ぐる由を、銅太鼓を鳴らいて喇叭

手に傳へ、喇叭をして宮殿外の大砲手に傳へ、即て大砲をして九天の高きに傳へ、九天をして更に大地に傳へしめい。……いざ、はじめい……審判役ども、ぬかるまいぞよ。

ハム いざ。

レー いざ。

と兩人激しく突合ふ。

ハム 一つ。

レー いや。

ハム 審判。

オス あたり、正しうあたり。

レー よろしい。も一度。

王 まて。……注げ。……こりやハムレット、この眞珠はおことのぢや。めでたう祝つて飲むぞよ。

王 盃中に眞珠を投ずる。喇叭を吹鳴らす。奥にて祝砲の音。

ハムレットに此酒盃をとらせい。

ハム いや、此一番を果しませう。先づそなたに……いざ。

と激しく突合ふ。

も一つ。何と？

レ まるつた、かすり手。

王 ハムレットが勝たうぞよ。

妃 肥つてゐれば息が切れう……これ、ハムレット、此汗拭で汗を拭や。そ

なたの勝を祝ふ酒盃、妃が乾すぞや。

ハム かたじけなうおじやるが……

王 ガアツルド、それは！

妃 いえ、おゆるされい。

王 (傍を向いて) 毒を入れた酒盃！ あ、もう手おくれぢや！

ハム (妃に對ひて) それがしはまだ能う飲みませぬ。やんがて。

妃 こゝへおじや。その汗をふかうずに。

レ (王に對ひて) 今度こそは必ず手並を御覽に入れん。

王 おぼつかないわえ。

レ (傍を向きて) とはいへ、どうも心が答めてならぬ。

ハム いざ第三合。レーヤアチーズ、足下は本氣の立合をおしやらぬな。ある

限りの力で突いてお來やれ。予をなぶらうでな。

レ はて、さやう被言らば……いざ。

ト 又激しく突合ふ。

オス まだ、まだ。

レ しめた。

ローヤアチーズ一突、ハムレットを突く。激しき接戦になりて互ひに剣をとりかへ、とゞハムレット一突、ローヤアチーズを突く。

王 それ、引別けい！ 逆上したと見ゆるぞ。

ハム いや〜。も一度。いざ〜。

此うち妃毒に中りて倒れる。

オス や、お妃には……やあ〜！

ホレ や、双方ともに手負の様子……殿下、何となされました？

オス ローヤアチーズどの、こりや何となされましたぞ。

レー わが係蹄に山鷓の、我れからかゝる身の果。争はれぬ惡の報いぢや。

ハム 妃には何となされた？

王 二人が血を見て動顛したのぢや。

妃 いえ〜、その酒ぢや、その酒で……お、ハムレットや！……その酒で毒

害……毒害にあうたのぢや。

といひつゝ息絶える。

ハム お、さてこそ奸計！……やあ〜！ 戸口を固めませい！ 二心の者が

あるぞ！ とく其奴をさがし出だせ。

レー それこそはすなはちこれに。ハムレットさま、あなたの命ははやなきもの。

天が下にあるとある如何な靈藥を用ひても、もう半時とは保たぬお命。

今お手にある劍こそは、毒を塗つた其上に、切先さへも尖つたま、其奸計

の報いは靦面身に返り、御覽ぜよ、まづ此如く窮所の痛手に必死の有様。

御母妃は止しく毒殺。もはや物が言はれぬ。……王こそは……王こそは

發頭人！

ハム む、切先に……毒までも塗つたるよな！……ならば見事、毒の効果を！

ト王を目がけて飛びかゝり王の胸元を貫く。

皆々

叛逆！ 叛逆！

王

おゝ、助けくれよ、人々。

まだ手疵をば負うたばかりぢや。

ハム

やい、おのれ、非倫無慚、殘虐非道のデンマーク王！

……この毒を飲みほしをれ！ おのれの眞珠とはこれか？ 母上のあとを追へやい！

と毒を注ぎ入れる。王息絶える。



レ

おのが盛つた毒薬なれば、それぞ至當のおもてなし。ハムレットさま、最期に互ひの罪を赦さん。我々親子の怨は晴れたり、君にも我れをば怨まませたまふな。

と息絶える。

ハム

天其罪を赦したまはん！ 後より参るぞ。……ホレーシオ、予もこれまでぢやわい。……あさましい母上、おさらばでござります！……此慘劇に参じて色を失ひ、慄ひ戦き、一言の白もなき仕出しとも見物とも見ゆる人々よ、われに餘んの時あらば、冥府へ我れを驅立つる死の鞭の手の急ならずば、おゝ、語るべき事、いふべき事……あゝ、それはともかくもぢや。……ホレーシオ、もうこれまでぢや、御身は後に存へて、わが志を知らぬ輩に正當の事を傳へておくりやれ。その仰せには従はれませぬ。デンマーク人とは生まれましたが、志はいに

ホレ

しへの羅馬人にも劣らぬそれがし。幸ひこゝに残つた毒酒が……

ハム

男なら、渡せ、放せ。これは子が飲んでしまふわ。…… おゝ、おゝ！……

ホレーシオ、我が亡き後に如何なる悪名仔細の知れずば、残らうもはかりがたい。われを思ふ真心あらば、しばらく至幸に遠ざかり、憂世に苦しき命延はり、我がために一伍一什を……

進軍の喇叭。 祝砲の音聞える。

や、あの勇ましい物音は？

オス

あれこそはノールウエーのフォオチンプラスが、只今ポーランドより凱旋の折も折、イギリス國より使節の來著、それを迎ふる禮砲にござりまする。

ハム

おゝ、ホレーシオ、今ぞ死ぬる！ 激しき毒に心氣全く衰へたれば、イギリスよりの知らせ待つ間も保たぬ命。いまはに予は豫めフォオチンプラスを推し立て、我國の王嗣と定めう。事のこゝに及びつる始終の仔細を彼

の人に何卒語り……おゝ、餘は空寂！

とハムレット息絶える。

ホレ

拔群の御心も今こそは摧けたれ！……ハムレットさま、おさらばでござります。天使の歌に送られて安養世界へ登らせませい。……何とてこゝへ、あの軍太鼓は？

奥にて進軍の樂。 フォオチンプラスを先に、英國使節、軍太鼓、軍旗等を携へさせ、侍臣多勢をわて入來る。

フオ

それは何處ぢや？

ホレ

何物を御覽せうとや？ 惨むべきものまつた駭くべきものを見うすとならば、最早尋ねさせらるゝには及びませぬ。

フオ

大破壊を示す屍の山！ おゝ、傲り驕る死の神よ！ 如何な饗宴の準備を、地下永劫の庖厨にて、汝が今なさうとはするぞ、かく無慚にも只一彈に數

使節

多の貴人をば射殺すとは？

ても惨ましい光景！ 英吉利よりの御消息も時後れとなつたれば、大命の通り、ローゼンクランツ、ギルデンスタアの兩人が世に無き由を聴かせられうする耳も聳ひたり。何處にてか感謝の御言葉をば承らうぞ？

ホレ

王御存命におはさうとも、感謝のお言葉は述べられますまい。兩人を死罪の儀は、王の御意ではござらなんだ。それは格別、此大珍事の折柄に、君にはポーランド表より、兩卿には英吉利より、御來朝ありしぞ幸ひ、此死骸どもを高う壇上に据置き、小官御許の蒙つて、まだ仔細を知らぬ世人に、事の顛末を語りませう、かたぐにも聴聞あらせられませい。邪侈残忍不倫の行爲、ついで不慮の裁斷、まつた思はぬ殺戮、餘義なき苦肉の計略、乃至大詰の此惨事、企みし事の手筈狂うて企める者の頭上に應報せし一伍一什を小官つぶさに辯じませう。

フオ

疾うそれを承らう。國內の最も身分高き人々をば呼集へい。愁傷の折柄ながら、予は我運を抱き迎へう。予は本當國に若干の縁故あれば、此機を幸ひに、宿志を遂ぐる手續せん。

ホレ

その儀につきては、傳へ申すべき事のさふらふ。すなはち、多衆の同意を引寄すべき御方の御遺言。さりながら先づ只今の儀を行はせられませい、人心恟々たる今こそ肝腎、さなくば誤解陰謀などにて、何様の不祥出來仕らんも圖りがたし。

フオ

ハムレットどの、屍は、旗頭四人にて、みづから壇上に擔行させまい。機をだに得ば、拔群の英主ともなるべかりし王子なれば、武の樂を奏し、兵の禮を施し、其長逝を四方に告げい。……それ、死骸を擔上げい。……かやうな光景は戰場にこそふさはしけれ、こゝにては目もあてられぬわ。……いざ、砲を放たしめい。

死者を送るマーチの曲。死骸を擔荷うて一同入る。奥にて  
大砲の音。

ハムレット (完)

附 録

「ハムレット」とキッドが作との關係

「ハムレット」と題したる脚本は、シェークスピアの名を署したる二種の外に、遅くも一五八九年以前に、他の一作ありしと明かなるに似たり。其證は現にシェークスピアと同時代の作者たるナッシュが文中（一五八七年か一五八九年かの出版に係る狂言作者グリーンが著書の序）に「ハムレット」と題したる一作を嘲弄したる語句あり、又同じく狂言作者たるロッヂが一五九六年に公にしたる著書中にも「蟻賣の婢のやうに情無い聲をして『ハムレットよ憐れを復つてくれい』と叫く劇の幽霊」云々と記し、又同じく沙翁と同時代の興行師の一人たりしフィリップ・ヘンズローが日記—こ



は一五九三年より一六〇九年に亙るといふ——一五九四年の條下に「ロオド・チャムバレンお抱<sup>おぼ</sup>への一座ニユーイントンの劇場にて「ハムレット」興行の事」といふ一句の記入せられたるに在り。若し之を沙翁作と別物なりとせば、そもく何者の筆なるべき。沙翁の「ハムレット」が書肆の目録に記入せられしは、既に緒言中にも言へる如く、一六〇二年を初めとす。而して例の四つ折本として刊行せられしは其翌年一六〇三年にして、其扉紙には「ロンドン市内にても數回、キヤムブリッジ、オックスフォード兩大學其他にても數回演じたり」と明記せり。第二の四つ折本（第二版即ち現行「ハムレット」）は一六〇四年に出でたり、これには「デンマーク王子ハムレットの悲壯なる傳記、ウィリヤム・シェークスピア作、眞本によりて印刷したる増補本」といふ添書あり。第一版は三十二葉なるに此版は五十葉より成れり。そもく第一版は作者の校閲は勿論、許可をだに得ずして出版したるは明白なれども、かくまで長短あり、巧拙あり、筋立までも相違する所あるは、何に原因するか。出

版者が盜寫の際寫し落したるが爲かといふに、相違の要點が長短、繁簡のみにあらざる故に然りとも信せられず。予の臆測する所によれば、第二版の「ハムレット」と第一版との間には年代上大分の懸隔あるが如く思はる。近時の沙翁學者の説ける如く、第一版の方は原本「ハムレット」と多少密接なる關係を有するらしく、言はゞ改作にて、其出版の一六〇二年なるに係らず其改作せられしはそれよりも餘程前かたならんかと考へらる。一説には、改作せしは一六〇一年にして、恰も其頃彼のエッセックスの國事犯事件のためロオド・チャムバレンお抱の一座が朝廷向不首尾となりて困窮しをりしを救ひ旅興行に用立てんが爲なりしならん。（こは「ハムレット」中に旅稼ぎの俳優が「御改革で興行が出来ぬ」云々といふことあるに因みての臆測なるべし。）文句も脚色も甚しく粗笨なるは急場用の頓作なるが爲なり、故に一六〇三年に旅より立歸りし後現行本の如くに修補したるなり、云々。併しながら所謂第一版は作者の許可を経ざる書肆が専ら利の爲に盜寫し刊行した

るものなるを思へば、件の作は既に久しく歓迎せられをりし作と見る方當然なるが如し、一六〇一年に旅興行に用ひし作を其翌年に盗寫して出版するは聊か手際過ぎたるに似たり。沙翁の名を署したる改作「ハムレット」は一五九八年頃既に出來し居りて、原作の「ハムレット」を壓倒し、あちこちにて興行せられ、尙一六〇一年の頃には第二版の如く修補されて旅興行にも用ひられつゝありしを、書肆は利を思ふに急にして、最初の改作のまゝにて出版したるなりと見做すべきにはあらぬか。「御改革云々」の第一版にはなくして第二版にあるなども其一證と見るべくや。何れにもせよ、第二版と第一版との間には、出版年月の上に見えたるより以上の時の懸隔あるらしく、又第一版と原作「ハムレット」との間には小少ならぬ關係あるものゝ如し。

以上は出版の歴史上よりの推測ながら、作の内容に就きて觀るも、此作には種々の不審あり、それにつきては嘗て「早稻田文學」に物しおきし講話あれば、下に掲ぐ。

「更に内容の方面から觀ても「ハムレット」は三十七種の沙翁の作中で大ぶ手心を異にしたものである。沙翁の癖として稍歴史が、つたものになると、妙に歴史に拘泥するやうな傾きがある、成るべくは傳説の儘を利用しようとするが如き傾向がある。然るに此作は比較的傳説を立離れてゐると言へる。歴史の事實に據つた點は姓名と徒の荒筋だけだと言つてよい。主人公の性格は勿論、其言ふ事も大分に史實とは相違してゐる所から、そこで此作は作者自身の感想を「ハムレット」に假托して言はせたのだと言ふ十九世式の評もある位。例の *To be or not to be?* の獨白などはさういへば自傳的臭味を帯んでゐる。演劇術の講釋や劇評などに至つては此場の王子其の人よりも作者其の人に近い。要するに、主人公の性格が如何にも多面的で、傳説的人物と見えると同時に、作者の心的閱歷を暗示した一種抒情的の人物とも見え、多血的神經質の詩人肌の空想家とも見え、多少病的な併ししながら如何にも複雑な性格を有した天才者とも見え、彌、詮じ詰めてゆくと到底

実際には有りさうにもない純然たる想像上の拵へ物かとも見える程なのは、其の由つて来る所、疑ふらくは此作の一種特別な歴史にあるのではあるまいか。在來の批評家達に言はせると、ハムレットの性格は全く沙翁の獨創力によつて意識的に作られたものであるのだが、或は其幾分は寧ろ前の作から傳襲的に半無意識的に作り出だされたのでは無かつたか。改作し訂正し補修して行く間に何時と無くハムレットの性格が變遷して最初は頗る單純であつたものが怖しく複雑になつたといふやうな事があつて、見やうによつては稀有な併しながら幾らも世にあり得べき天才肌の、逸常識な人物とも見え、それに筋立が筋立ゆる眞狂か伴狂かなどいふ問題が纏綿して彌、以て複雑になり、かてゝ加へて沙翁が特得の讀者を魅し去つて、何時の間にか恍惚たらしめてしまふといふ筆の魔力が働いて、批評家など名宣る人々さへ、果は頭が混雜して、つい我知らずイリホガの理窟評に陥るやうになつたのでは無いか。それは何れにもせよ、今日ではハムレットの性格評に取

掛る前に先づ一應トマス・キッドといふ作者の事を取調べて見る必要がある。キッドが書いたらうと假定さるゝ其の「ハムレット」は傳はつてゐないが、幸ひに其の名作と評判の「スバニッシュ・トラジュディー」は残つてゐる。第一版の「ハムレット」と此作とを比べて見ると思ひ半ばに過ぐることがある。先づぎつとキッドの身の上を話さう。

十九世紀も半頃までは誰一人キッドを口にするものも無かつたのだが、其末に近づくにつれてキッド研究が盛んになつた。それは此作者が沙翁以前に於ける最も人氣のあつた作者だといふことゝ、前に言つた最初の「ハムレット」の著者だらうといふことゝが元である。フレデリック・ボアス氏のキッド全集（一九〇一年版）は同氏の緒論も附いてゐて重寶である。以下キッド及び原作「ハムレット」に關すること

は主として同氏の説に依る。キッドは五十年間も人氣を持ち続け、劇場は勿論、讀書界にまでも持囃され、其名作

「スバニシ・トラジエデー」(西班牙悲劇)の如きは和蘭や日耳曼でも翻案して登場したといふ。十七世紀の中葉ピューリタン宗徒全盛時代になつて漸く棄てられたといふことだから、沙翁の眞盛りにも尙地方などでは歓迎されたものらしい。其作柄は粗笨な淺薄な殺伐なもので、八文字屋本の小説や初期の草双紙などに似てゐる。其の狂言作者として持囃された鹽梅は我が南北物、默阿彌物といふ格。沙翁の傳さへも善くは傳はらぬ位だから、キッドの履歷などは勿論よくは解らない。一五五八年に生れて一五九四年か九五年かに死んだといふ事だけは慥かだ。別段組織だつた教育を受けたとは無く主<sup>おも</sup>に獨學的に種々の知識を得てゐたのだといふ事は其作によつて推測される。ルネサンスの當時拉典文學流行時代の事として何でも盛んに名作の拉典劇を読んだものらしい。恰も支那小説の流行つた徳川時代に三馬や京傳迄が半分方<sup>がた</sup>は拾ひ讀ながら唐本類を漁<sup>あさ</sup>つたと同じ道理。キッドが最も熱中して師表と崇めてゐたは拉典の作家中でも特にセネカであつたらしい。

「西班牙悲劇」<sup>スバニシ・トラジエデー</sup>の如きにはセネカの影響が歴々としてゐて、白中<sup>せりふ</sup>の名句なども彼れから數寫しに譯し來つたのがあるとポアスが指摘してゐる。尤も其頃はセネカ流<sup>はっ</sup>行で、苟も劇を口にするものでセネカを振廻さなんだものは無かつた、言はゞセネカは十九世紀劇壇に於ける沙翁といふ位置にあつた。で、セネカ劇の翻譯も既に幾らも行はれてゐた。キッドの同輩ナッシといふ作者が「近頃は英譯のセネカに精通した名作家があつて云々と冷評<sup>ひやか</sup>したのは、多分キッドを譏刺したのであらうといふ事。併しキッドはポアスの説によれば決して英譯に依つてのみ拉典劇を味ふといふやうな無學者では無く、自由に拉典文をも書き得たらしい、又ヴァジルなどの名句をも自在に引用するだけの學識があつた。されど獨學の悲しさには古代史や近代史の知識は乏しく、それがため時々妙な誤譯や間違をしたので専門家側の嘲笑を招いたといふ。「西班牙悲劇」の序幕中に言はせてあることなども事實とは違つてゐるのである。

「西班牙悲劇」の原版は幸ひにして三種まで傳はつてゐる、一は大英博物館本で、これには日附が無く、二は一五九四年出版の四つ折本、三は一五九九年版の四つ折本であるさうな。(僕は主として Schick といふ人が序と少しの註と字彙とを添へて校訂し出版したので讀んだ、ボアスの全集とはチヨイ／＼異つてゐる所がある。) 此作の出來た年代は、早くも一五八五年、遅くも一五八八年といふ間であらうといふ説。といふのは作の形式も内容も共に其頃の常套コンテシヨネで出來てゐる、例へば一行々々で讀切になるやうに無韻律語フランクヴァスを綴る筆癖と言ひ、夥しく頭韻を用ふること、言ひ、屢、押韻すること、言ひ、妙に古風な語を點綴する癖といひ、拉典語の挿入と言ひ、アルマダ艦隊に關する當込と言ひ、何れも其頃の作たることを證してゐるからである。さて然らば所謂原作の「ハムレット」は果して此作者の作であるかといふに、先づ當時の記録に據ると、何でも一五八六年頃に英吉利の俳優の一座がデンマークの王家から招かれてエルシノーアの宮中で幾回か劇を演じ、一五八九年の秋

に歸國したといふ事實があるさうだ、ところで彼のナッシが嘲弄の語を洩したのは此年だから、若しキッドが「ハムレット」を書いたとすれば此歸國前後であつたに相違無く、其世界がデンマークの有名な歴史的事實で、主な舞臺面がエルシノーアの王宮であり、又そこへ旅役者が參會し王子の命で宮中に劇を演ずることがあるなどは如何にも因縁が深く、右の臆測の事實に遠くないことを保證してゐるやうにも思はれる。今日傳はつてゐる第一版の「ハムレット」とキッド作の「西班牙悲劇」とを比べて見るに、筋立や仕組に於ても、人物の取合せ方に於ても、詞句の筆致に於ても、似てゐる點が著しい。先づ筋の上を言はうに、「西班牙悲劇」でも「西班牙と葡萄牙との間に公使頻に來往して談判する事があつて國際問題が一關鍵となつてゐるが、「ハムレット」でもデンマークとノルウェーとの間に同様の事がある、前者では副王の嗣子が捕虜になつてゐるので談判が始まり、後者ではノルウェー王の甥の謀叛が問題の因となつてゐる。 西班牙悲劇には將軍の子ホレシオと西班牙の公主

ペルイムピリヤ姫との薄倅の戀があり、「ハムレット」にはオフィリヤの哀れな戀がある。ペルイムピリヤ姫の兄は姫とホレシオとの仲を裂き、ポローニヤスとレーヤアチーズとはオフィリヤに戀を思ひ切れと意見する。兄は何方どろの劇でも多少殘忍な男で、又二人とも一時バリーに往つてゐた者で相手の王子とは敵同士である。それから「ハムレット」ではハムレットとレーヤアチーズとが二人ながら父の仇を復せんと欲し、「西班牙悲劇」ではヒエロニモといふ將軍とバジュルトーといふ老人と二人ながら其子の仇を報いたいと志す。そればかりでない、双方共劇中劇といふ脚色が用ひてある。剩さへ雙方とも復讐の手段として劇を演ずるのである。尤も「ハムレット」では劇中劇を演ずる者は主人公が舊知の俳優であり、「西班牙悲劇」では男主人公ヒエロニモ自ら扮して劇の仕草に事寄せて仇敵を皆殺しにするといふ仕組だから、脚色の鹽梅は全く違ふ。其他前々に並べた類似も單に關係が似てゐると言ふだけ若しくは捕へかたが似てゐるといふまで、人物の性格も著し

く違へば段取や味ひは丸で違ふ。併し古い淨瑠璃の仕組が似通ひ、草雙紙の脚色が相類してゐるほどには似通つてゐる。蓋し斯ういふ人物や斯ういふやうな筋や關係やが其頃の人氣に叶つたのであらう。無論此第一版の「ハムレット」は沙翁の改作に係はるものだから、キッドの原作とは餘程變つてゐるものであらうが、それですら是程には似てゐるとすると、所謂原作は更に一段「西班牙悲劇」に近い點があつたであらう。果してそれは如何どんなであつたらう。

茲に一八五七年の頃獨逸の學者で所謂原作「ハムレット」に最も近からうといふ作を紹介した人があつた。其作は今寫本で傳はつてゐるので、外題は「兄殺しの應報」とあつて、一説には一六〇三年頃に英の旅役者が獨逸へ來た時分に持つて來たのが傳はつたので、是れこそ原作「ハムレット」其物で無いまでも、ほぼ其面影を止めた者であらうといふ推測が一時大ぶ勢力を得た。幸ひ此「兄殺しの應報」の英譯はフアネスの集註に載せてあるから、第一版の「ハムレット」とも「西班牙悲劇」とも

比較して見ることが出来る。併し沙翁學者達がおひくく研究を重ねた結果、此獨逸の「ハムレット」は恐らく第一版の「ハムレット」を後に獨逸の其頃の式に引直したものとるに過ぎぬであらうとの説が勝を得て来たといふ事で、つまり原作「ハムレット」は今以て如何なものやら解らんで終つてゐる。第一版本の「ハムレット」には慥かにキッドの手跡が見えるといふ事さへも學者によつては異存がある。例へばダウデン氏の如きはそんな事はない、悉く沙翁の筆だと言つてゐ、ポアス氏は一々證句を擧げてキッドの筆致と似てゐる所以を證明せんと試みてゐる。何れにもせよ、沙翁はその壯時に於ては、譬へば先づ木下藤吉郎のやうな男だ、信長に比すべきマローローに師事して、時に柴田、瀧川、丹羽、佐久間などに比すべきグリーンやキッドやピールやの長所を觀察し、必要に當つては（或は半無意識かも知れんが）隨意に之れを攝取することを別段不見識とは思はなんだ跡が見える。グリーンが例の悪言を放つて剽竊呼ばゝりをしたのも一理あることかと思ふ。其初期の作と

假定せらるゝ「タイタス・アンドロニカス」がキッドの作風に酷似してゐるのを考へれば、キッドの作を改作するなど言ふことも無さうな事では無い。原作の「ハムレット」はキッドの作であつたにしても「西班牙悲劇」のやうに歡迎されなんだとは慥かで、無論印刷に附せられたことなどは無く、一五九四年にヘンスローが再興して登場したが不當り、次に一五九六年に一回、一六〇二年に一回の興行をしたが、何れも大した當りでは無かつたらしい。つまり沙翁が手を入れたまで凡そ十五年間程は中間ぶらりの脚本、其間に定めし彼方此方と色々の興行人の手に渡り、色々の作者の手にも觸れ、臺帳は幾たびも添削されたであらうといふ事。ベン・ジョンが「西班牙悲劇」を敷衍して上場し大當りを博したとあるといふ事實に照らしても此説は中らずと雖も遠かるまじく、或はジョンソンの向うを張つて一六〇二年頃に既に幾たびか手の入つてゐた原作「ハムレット」に沙翁が手を入れたのでは無いかといふ評、それこれ考へ合せて見ると、今の所謂「ハムレット」には随分長い

複雑な履歴がある譯で、無論其眞價値は一へに沙翁が獨特の大想像力に由來するものであるのだが、其筋立や主人公の性格やが妙に神秘的に込入つてゐる仔細に至つては寧ろ此履歴を参照して解釋したほうが當然かと思ふ。極言すれば「ハムレット」の筋立と其主人公の性格だけは個人によつて一時に製作されたと言ふよりは、多人數の手に渡るうちに自然に化醇エテラウしたと言つたほうが當つてはゐまいか。言ふまでも無く今のハムレットの性格に纏綿する深邃な心理的感興は主として沙翁が獨創である、彼の第一版では特に近世的と見做すべき程の性格でも無かつた主人公を、ゲーテ、コールリッチ以下種々の精緻な、時としては過巧な分析に相當するやうな病的情意の不可思議な人格に仕立上げたのは、それは勿論沙翁の力だが、尙其の如何にも複雑で混沌としてゐて、處々ところどころは矛盾し、狂とも見え佯狂とも見え、薄志とも見え、勇敢とも見え、情深くも見え、残忍にも見え、つまり批判する者の心々で千差萬別ともなりかねないのは、一つは此作が一個人の頭腦のみから生れてゐ

ないからでは無いか。又此作が學者受、見功者受がよいばかりで無く、如何なる社會の讀者觀客にも喜ばれるといふのも、同じく種々の要素の結合、種々の頭腦の貢獻から成つてゐるが爲であらう。トマス・キッドが草雙紙式狂言作家としての舞臺的技倆に加ふるに、幾多實演上の經驗にもとづいたる添削、それに附け加へて大沙翁が雄大な想像、精細深刻な心理觀察、及び其空前にして殆ど絶後とも評すべき靈妙富贍、縦横自在の詞句ことばの音樂、それやこれやが融會混合して渾然たる一塊と成つたのが今の「ハムレット」だとすれば、此作の企及しがたき理由も解しがたくなり、其の何となく矛盾の素を含んでゐるやうに感ぜらるゝ理由も解しがたくなり、其の主人公の性格が今尙疑問となつてゐる理由も解しがたくなり。』

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

何れにしても今は最早ロマンチズム全盛時代に行はれたやうな主觀的批評を主にして論理的遊戯に耽る時代ではない。其たぐひの批評にも興はあり、利もあら



發行所

東京市牛込區  
早稻田

早稻田大學出版部  
(振替口座東京一二二三番、大阪六八九〇番)

(製複許不)

附 票 ト ツ レ ム ハ  
錢拾五圓貳金價正

印 刷 者	發 行 者	譯 者
東京市牛込區 渡邊八太郎	東京市牛込區 種村宗八	東京市牛込區 坪内雄藏

大明明明明明明明  
 治治治治治治治治  
 正四四四四四四四  
 二一十十十十十十  
 四四三三三三三三  
 年年年年年年年年  
 六二五四二二一一  
 月月月月月月月月  
 十二一十五二十五  
 五十五十一五十二  
 日日日日日日日日  
 十九八七六五四三  
 版版版版版版版版  
 發行發行發行發行  
 行行行行行行行行

大大大大大大大大  
 正正正正正正正正  
 十十十九九八七五  
 三二一十年年年年  
 六二一十八四八八  
 月月月月月月月月  
 十十一一十五十五  
 日日日日日日日日  
 十九八七六五四三  
 版版版版版版版版  
 發行發行發行發行  
 行行行行行行行行

→[刷印社 會 式 株 獨 印 清 日]←



附 錄

うが、特に劇としての研究には何等益する所のないことを記臆せねばならぬ。









文藝博士坪内逍遙譯

沙翁傑作集

(第十六編)

お氣を召すま

(三版) 三色版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢

沙翁が幸福に暮らしてゐた得意時代の作であるので、彼れの喜劇中の最も陽氣な、最も愉快な作だと稱される。読む者も自然と暢氣な晴々とした心持になる。「牧歌的」と特稱される作である。田野山林の詩趣が横溢してゐる。或部分は品のよい喜劇劇とも見られる。舞臺が主として深林中なので、野外劇の脚本にもされる。清浮な、無邪氣な、可憐な、高雅な作意であるから、外國では女學校の餘興用に歡迎してゐる。既譯十五卷中のどの作とも違つてゐる。處に此作の特色がある。

沙翁傑作集

(第十七編)

ちやく馬劇さく

(再版) 寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢

沙翁立身前後に流行つた、フランス仕立の思ひ切つて變から式な喜劇の代表作である。其れ自ら一喜劇である開幕劇へ、本筋の喜劇を編み込んだ趣向が、先づ最も珍らしい。雷聲が雷娘を難なく征服する段取に至つては更にをかしい。下思議に今も尙歡迎される喜劇である。我國では其幾場かは融案された。本譯には例の挿繪以外に特に名優の寫眞數葉を挿入した。沙翁の喜劇中の最も分り易いから讀みたいと思ふ人は、先づこれからお讀みなさい。

文藝博士坪内逍遙譯

沙翁傑作集

(第十八編)

十二夜

(再版) 寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢

既刊「お氣を召すま」の姉妹篇である。學生の同胞の女の方が故あつて男装してゐるの間違ひの種になる作意である。此間違ひを骨子とした點だけは作者の習作期の或作に似てゐるが、劇詩としての價値は無論較等優つてゐて、沙翁が作中、喜劇としては最も純粹なものとなせられ、今尙愛讀もされ、實演もされる。既刊のどの作とも異つた味だから、之を讀むと沙翁の創作力の彌、出てて彌、無盡蔵なことが分る。上品な滑稽、高雅な戲謔の上乗である。

沙翁傑作集

(第十九編)

コリオリハナス

寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢

ニイチエの超人道徳の標本のやうな傲岸不敵の貴族を中心にして、其周圍に渦巻くアリストクラット對プロレタリアの黨争を経緯とした作である。専ら男性趣味と政治的感興で終始し、一の挿話をも一の戀愛情味をも粧點しないで鋭く性格悲劇としての筋を一貫したのが沙翁集中の異例である。特權階級の専横、武斷政治の弊、平和と戦争の得失、所謂多頭の怪物たる群衆の蠢動、選挙期に於ける俗政治家の戸別訪問等、ところどころ現代に對する批判や諷刺が皮肉にも露寫されてゐるのが面白い。

發行所 東京早稲田大學出版部

發行所 東京早稲田大學出版部

文 學 博 士 坪 内 逍 遙 譯

沙翁傑作集

(第二十編)



四六判美裝  
口繪及插畫多數  
定價貳圓五拾錢  
郵稅十二錢

沙翁が最晩年の三大ロマンチック劇の隨一で「テムベスト」や「冬の夜話」の姉妹篇です、女主人公イモージェンは作者の理想的淑女だと推想される、筋も脚色も趣味情調も不思議に我歌舞伎劇に似てゐる、本篇は當譯集の最終巻だから譯者か過去十六年間の工夫を語る長篇の翻譯苦心談が添はつてある、それは世のクラシックを讀む人及び譯する人の絶好指針です、例の通り豊富な挿畫、コロタイプのお繪が三葉、エレンテリーのイモージェン、青年期のゴルツンクレーグの王子など

この沙翁傑作集は、嘗て一九二二年の春、英國皇儲御來朝の際、記念品として、わが早稻田大學から親しく捧呈したものであつて、こゝに我國も世界文化國の一としての存立を明示するに至つた。我々は文化國民としての歡喜を知ると同時に、譯者坪内博士の功績を永遠に禮讃したい。

發行所 早稻田大學出版部

坪内逍遙著 特製

(口繪、見返し繪、假面圖) 貳圓貳拾錢  
を始め凡て美麗を極む 郵稅八錢

家庭用兒童劇

第一集

目次

狐と鴉	メレー婆さんと其飼犬
こだま	觸る金
獅子と虎の喧嘩	鳥の裁判
親雀と子雀	をろち退治
蠅と蜘蛛	龍宮
田舎の鼠と東京の鼠	附録
神樂師の息子銀吉	家庭用兒童劇に就いて

坪内逍遙著 特製〔口繪、見返し繪、假面圖〕  
（を始め、凡て美麗を極む） 郵税八錢

# 家庭用兒童劇 第貳集

## 目次

- イソップ
    - わるい友だら
    - 鼠の會議
    - 榲と芒
  - 日本神話
  - 因幡うさぎ
- 
- 大國ぬし
  - すくなびこな
  - 高まが原
  - 國ゆづり
- 附録  
歌劇化をもち退治

坪内逍遙著

# 家庭用兒童劇 第三集

## 目次

- 二つの猫
  - 太陽と樵夫
  - 正直な魚煎餅
  - なめくちとばつ
  - 大きな魚煎餅
  - 見え坊の阿呆がらす
  - 象と六人のめくら
- 
- 穴忠義な鷹
  - 風かたはも
  - 小さい娘になつた猫
  - うぬぼれた風見草
  - いつまでもつらくお話し
  - 美しい歌



坪内逍遙著

小川治平氏畫  
実戸左行氏畫

# 學校用小脚本

定價貳圓  
郵税八錢

坪内博士の家庭用兒童劇は關西四大都市の成功的巡演によつて彌、其眞價を認めらるゝに到つたが、博士は今や我社會の現状に鑑み更に新意を凝らし、特に學校用公演用に適すべき大小七種の少年劇脚本を創作せられた。何れも博士獨特の斬新輕妙な構案に成つたもので、其多くは小歌劇の形式で綴られ、題材も其取扱ひ方も在來の所謂童話劇とは其撰を異にし、大人の讀物としても趣味深いものである。舞臺裝置、扮装等の指圖も深切を極め、挿圖も作意に副つて妙を盡してゐるから、直ぐにも公私の實演用に役に立ちます。

早稻田大學出版部

東京  
東區  
牛車水  
三二一  
〇〇九八六  
大坂

坪内逍遙著

# 兒童劇の藝術と演劇

定價壹圓八拾錢  
郵税八錢

## 略目

- (一) 現世紀の三特徴
- (二) 現代に於ける女性の任務
- (三) 遊戯の藝術化
- (四) 兒童劇の進化
- (五) 兒童劇の種類及び使命
- (六) 兒童劇の效用
- (七) 兒童劇に對する種々の杞憂
- (八) 兒童劇の扱ひ方
- (九) 結論

早稻田大學出版部

東京  
東區  
牛車水  
三二一  
〇〇九八六  
大坂

—(成 完(卷六)部 全)—

イブセン傑作集

四六判布製函入  
每册口繪數葉入  
全部六十五卷  
各壹圓五十錢  
郵稅各十錢

- |                 |          |         |          |
|-----------------|----------|---------|----------|
| 1 島村抱月譯         | 人形の家     | 4 坪内士行譯 | 小さいアイヨルフ |
| 2 島村抱月譯         | 海の夫人     | 5 坪内士行譯 | 野        |
| 3 坪内士行譯<br>島村民藏 | ロスマルスホルム | 6 坪内士行譯 | ヘツダ・カブラー |

北歐ノルエーの僻地に生れ社會劇の大作を出して歐米の思想界を震撼したのはイブセンである。婦人の自覺、婦人の解放、婦人の獨立を題材とした「人形の家」が本譯書に依て屢々我が劇壇に演ぜられて女大學主義の守舊家を戦慄させた事は誰も知つてゐる。彼の作は何れも傑作ならぬは無いが茲に譯出した六作は傑作中の傑作である。而して譯者は我劇壇文壇に隠れもない島村抱月、坪内士行の兩氏及び島村民藏氏であるから其譯筆の如何は言ふに及ばぬ。

發行所

東京牛込 早稻田大學出版部

藏印  
書尺

明  
為  
八  
分  
序

都  
馬  
果  
阿  
小  
島  
江  
吉  
村  
世  
江  
智

一  
書  
也

師  
長  
迎  
之  
在  
一  
月。

Emery  
S. Morooka  
on hand

Shizuokaken Tagatagun kma-  
mura Kitama Asa machiya 15  
one banchi

Shigegaki. morooka

Soyun skona Machi nene 2/16  
jussataw nijagonchi

I read the book the first.  
The sakuten bar - three hundred.